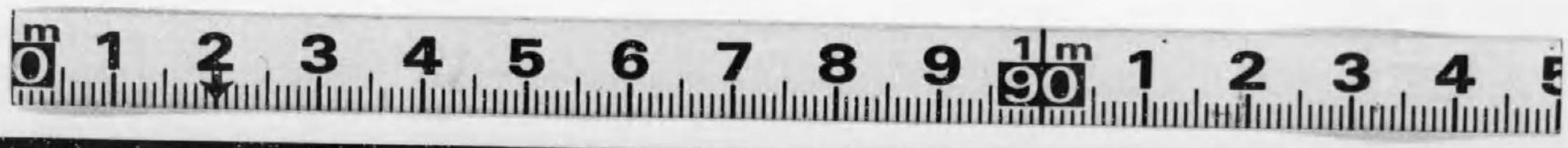
設



525
288

525
288

曾子義解

附孝經小解

校學中江私
教論
谷口爲次著

文川書店發兌

530-25 [illegible]
56

東京帝國大學教授文學博士
鹽谷温先生序文
松江中學校教諭
谷口爲次著

曾子義解

附孝經小解

立川書店發兌

大正
15 月 4
内交

525-288

曾子義解の序

夫れ孝は德の本なり、人の行孝より大なるはなし。故に五倫の道父子を首となし、孔門の敎孝弟を先となす。老子曰く、六親和せずして孝慈ありと。老子の孝慈を黜くるは、その見る所同じからざるなり。六親の方に和するや、孰れか孝慈に非らん。未だ孝慈にして六親の和せざるものあらざるなり。是を以て古來明王皆孝を以て治國の要道となし、唐の玄宗は御註孝經を撰して天下に頒行せり。而して本朝に在りては、孝謙天皇最も孝經を重んじ　天下に詔して每戸に一本を藏せしめ給ひ、　淳和天皇は皇太子の御讀書初に孝經を進講せしめられ、爾來久しく此例に從へり。

抑〻我が國民の忠孝は固より天性に出づと雖も、亦未だ列聖敎化の餘澤に由らずんばあらざるなり。明治新政の後、專ら範を歐米に取りて諸般の制度を定められしより

西洋の物質文明は東洋の古道德を破壞し、彼の個人主義は我が家族制度と相容れず、學校の敎科も亦智育に偏して科學を重んじ、修身道德を輕視するに至りしかば、品性の陶冶、人格の修養の如き到底期すべからず。況んや世界大戰の後を承け、思想界の混亂せるに乘じて、過激思想は燎原の勢を以て我が國の上下を襲ひ、淳風良俗を擧げて根柢より覆さんとす。此の如くにして止まずんば、邦家の前途岌々として危い哉。是時に當りて中流の底柱となり、狂瀾を既倒に廻さんと欲せば、須らく敎育勅語の聖旨を奉戴して、國體の精華を發揮するに務むべし。要は各人の孝道を家庭に行ひ、進んで國民精神を振興するに在り。

廻瀾谷口君、新に曾子義解を著はし、序を余に徵せらる。抑〻曾子は孔門中に在りて至孝を以て聞ゆ、夫子の晩年に於ける最愛の弟子にして、一貫の道を傳へ、孝經を授けられたり。曾子十卷は蓋しその著に係り、今大戴禮中に收めらる。その說孝弟忠信を本となし、空言空論を事とせず、孝經と共に東洋道德界の二大寶典と稱すべし。而して孝經は遍く世に行はれ、古來の註釋も多く、その書汗牛充棟も啻ならざるに、曾子に至りては、本邦の先儒之が訓解を試みたるものなし。今君始めて本書を撰し、博く曾子の學說を紹介せるは、學界に貢獻する所決して尠しとせず。且つ字義を解き通解を述べ、平易簡明を主としたれば、何人も容易に了解し、聖人の道に進むを得べし。その世道人心を維持し、國民道德を涵養するに於て、效果の大なるべきは固より余が贅言を待たざるなり。

顧ふに君の先人勉齋山村先生は、我が曾祖考宕陰先生に從ひて游ぶ、余も亦君と相識る。夫れ孝は繼志述事より大なるはなし。君は名家の子を以てよく箕裘を襲ぎ、育英に從ふこと多年、今復本書を著はして尊考の第十七回忌の祀典に供へ、併せて孔夫子の卒後四十周甲の追遠記念となす。豈その身に於て親しく孝道を實踐せるものに非

ずや。世の空言を以て名を釣り譽を沽るものと同日に語るべからざるなり。余居常君を視て自ら勵む。今春外艱に丁りて風樹の歎に堪へず。聊か所感を逃べて卷首に弁す。

大正乙丑臘月

節山　鹽谷　溫

曾子義解目次

曾子立事第一……一
曾子本孝第二……五八
曾子立孝第三……六七
曾子大孝第四……七八
曾子事父母第五……九八
曾子制言上第六……一〇九
曾子制言中第七……一二九
曾子制言下第八……一四六
曾子疾病第九……一五四

目次

曾子天員第十……一六七
附錄
孝經小解……一九三

曾子義解

例言

一　大戴禮中の曾子十篇は、儒教道德に於ける重要なる記錄なるに、未だ多く行はれず。依つて之に略解を施して世に問ひ、以て孔夫子二千四百周年を記念せんとし、大正十一年五月稿を起し、翌年四月功を了す。同年恰も先考の第十七回忌辰に當るを以て、靈前に奠供して蘋繁に代ふ。

二　本書の述義に當りては、盧辯の大戴禮記註、孔廣森の大戴禮記補注、王樹枏の大戴禮記補注叙錄、阮元の曾子注釋、汪中の大戴禮記正誤、汪照の大戴禮記注補等を比較參考せり、而して王聘珍の大戴禮記解詁を觀るに及ばざりしを憾とす。

三　本書の解釋は分つて字義と通解となす。字義に於て語句を訓詁し、通解に於て

大意を釋明せり、卷頭に略傳と解題とを擧げ、聊か讀者の津梁に供す、曾子の學說思想については更に他日を期せんとす。

四 余固より謭劣加ふるに地僻にして師友典籍に乏しく、研鑽涉獵に便ならず、本書の講述が謂はゆる習はざるを傳ふる無きかを恐る、唯本邦に於ける曾子の單行に一鞭を着し、斯文に涓埃を効すを得ば幸甚なり、冀くは大方の諸君子、微衷を諒とせられ敎正の榮を賜はらんことを。

五 東京帝國大學敎授鹽谷溫先生は特に高序を賜ひ、第三高等學校敎授佐藤廣治君は珍藏の書を惠貸せらる、謹んで厚情を謝す。

六 本書、筐底に藏すること久し、大阪文明堂主人、版に付して時弊の一砭たらしめんと請ふ。乃ち熊澤蕃山先生の孝經小解を合せて之を託す。

大正十四年九月　著者誌す

先考第十七回忌辰　鄉行香

淚餘賦此以奠

泣向墳前供藻蘋。　流年十有七回新。
花飛細雨斜風夕。　鳥咽空山古寺春。
樹老唯存垂帳跡。　水淸無復濯纓人。
箕裘未就頭將白。　奈此生來不肖身。

大正癸亥四月　叔男　爲次　再拜

天地によく事ふる道を仁とし、よく事ふる人を仁人と云ふ。親によく事ふる道を孝とし、よく事ふる人を孝子と云ふ。仁人の天によく事ふるは仁なり。孝子の親によく事ふるは孝なり。禮記に、仁人の親に事ふるは天に事ふるが如く、天に事ふるは親に事ふるが如し。是故に孝子は身を成すといへり。親に事ふるには愛を重くし、天に事ふるには敬を重くす　愛敬をつくして天に事へ親に事ふるは其身の德行を成就する道なればこれを身を成すといふ。天は地をすぶ　地は天の内にあり、故に天道をいへば地道は其の内にあり。天に事ふれば、地に事ふるも其の内にあり。

貝原益軒

曾子解題

漢書藝文志に曾子十八篇とあり、隋書經籍志には曾子二卷とある。四庫全書簡明目錄には「曾子一卷、宋の汪晫編す。漢志に曾子十八篇を載せ、隋志唐志皆二卷に作る。高似孫(宋)の子略、陳振孫(宋)の書錄解題に、皆載せて曾子有り、是れ宋の時尙傳本あり、晫蓋し其の未だ備はらざるを以て重ねて之を輯す、凡そ十二篇、其の强ひて篇名を立つる頗る杜撰と爲す、　然るに宋代舊本已に佚す、之を存して尙ほ曾子の崖略を具ふ」とある。四庫全書總目提要に載する所の十二篇の題目を覽るに、本書即ち大戴禮傳ふる所の十篇とは全然異なつたものゝやうである。

大戴禮は漢の戴德が編纂して傳へたものである、戴德の弟が戴聖であつて、其が傳へたものが小戴禮即ち禮記である。孔穎達は「大戴禮は遺逸の書にして、文假託

多し、學官に立たず、傳ふる者無し。」と言つてゐる、史繩祖が「大戴記の一書は之を十四經に列すと雖も、然も其書大抵家語の書を雜取し、分析して篇目と爲す。」といへるによつて觀れば、宋代に在つては十三經の外に此書を加へて十四經と言つたが、小戴禮の盛行に伴はれて、大戴禮は其勢力を失つたやうである。朱子は「大戴禮は冗雜、其好處は已に小戴に採錄せられ、禮記と倣り了す、然れども尙ほ零細好處の在るあり。」と言つて居る。此曾子十篇の如きは謂はゆる好處中の好處であると思ふ。

漢書藝文志には十八篇とある、現在の大戴禮には十篇あるのみなれば、八篇は散逸したものである。朱彝尊の經義考に「按ずるに香溪范氏云ふ班生儒家の書を志すに、曾子十八篇あり、今其存する者十篇のみ。餘の八篇何等の語たるを知らず、意ふに魏晉の間に亡びしならん。」と言つて居る。現存の十篇が果して當初の篇と同一な者であるか否かは固より明かではないが、とにかく禮記中の大學や中庸が宋に至つて單行せられてゐるやうに、大戴禮中の曾子も夙に單行せられてゐたのであらう。

隋書經籍志に「曾子二卷魯國の曾參撰す。」とあるけれども、今の曾子を觀れば「曾子曰」の敬語を用ひてゐる。自分の著書に自分のことを曾子といふことは無い筈である。論語中に「曾子曰」「有子曰」の語があるによつて論語の編纂は曾子有子の門人であらうといふ說(此は程子の說であつて冉子閔子に至つて窮するが)がある程であるから、曾子の一書は曾子の言行を、其門弟子が記錄した者と見るがよいと思ふ。胡寅が孝經について、「孝經は曾子自ら作る所に非ず、曾子孝を仲尼に問ひ、退いて門弟子と之を言ひ、門弟子類して書を成す。」と言つてゐるが曾子の書も亦さやうに言ふことが出來るのである。

大戴禮が我國に傳來した年月は明かでない。從つて曾子が何時頃から邦人に讀ま

れたかは不明である。桂湖村氏の漢籍解題に「我國に傳來せるは何朝なるや審かならず。然れども令義解、日本國見在書目錄、菅蠡抄、通憲入道藏書目錄、台記等皆之を載せざれば、王朝時代には非るべし。二中歷に此書十三卷を載せ、佐世が目錄に見ねざることを記せり。然らば則ち其渡來は或は北條足利時代に在りたるか、考を俟つ。元祿五年淺見綱齋校刊してより、漸く世に行はる。」とあるが、曾子は本邦に於ては未だ單行本としては行ばれてゐないやうである。

曾子の注釋書としては、張之洞(清)の書目答問に

大戴禮記盧辨注	十三卷	盧　辯(後周)	
大戴禮記補注	十三卷	叙錄一卷	孔廣森(清)
大戴禮記解詁	十三卷	叙錄一卷	王聘珍(清)
大戴禮記正誤	一　卷		汪　中(清)

曾子注釋　四　卷　阮　元(清)

の書を擧げてゐる。此中盧辯注は漢魏叢書中に收めてあり、補注と正誤と注釋との三種は皇清經解中にある。なほ此外に汪照(清)の大戴禮記注補十三卷　王樹枏(清)の校正孔氏大戴禮記補注十三卷がある。

物質文明の進歩に伴れて、歐米の思想は善となく惡となく潮のやうに侵入し來り、社會主義とか個人主義とかいふ者が、在來の家族制度をかき攪し　東洋道德の精華であり、東洋道德の淵源である孝道が、著しく衰頽しつゝある事は誠に長大息の至である。狂瀾を既倒に廻すが如きは、固より余輩微力の及ぶ所ではないが、本書が溷濁せる現代の思想界に向つて一服の清涼劑たることを切望してやまざる者である。

孝の本義

中江藤樹

畢竟は明德を明かにするが孝行の本意にして候ふゆゑに、心にむさとしたる一念を起し、或は怒るまじき事に腹を立て、喜ぶまじき事を喜び、願ふまじき事を願ひ、悔いまじき事を悔み、畏るまじき事を畏るゝも皆不孝なり。一言の僞りも不孝なり。まして不義無道を身に行ひ、死すべき所にて死せず、死ぬまじき所にて犬死をなし、取るまじき物をむさぶり、取るべき物を取らずして飢寒に及びなどするは、皆もつての外の不孝なり。心にかけて愼み守るべき事なり。此の道理を知り明めて心に守り身に行ふを、儒者の學問といふなり。世間に學問する人は澤山あれども、此本意をさとり得たる人まれなり。（翁問答）

曾子略傳

(一) 曾子の名字

史記の仲尼弟子列傳に「曾參は南武城の人なり。字は子輿孔子より少きこと四十六歳なり。孔子以て能く孝道に通ずと爲す、故に之に業を授け、孝經を作る、魯に死す。」とある。恐らくは此が曾子の全傳として最も信據すべき者であらう。名の參は、所金の切で、音「シン」である。されば白樂天の慈烏夜啼の詩に「哀哉若此輩、其心不如禽、慈烏復慈烏、烏中之曾參。」とあるは、侵韻として用ひてゐる。併し晉の晉灼は初三の切即ち「サン」と讀み、此說に從ふ學者も少なくない。それは論語の衛靈公篇にも「立てば則ち其前に參するる見るなり、輿に在れば則ち其の衡に倚るを見るなり。」とある參を、韓愈の論語筆解に「參は古の驂の字なり」と解して

ある。驂と輿とは密接なる關係のある者である。曾參の名は即ち此參である。それだから其字を子輿といふのである、恰も孟子が名を軻といひ字を子輿或は子車といふに同じといふのである。余が鄉出雲廣瀨藩の先儒中村笠山（篠崎小竹に就學す）固く此說を取り、三澤某　贈る詩（自註に某に五丈夫子あり、而して皆能く孝云々とある）に「人生生子要多男貧是常談豈足慙尤美舞雩咏歸夕、相迎侍立五曾參」とあるは、覃韻に從ふたのである。

（二）曾子の生立

曾參は孔子より少きこと四十六歳とある。史記の弟子列傳に年歳を記した者は二十三人ある。固より本づく所はあつたであらうが、崔東壁も「史記弟子の年、其彷彿を得るに過ぎざるのみ、盡く指して實と爲すべからず。」と言つて居る通り、盡く確實といふ譯には行かぬであらう、併し今は先づ史記の說に從つておく。孔子は魯の襄公二十一年（周の靈王二十年）冬十月庚子に生れて居られるから（公羊穀梁の說に從ふ。左傳史記は襄公二十二年としてゐる。）曾子は魯の定公四年（周の敬王十五年）に生れて居る譯である。此年は楚の申包胥が秦の師を以ゐて楚に入り、大に吳を破つた年である。

武城は古の兗州に在つて魯に屬してゐる。當時武城と稱する地が二個所あつて、一は定襄に在り、一は清河に在つた。清河は北に位し、定襄は南に位する。曾參の家は定襄の武城に在つたので南武城の人と言つたのである。南武城は吳越が魯に至る衝に當つて居た。論語雍也篇に「子游武城の宰と爲る。」とあり、史記の仲尼弟子列傳に「澹臺滅明は武城の人なり。」とある。武城は、皆此武城であらう。然るに崔東壁は、孟子の書に「曾子武城に居る、越の寇あつて曾子去る。」の文を載せ、孟子

は之を評して「曾子は師なり、父兄なり。」とあるから、曾子は武城の人でない事は明かである。司馬遷は蓋し孟子の文を誤まつた者であらうと斷じてゐる、但魯の人であつた事は略ゝ推定することが出來る。

(三) 曾子の家庭

曾子の家柄なり祖先なりについては、餘り記述したものが無いやうであるが、闕里志には「曾參は鄫國の後なり。禹の孫少康其次子を鄫に封ず、魯の襄公の時に當り、邾人莒人鄫を滅ぼす、鄫の世子巫魯に奔り、邑を去つて曾氏と爲る云々。」とある。巫から三傳して曾點字は子晳に至つて居る。點は即ち參の父である。點も孔子の門人であつて、孔子の其志を言へとの問に對し「暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らん。」と對へて孔子の讃辭を得た人である。其温乎たる人格と洒然たる風懷とは、此一語によつて想像せられるやうであるから、朱子も「點の志は鳳凰の千仞の上に翔るが如し。」と言つてゐる。

說苑の建本篇に(韓詩外傳、孔子家語にも)「曾子瓜を芸り、誤つて其根を斬る。曾晳大杖を援つて之を擊つ。曾子地に仆れ、頃らくあつて蘇す。」と言ひ、檀弓に「季武子死す、曾晳其門に倚つて歌ふ。」とあるのは、何れも信ぜられないやうであるが、併し孟子に「琴張曾晳牧皮の若き者は、孔子の謂はゆる狂なり。」とある。且つ孟子は狂者を說明して、「其志嘐々然として曰く、古の人古の人といふ。其行を夷考すれば掩はざる者なり。」と言つてゐるから、刻急の性質であり、時には奇矯の行の有つた事は想察せられるのである。かの浴沂諷詠の對は餘程修練を積んだ後の事であらうと思はれる。

戰國策の秦策に「曾參の賢と母の信とを以てするも、三人之を疑へば慈母も信ず

る能はず。」とて、曾參と姓名を同じうする者が人を殺したのを、或人が曾參の母に告げた話を載せてゐる。此事は新語の辨惑篇にも新序の雜事篇にもある。固より此等の記錄は假託の言が多く、史實として信じ難いのであるが、慈母とあるのは、實母を言つた者のやうである。併し孔子家語弟子解に「曾參、志孝道に存す、後母之を遇すること恩無けれど、供養衰へず。其妻蒸藜熟せざるを以て、因つて之を出す」とあるのに徵すれば、後に繼母に事へたやうである。とにかく氣短かな父と八釜しい繼母に事へて大孝を成した曾參は、彼の頑父嚚母に事へて孝道を全うした舜と好一對といふべきである。

支那の記錄は女性に對しては極めて簡略である。曾子の妻についても、さしたる記述がない。唯前節に書いたやうに孔子家語弟子解に、曾子が母の爲に其妻を離緣した事があり、韓非子外儲說に其子を欺かぬやう妻を戒めた事がある位な者である。

しかも此等の說話も確然たる事實とは認め難いのである。

本書疾病篇に「曾子疾病なり、曾元首を抑へ曾華足を抱く。」とある、說苑の敬愼篇にも同樣の記事があるが、禮記の檀弓には「曾子疾に寢し病なり、樂正子春牀下に坐し、曾元曾申足に坐す。」とあり。荀子法行篇には「曾子病む。曾元足を持す。」とあつて曾華も曾申も見えない。義解に於て述べてゐるやうに、曾華は曾申の誤であらう。曾元は曾子の長男である。孟子に曾元が曾子を養ふことは、曾子が曾皙を養ふに及ばないと書いてある。固より曾子の大孝には及ばなかつたであらうが、併し「曾元の曾子を養ふ必ず酒肉あり。」とあるではないか、餘り裕かならざる家庭に於て、必ず酒肉を供するのは決して容易の事ではない。口體を養ふ者とはいへ、決して普通人の出來る事ではない。曾申は次男である。魯の穆公が母の卒せし時に、人を遣して喪禮を問はせたのは此曾申である。子夏が詩を傳へたのも此曾申である。

此等の記錄によつて曾申は當時敎學界に重きをなしてゐた事を想像することが出來る。孟子公孫丑篇に「或人曾西に問うて曰く、吾子と子路と孰れか賢れると、曾西蹙然として曰く、吾先子の畏るゝ所なり。」とある曾西は曾申のことである。孟子趙註に曾子西を曾子の孫とするのは誤である。曾子子ありといふべしである。

(四) 曾子の性行

論語先進篇に、孔子が曾子を評して、「參や魯。」と言つて居られる。孔安國は「魯は鈍なり。曾子性遲鈍なり。」と註してゐる。一口に魯鈍といへば、暗愚とか馬鹿とかいふやうに聞ゐるが、此は孔子が曾子の性質の偏なる所を評し且つ戒められた者と見るべきである。程子が「曾子の學は誠篤のみ。聖門の學者聰明才辨多からずと爲さず。而も卒に其道を傳ふるは乃ち質魯の人のみ。故に學は誠實を以て貴しと爲す。」と言つてゐる。要するに曾子は至誠篤實の人であつて、子張や子貢の如き才辨聰明の人ではなかつた。本書を繙いて見ても、又論語や禮記の曾子に關する文を讀んで見ても、其人と爲りを知ることが出來る。

曾子が孝道に通じてゐたので、孔子が特に孝經を授けられた事は、史記の明かに傳ふる所であるが、實際曾子の孝道は其天性である。親の爲には最愛の妻をも離緣した。親の爲には齊の高祿をも辭した。孟子離婁篇に「曾子の曾皙を養ふ、必ず酒肉あり。將に徹せんとするや、必ず與ふる所を請ふ。餘ありやと問へば、必ず有りと曰ふ。」とあり。孟子は之を評して「曾子の若きは志を養ふと謂ふべし。親に事ふるは曾子の若くにして可なり。」と言つてゐる。曾皙が羊棗を嗜んだので、其歿後曾子は羊棗を食ふに忍びなかつたことも孟子盡心篇にある。曾子が親の喪を送る時、「柩車を攀ぢたれば、輴を引く者之が爲に止まる。」とは淮南子說山訓の記する所。

「曾子喪禮を讀む毎に泣降りて襟を霑す。」とは尸子の傳ふる所である。「大孝は終身父母を慕ふ。五十にして慕ふ者は、予大舜に於て之を見る。」と孟子は言つてゐるが曾子の大孝は決して舜に劣る者ではない。本書大孝篇に「身は親の遺體なり。親の遺體を行ふ、敢て敬せざらんや。居處莊ならざるは孝に非るなり。君に事へて忠ならざるは孝に非るなり。官に涖みて敬ならざるは孝に非るなり。戰陣勇無きは孝に非るなり。五者遂げずんば災身に及ぶ。敢て敬せざらんや。」とあり。又樂正子春は曾子の教として「天の生ずる所、地の養ふ所、人を大なりと爲す、父母全うして之を生み、子全うして之を歸す。孝と謂ふべし。」と言つてゐるが、曾子は正に此言を實踐躬行したのである。論語泰伯篇に「曾子疾あり。門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戰々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。今にして後吾免るゝを知るかな小子。」とある。曾子は孝道を以て生涯を一貫し、遂に孝道を以て大往生を遂げたのである。

(五) 曾子の學仕

曾子は顏淵より十六歳、閔子騫より三十一歳、冉有より十七歳、子路より四十歳子貢より十五歳　子游より一歳、子夏より二歳少なく、子張より二歳多いから（史記仲尼弟子列傳に據る。）孔子家語七十二弟子解は稍異なり。徂徠は論語徵に於て異說を立てゝゐる。孔門中に於て極て若年に屬する者である。孔子が魯の定公十三年に遲々として父母の國を去り、衛に行かれた時は、曾子は未だ十歳の幼童であつた。孔子が衛を去り曹を去り、宋に適きて司馬桓魋の迫害に遭はれた時は、曾子はやつと十三歳の少年であつた。孔子が陳蔡の間に在つて非常なる困厄に遭はれ「兕に非ず虎に非ず、彼曠野に率ふ、吾道非なるか。」の歎聲を發せられた時は、曾子は

甫めて十六歳に達してゐた。併し論語先進篇に「我に陳蔡に從ひし者は皆門に及ばざるなり。德行には顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語には宰我子貢、政事には冉有季路、文學には子游子夏。」とある。此の謂はゆる孔門の十哲中に曾子の名が見ない事によつて、曾子は其當時孔子に從つて居なかつた事を推定することが出來る。孔子が陳に在つ　歸與の歎を發し、遂に魯に歸られたのが、此厄に遭遇せられた年で、即ち魯の哀公六年である。其後衛に適かれた事はあるが、大概魯に居つて英と編述とに力を專らにせられた。謂はゆる「吾れ衛より魯に反り、然る後樂正しく雅頌各所を得る。」ものである。曾子が孔子の門に入つたのは此間と見ねばならぬ。故に曾子が實際孔子に親炙したのは十年前後であつたらう。此の如く曾子は孔子晩年の弟子であり、かつ若年であつたが、孔子は「孝は德の本なり、弟は德の序なり信は德の厚なり、忠は德の正なり、參や夫の四德に中る者なる哉」(大戴禮衛將軍文子)と言はれて、其人と爲りに大に望を屬し、一貫の道を傳へ、孝經を授けられたのである。孔子がかやうに重んぜられたから、門人相互の間にも特に敬せられたやうである。孟子滕文公篇によれば孔子が歿せられてから、門人共は各々其墓側に居て三年の喪に服した後、荷物を片づけて相別れたが、子貢は更に三年を經て後歸つた。其後子夏や子張や子游は其處を去るに忍びないで、有若の容貌が孔子に似て居る所から、之を孔夫子として事へようとした。そして之が決行を曾子に强ひたのである。併し曾子が「不可なり、江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴す。皜々乎として尙ふべからざるのみ。」と言つたので、遂に此企ては止んだのである。とにかく最後の解決が曾子の一言に因つたのを見れば、曾子が如何に同友の間に尊信せられてゐたかといふ事を窺ひ知ることが出來るのである。曾子の學說については他日稿を改めて公にしたいと思ふ。

曾子の家は極て貧困であつたらしい。韓詩外傳二に「曾子褐衣縕絮も未だ嘗て完からざるなり。糲米の食も未だ嘗て飽かざるなり。義合はざれば上卿を辭す。」とある。莊子や高士傳や說苑にも殆ど同樣の記事があつて、其貧窮の有樣を想像することが出來る。韓詩外傳一には「曾子莒に仕へて粟三秉を得。是時に方つては曾子其祿を重んじて其身を輕んじ、齊は迎ふるに相を以てし、楚は迎ふるに令尹を以てし、晉は迎ふるに上卿を以てす。是時に方つては、曾子其身を重んじて其祿を輕んず。」とあり。同書七によれば、親の存命中に齊に仕へて小祿を得て欣々と喜び、親の歿後楚に遊んで泣涕したといふ事である。孔子家語弟子解によれば、親の生前齊から聘せられたけれど、親に遠ざかるに忍びないで辭したとある。果して何れが信なるかを知らないが、とにかく曾子は親の爲に祿仕した位で、餘り政治の舞臺に活動はして居らないやうである。曾子は冉有や子路の如き政治的手腕の人ではなかつたにも由るであらうが、自己の修養に忙しく容易に「學んで優なれば則ち仕ふ。」の氣にはなれなかつたであらう。顏氏家訓勉學篇に「曾子七十にして乃ち學名天下に聞ゆ。」とある。古稀の齡に至るまで孜々として其天爵を修めて、人爵を希はなかつたのが曾子の曾子たる所ではあるまいか。

(六) 曾子の著述

曾子の著述と稱せられるものに左の數種がある。

(イ) 曾子一卷　別項解題に詳述する。

(ロ) 大學一卷　大學はもと禮記中の一本であるが、宋の仁宗の時同馬温公が大學廣義を作つて以來別行せられ、程朱に至つて廣く傳播したものである。朱子は大學章句を作つて、一經一傳とし、經は孔子の言にして

曾子之を述べ、其傳は曾子の意にして、其門人の筆錄したものとしてある。宋の黎立武は全篇を曾子の書とし、明の劉宗周は曾子の傳にしたし、子思の述べたものとしてゐる。何れと確定し難いが、要するに孔門の遺書を曾子の徒が傳へた者と見るが至當であらう。我邦の伊藤仁齋の大學非孔氏之遺書辨、及び明の陳道永の學錄等は戰國時代無名氏の作として斥けて居るのである。

（八）孝經一卷　漢書藝文志に「孝經は孔子、曾子の爲に孝道を陳ぶるなり。夫れ孝は天の經、地の義、民の行なり、大なる者を擧げて言ふ。故に孝經と曰ふ。」とある。之が作者については數說ある。史記や白虎通や孔子家語では孔子の作とし、僞孔安國孝經の序には曾子の作とし、宋の司馬光や明の丘濬は孔子と曾子とが孝道について論じた者を弟子が筆記した者だと言つてゐる。宋の馮椅は子思の作としてゐる。蓋し孔曾の門派に出でた者には相違ない、然るに宋の胡宏や汪應辰は、此書を以て後人の附會僞作とし、朱子も之に賛し「孝經は是れ後人の綴輯」などといひ、孝經刊誤を作つて、斷然經文を刪削したのは、餘りに臆斷と言はねばならぬ。

（七）曾子の薫化

史記の儒林傳に「孔子卒してより後七十子の徒、諸侯に散游し、大なる者は師傅卿相となり、小なる者は士大夫に友とし敎ふ。或は隱れて見はれず。」とある。孔子の歿せられた時は、曾子は二十五六歳の時であるが、爾來如何なる生活を續けたであらうか、儒林傳に「子路は衛に居り、子張は陳に居り、澹臺子羽は楚に居り、子

夏は西河に居り、子貢は齊に終る。」とあるが、何故にか曾子については記錄して居らぬ。淸の中樹梅の文廟通考に曾子年七十にして卒するよし書いてゐるが何に據つたものであらうか。儒林傳に「田子方、段干木、吳起、滑釐の屬の如きは、皆業を子夏の倫に受けて王者の師たり。」とある。「倫」の中には曾子も含まれてゐるのである。史記の吳起列傳に「吳起は衛人なり。好んで兵を用ふ。嘗て曾子に學ぶ。」とある。吳起は猜忍の性ではあつたが、魏の武侯に對へて「君、德を修めずんば舟中の人盡く敵國なり」と言つて居るのは、流石に曾子に學んだ者と首肯かれる。其他樂正子春とか、公明宣とかいふ人が曾子に學んだ事は本書や禮記檀弓說苑等に歷々として見えて居り、論語泰伯篇には「曾子疾あり、門弟子を召して曰く云々」とあり、孟子離婁下篇には「昔沈猶負芻の禍あり、先生(曾子を指す)に從ふ者七十人、未だ與かるあらず。」とある。此等によつて見れば曾子が育英の業に從つてゐた事は確實である。

子思の孫である子思と曾子との關係は果して如何であろう。子思の經歷は詳かに知ることが出來ないが、史記の孔子世家に「孔子鯉を生む、字は伯魚、年五十、孔子に先だつて死す。伯魚伋を生む、字は子思、年六十二、嘗て宋に困しむ。子思中庸を作る。」とある。子思は孔子の孫であるから、固より其家學を傳へたではあらうが、古い所では曾子に學んだ事を明記した者がない。禮記の檀弓に師弟の語氣で書いた節があるが、是も疑はしい點がある。韓退之の送王塡序に「子思の學蓋し曾子に出づ。」とあるのを、朱子は武斷的に「蓋」の字を削り、「子思の學は曾子より出づ」と定めたのである。中庸章句の序にも「曾子の再傳に及んで復た夫子の孫子思を得。」と書いてゐる。かくの如く確然たる證據は無いが、とにかく子思が曾子に學ぶ所があつたと見るのは中らずと雖も遠からずといふ可きである。かくして洙泗の流は混

々として孟子に到るのである。

曾子の尊崇

漢高祖が即位十二年十一月に、淮南より還る時魯を過ぎて太牢を以て始めて孔子を祀り、東漢の永平十五年には明帝が闕里に幸して孔子及び七十二弟子を祀つて以來、世々の帝王釋奠の禮を行ひ、魏の文帝は孔子舊居の廟を修理した。之が謂ゆる聖廟の始であろう。聖廟に孔子を崇祀すれば、其意を推廣めて孔門の諸子や後世の賢哲を合せ祀つて、敬學尊師の意を深くし、道統の傳來を感謝するは、情理の然らしむる所である。孔廟從祀の禮の起る所以である。　孔夫子の位は南面して最高の正位に在り、顏子、子思子は東側に、曾子、孟子は西側に配祀せられてゐる。此が謂はゆる四配である。閔子冉伯牛等の十二哲之に次ぎ、東西兩廡に衛の遽瑗（西廡の首位）鄭の公孫僑（東廡の首位）等の先賢先儒が分列せられてゐる。即ち曾子は四配の一で、從祀中最高の榮位を得てゐるのである。顏回の配祀が最も古いやうであるが、曾子は唐の高宗の總章元年に太子少保を贈られて廟廷に從祀せられ、睿宗の太極元年に太子大保を加贈せられた。更に玄宗の開元八年に國子司業の李元瓘が「曾參は大孝德、同列に冠たり。特に塑像を爲り、十哲の次に坐せしめん。」と言つてゐるから、此時には未だ十哲の次に位してゐたのである。かくて其二十七年には郕伯に追封せられ、宋に入つては眞宗の太中祥符二年には郕侯に加封せられ、徽宗の政和元年には武城侯に改封せられてゐる。度宗の咸淳三年に郕國公に加封せられ、「帝孔子に釋奠し、顏淵、曾參、孔伋、孟軻を以て配列し、邵雍、司馬光を從祀し、又顓孫師を十哲に陞す。」とあれば、四配として祀られるに至つたのは此時であらう。元の文宗の至順元年には宗聖公を加贈せられ、明の嘉靖九年に「上大學士張

孚敬等の議を用ひ、祀典を釐正し、塑像を撤去し、大成至聖文宣王を改めて、至聖先師孔子の神位と爲し、四配を復聖顏子、宗聖曾子、述聖子思、亞聖孟子の神位と爲し、十哲以下凡そ門弟子に及ぶまで、皆止だ先賢某子の神位と稱し、左丘明以下を先儒某子の神位と稱し、凡そ舊封公侯伯爵盡く皆革め去る。」とある。尤も清朝に至つて單に先賢某先儒某と稱して子と稱することを止めた。此が現今曲阜なる聖廟祀典の禮となつてゐるのである。一切人爵的待遇を棄て、眞に古聖賢の德を瞻仰することになつたのは喜ばしい事である。

我國に於ても文武天皇の大寶元年二月に釋奠の禮を行はれた事が歷史に見えて居り、大寶令にも釋奠の條項が載せてあるが、戰國の世に至つて廢絕してゐる。德川氏が幕府を開くに及んで文敎再び興り、寛永九年冬、張大納言德川義直は先聖殿を林道春の賜地なる忍が岡に建て、孔子及び顏曾思孟四子の座像を安置し、又聖賢畫像二十一幅を狩野山雪に畫かせたとの事であるが、曾子も其一幅であつて、現に東京帝室博物館に保存せられてゐる。寛永十年二月十日に、林道春が初めて釋奠を先聖殿に行ひ、同年四月十七日には將軍家光が先聖殿に臨んで孔子以下の諸像を拜した。將軍綱吉の時に至り、聖廟を神田臺に移し大成殿と稱し、規模は宏大に、禮器等は完備した、神座は殿內北壁中央の室にて、孔夫子を中にし、顏子子思子を東配に、曾子孟子を西配に安置することは全く曲阜の聖廟に同じ。元祿四年二月十一日新廟にて釋奠を行ひ、將軍綱吉は特に臨場して式典を覽た。其後元祿十六年十一月安永元年二月　天明六年正月に大火あり。大成殿も類燒の厄に會うたが、聖像や四配の神龕は幸に災厄を免れた。大成殿も天明七年に再建せられ家齊將軍の時寛政十一年に大改造せられた。聖廟の域內には學問所があつて、時に盛衰ありとはいへ、一國の鴻儒碩學は此に集まり、我國の學問敎育の中心となつてゐたのである。

明治維新以來大成殿の祀は廢せられ、孔子及四子の像すら撤せられたが、明治九年に神龕は復置せられ、同四十年に孔子祭典會興つて廢絶した祭典を復興し、斯文會は之を繼承し　更に諸種の事業を恢復擴張し、かくて我が宗聖曾子も儒教の元勳として孝道の權化として、至聖先師孔夫子と共に萬世に祀られ、德光を永遠に發揮しようとしてゐる時、突如大正十二年九月一日關東地方に起つて大震火は、此神聖なる聖廟と由緒ある聖像其他の寶器とを合せて、一炬に付したのは、かへすがへすも殘念の至であるが、既に有志者の間に再建の議熟したりといへば、茗溪の一角に燦然たる聖廟を仰ぐのもあまり遠くはあるまいと思ふ。

曾子義解

曾子立事

谷口爲次著

立事といふのは實事を以て訓を立つるといふ事である。曾子は論語の首篇に日に「吾身を三省す」といへる如く、極めて内省的な篤行愼言な人であつたから、空言高論を事とせずして、忠信孝悌の實事を以て修養教訓の本とせられたのは然るべき事と思ふ。

曾子曰、君子攻其惡、求其過、彊其所不能、去私欲、從事於義可謂學矣。

字義　攻其惡の其は君子自身を指す。以下二つの「其」も同じ。

彊其所不能　自分の出來難いことを無理にやり通す意

字義　君子愛日の愛は愛惜の意である。揚子法言に「孝子日を愛む」とあると同意である。佐藤一齋が其書齋に愛日樓と命じたのも此邊からであらう。及時以行の時は學ぶべき時即ち少壯の時をいふ。陶淵明が「時に及んで當に勉勵すべし。歳月人を待たず」といつた「時」である。其少壯の時に十分修行せねばならぬ意。

【通解】　人はとかく他人の缺點には氣がついて。自己の短所には案外氣のつかぬものである。それだから孔子も「其惡を攻めて人の惡を攻むるなかれ」と戒めて居られる崔子玉の座右銘にも「人の短を道ふなかれ。己の長を說くなかれ」と言つて居る。故に君子たるものは、恒に吾身を三省して、吾身に落度はなきか、過ちはなきかと攻め求むるに汲々として、決して人の過惡を咎めない。そして、如何に學び難い事に出會しても、決して「己は出來ない」としりごみせず、人一たびにして之を能くすれば、己は之を百たびす。人百たびにして之を能くすれば己は之を千たびす」の勇猛心を奮つて進まねばならぬ。蓋世の英雄ナポレオンが「不能の語は愚人の辭書に在り」と絶叫してアルプスの嶮を越えたのも、要するに其能はざる所を强ひたのに外ならぬのである。かくて私慾を去り正義に從事する、これが眞實の學問である。孔子も「事に敏にして言に愼み、有道に就いて正す、學を好む」と謂ふべきのみ」と言つて居られる。文字記誦は學問の最終の目的ではないのである

君子愛日以學、及時以行、難者弗辟、易者弗從、唯義所在、日旦就業、夕而自省思、以歿其身亦可云守業矣。

【通解】　「學ぶこと及ばざる如く、惟日も足らず」といふ如く、君子は歳月を惜んで學び、老いて悔ゆることなきやう少壯の時ウンと勉强をし、如何なる困難も避けず、又如何なる誘惑にも陷らず、一意正義の目標に向つて進む。謂はゆる「適なきなり莫なきなり、義にこれ與に比す」の意である。早朝より孜々として業に就き、夕には終日の行を沈思反省する。かやうに其日其日を送つて一生を終ふる人は、よく業を守るといふ事が出來る。國語に「士朝にして業を受け、晝にして講貫し、夕にして習復し、夜にして過を計り、憾無くして後即ち安し」といへると全く同意である。

難者弗辟　難者は避に同じ。如何なる困難な事でも、それが正義であれば寧ら玉碎しても辟易しない。**易者弗從**　從前句と反對に如何に容易で自分に都合のよい事でも、それが正義でなかつたならば決して從はない。**日旦就業**　日旦は朝のこと。史記の龜策傳に「日旦を以て龜に祓す」と使つてゐる。しかし文選の閒居賦には、此二句を引いて日の字がない。業といふのは灑掃應對より禮樂書數などの修養上の業であつて職業といふ意味ではない。

君子學必由其業、問必以其序、問而不決、承問觀色而復之。雖不說、亦不彊爭也。

【通解】君子の學問即ち修養の道は必ず詩書禮樂等の業に由らねばならぬ。されば其業は師長に就いて質さねばならぬ。併し質問するには時と場所とを考へ、相當の秩序を以てすべきである。若し問うても疑を決する事が出來なかつたならば、徐ろに先方の間暇を窺ひ顏色を察して復び質問するがよい。たとひ滿足な說明を得ないでも强ひて爭論がましくしない。此が師長に對する禮である。彼の一二の問を試みて師を輕重するが如きは言語道斷である。

字義　承間觀色は間暇なり。曲禮に少間願くは復するあらん」とあり。色は顏色なり。先方の間暇を窺ひ、先方の顏色を察して問ふこと。復之復は白すといふ說もあるが、此處では反復の意と見るがよいと思ふ。

君子既學之、患其不博也。既博之、患其不習也。既習之、患其無知也。既知之、患其不能行也。既行之、貴其能讓也。君子之學。致此五者而已矣。

【通解】孔子も「博く學んで審に之を問ふ」と言はれ、孟子も「博く學んで詳に之を說く」と言つてゐる。君子は博く學ばねばならぬ。併し博いだけではいけない。深さを增さねばならぬ。それには習熟するを要する。孔子が「學んで而して之を習ふ」といはれた所以である。かくて橫には博く縱には深く、學問其物が全く自分の物となる樣になる。自分の物となつたならば、其行爲の上に表はさねばならぬ。實行が伴つてこそ學問の價値もあるのである。但しかうなるとそろ〳〵己惚が出て來る。とかく人が下目に見にる。そこで謙讓の德を以て之を抑へて行かねばならぬ。曲禮にも「博聞强識にして讓り、善行に敎くして忘らず」とある。君子の學問といふのは、要するに此の博習知行讓といふ五つの出來ないのを患へて之が修業に精進することである。

眞に自分の物とする、いはゆる體得することである。說苑の說叢篇にはこの一句を缺いで居るが、知を前述の如く解すれば除くに及ぶまい。貴其能讓とは己の才學などを鼻にかけぬ事、尤も王念孫は五つの「患」は文義相承けてゐる、此句だけが異なる筈がない。貴は患の譌である。そして後人が「不」の字を削り去つたのである。宜しく

說苑說叢篇に從つて「患其不能以讓也」に作るがよい。と言つてゐる。

字義　孱守之說文に「孱は迮なり」とある。迮は小である。即ち博の反對である事は、下句の微が篤の反對であると同樣である。博く學ぶと散漫に流れ易いものであるから、之を扇の要のやうに締めくゝる。謂はゆる博文約禮の意である。孟子は「博く學んで詳に之を說く、將に以て約に說かんとするなり」といつてゐる。群書治要には孱を淺に作つてある。悒悒は憂へ念ふこと。

君子博學而孱守之。微言而篤行之。行必先人、言必後人。君子終身守此悒悒也。

【通解】博く學問をするのはよいが、之が要點を守るといふ事が最も肝要である。孟子が「曾子の守り約なり」と讃美してゐるのは偶然ではない。言葉はとかく大きくなりがちであるから、努めて微かに控目にし、そして言つたことは篤實に之を行はねばならぬ。されば行は常に人に先だつやうにし、言語は常に人に後れる樣に心がけてゐるがよい。孔子が「君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲す」と戒めて居られる所以である。言ふは易く行ふは難い。君子は終身此を守つて其の實行し難いのを憂へてゐるのである。

字義　數有名の數は促速なり。スミヤカと訓ず。禮記に「其行く趨々として以て數かなり」と用ふ。人秉之の秉は執るである。詩經に「誰か國の成を秉る」とある。即ちその成功した行を後人が執りあげて美めるのである。憚憚は怛々と同じ。詩經に「心を勞する怛々たり」とあり。心を勞して憂へ惶れること。不殄微殄は

行無求數有名。事無求數有成。身言之後人揚之。身行之後人秉之。君子終身守此憚憚也。

【通解】孔子が「速かならんと欲するなかれ。速かならんと欲すれば達せず」と言はれ家康が「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐ可らず」と誡めた如く物事は急いでは仕損ずるものである。故に善行をしても直に名聲を博しようと思つてはならぬ。また事業を企てゝも直に成功しようと求めてはならぬ。自分が眞に善いと言へば自然に後の人が之を賞揚する。自分が眞に善い行をなせば自然に人がそれを執りあげて美める。唯自分は自分の言行の最善を盡せばよい。他人の毀譽褒貶は問題の外である。說苑雜言篇に曾子が「君子功先づ成つて名之に隨ふ」と言つてゐるのが是である。君子は終身此處の修養に憚憚と心を勞するのである。

君子不絕小、不殄微也。行自微也不微人。人知

絶と同じくタツなり。微は顯の反對にて顯著ならざる微細のこと。如何なる小事をも苟くもせず捨てざるなり。自微也自卑自遜と同意にて傲慢ならぬ事。王念孫は微は匿す意といつてゐる。不微人人を微小に見て侮らぬこと。勿々は勉々といふが如く勤

之則願也。人不知苟吾自知也。君子終身守此勿勿也。

【通解】君子は人に善言善行があれば、如何に微細な事でも褒め稱へて措かない。又自分に於ても苟も善と思つた事は如何に些細な事でも之を爲すのである。諸葛亮も其子を戒めて「善は小なりと雖も爲さゞる勿れ」と言つて居る。そして自分の行はまだ足らぬまだ足らぬと自ら卑うして及ばざるが如く修養に努め、人の行については其短所を見つけて侮るやうの事なく、寧ろその長所を認めて敬意を拂つて行く。人が自分を認めてくれることは固より希望する所である。但しそれは決して名譽の爲ではない。自分の善が聊かにしても社會に感化を及ぼすことを望むからである。が屈原も言つたやうに「吾を知らず其れ亦已まん。余が情其れ信に芳し」で人が知らないでも失望悲觀することはない。自分は自分を知つてゐる。自分に對して疚しいことがなければそれで滿足である。これが「人知らずして慍らず、亦君子ならずや」の境涯である。君子は終身此點に向つて黽勉努力するのである。

勉すること。禮記に「勿々乎其れ之を饗せんと欲す」とあり。

字義　恐不得與　阮元は儀禮の鄭注に據つて「與」を及と解してゐる。論語に「善を見ては及ばざるが如く、惡を見ては湯を探るが如し」とあるから、阮元の說で通ずるが與にすと訓じても意味は通じないことはない。やはり論語に「善を見ては齊しからんことを思ひ、不善を見ては內に自ら省みるなり」とある。見不善者といふ字は衍字であるとの王念孫の說は當つてゐる。

君子禍之爲患、辱之爲畏。見善恐不得與焉、見不善者恐其及己也是故君子疑以終身。

【通解】禍は天が人間の罪惡を譬める刑罰である。辱は人間が人間の不善に對する報酬である。であるから君子が禍を患へ辱を畏れるのは畢竟自分の不善を憂へ自分の過惡を畏れるわけである。故に君子は他人の善を見ては我身の及ばないことを恐れ。孔子のいはゆる「善を見ては及ばざるが如く」孜々として修養に力め、又他人の不善を見てはいつしか其不善が我身に感染せねばよいがと恐れて、いはゆる「惡を見ては湯を探るが如くす」といふやうにする。君子は以上の四つの事について細心の注意を拂つて身を終るのである。此節の終の句が前三節及び後一節の最後の句と異なつてゐるのは、故らに語法を變へて文章に變化あらせたものである。

字義　見惡思詬の詬は恥なり。他より譏られて恥を被る事。群書治要には惡を難に作つてある。戰々詩經に「戰々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」とあり。恐れ戒むること。

君子見利思辱、見惡思詬、嗜慾思恥、忿怒思患。
君子終身守之戰々也。

【通解】　論語にも「得るを見ては義を思ふ」とある如く、利を見ても其利に迷はず、それが果して正義の利なりや否やを熟考し、若し不正の利であるなら、かゝる非道の利を貪れば、必ず恥辱を被るに相違ないと思つて其利を捨つべきである。又惡事を見たならば、斯る惡事をなせば屹度他人から爪彈きせられるだらうと思つて、其惡事に遠ざかるやう努むべきである。色につけ金につけ苟くも私利私慾の動いた時には、かゝる利慾を遂げたならば人から恥を受けねばならぬからと何處までも之を抑へて行かねばならぬ。「一朝の忿に其身を忘れて以て其親に及ぼす」といふやうに一朝の感情に激して忿怒の念の燃ゆる事があつても、今怒つては後難が畏ろしいと堪忍袋の緒を締めるのである。家康も「怒は敵と思へ」と戒めて居る。要するに「獸を逐ふ獵師は山を見ず」で、人は眼前の利慾や一時の感情に本心を喪ふことが多いから、常によく理非曲直を判別して、正しい誠の道を辿らねばならぬ。君子は此を守つて戰々兢々と戒め愼んで居るのである。

字義　慮勝氣思慮が血氣に勝つこと。換言すれば理性が感情に勝つこと。思復之復はフムなり。履行すること。論語に「信義に近づけば言復むべきなり」とある。

君子慮勝氣思而後動、論而後行。行必思言之、言之必思復之、思復之必思無悔言、亦可謂愼矣。

【通義】　孟子も「志は氣の帥なり」といつてゐる。思慮は主である、血氣は從である、血氣も大切ではあるが、如何しても思慮に從はせねばならぬ。論語にも三戒として「少き時は血氣未だ定まらず之を戒むる色に在り。壯なる時は血氣方に剛なり、之を戒むる鬪に在り。老いたる時は血氣すでに衰ふ、之を戒むる得に在り」といつてある。よく〳〵考へた上で動き、よく〳〵研究した上で行へば失敗がない。いはゆる熟慮斷行が肝心である。凡て自分の行爲は一點の疚しいことなく、正々堂々人に對して言ふを憚らぬやうにありたい。司馬溫公は嘗て「吾れ人に過ぎたる者なし、但平生の爲す所、事の人に對して言ふ可らざるものなきのみ」。といつてゐるが、此がなか〳〵容易なことではない。又苟くも言葉を發したならば、必ず之を履行する覺悟がなくてはならぬ。此やうに必ず其言を實行しようと思ふが故に、漫りに大言壯語

して後悔することのないやうに注意するのである。かくてこそ慎しむといはれるのだ。孔子が「故に言は必ず其終る所を慮り、行は必ず其敝るゝ所を稽ふれば、民は言に謹んで行に慎む」と戒めて居られるのが此意である。

人信其言、從之以行。人信其行、從之以復。復宜其類、類宜其年、亦可謂外内合矣。

字義　從之以復の復は易の「終日乾々其道を反復す」の意にて、其行を繰返し〳〵續けること。復宜其類の宜は詩經の「爾の子孫に宜し。爾の室家に宜し」の意で圓滑に順調に類宜其年年久しく永遠に行はれて不都合のないこと。

【通解】　人が君子の言を信ずるは何が故であらうかといへば、君子は必ず其言を實行するからである。又人が君子の行を信ずるは何が故であるかといへば、其行が決して一時的でなく、持續的であるからである。而も其持續的行爲は横には朋友同類に及んで、甲にも宜しく又乙にも宜しく、縱には年に宜しく、今年も來年も來々年も永遠に變ることがない。此に至つて始て外即ち言語内即ち實行とが一致するといふものである。

道の行はれることである。類は朋類の意で自分の交際する範圍内の人々をいふ。

君子疑則不言、未問則不言、兩問則不行其難者。

字義　兩問難き事と易き事と兩方の事を以て質問し來ること。

【通解】　論語に「多く聞き疑しきを闕いで慎んで其餘を言へば則ち尤め寡し」とあるやうに疑はしい事は言ぬ方がよい。又同じく論語に「憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず。一隅を擧げて三隅を以て反せざれば復びせざるなり」とある如く、先方の問を待つて答ふるがよい。問ひもせぬのにむやみに告ぐるは決して先方を啓發する所以でない。若し先方が難易の兩件を以て質問したならば、先づ實行し易い方より教へ聞かせて一歩一歩と善導するがよい。初より餘りに六かしい事を要求すれば却て自棄せしむる恐がある。禮記の學記に「善く問ふ者は堅木を攻むるが如く、其易き者を先にして、其節目を後にす。善く問を待つ者は鐘を撞くが如し。之を叩くに小なる者を以てすれば小鳴し、之を叩くに大なる者を以てすれば大鳴す」とあるは個中の消息を傳へたものである。

君子患難除之、財色遠之、流言滅之。禍之所由

字義　流言流は流

矢流響などの流と同じく、すべて根源の不明なるを意味する。揚倞は「流轉の言不定なるもの」といつてゐる即ち根もない世間の噂である。纖々は纖々と同じく微細なるの意。荀子大略篇には此を引いて纖々に作つてある。

生自懺々也。是故君子夙絶之。

【通解】聖人君子と雖も患難が到來せぬとは限らない。たゞ君子は如何なる患難に遭遇しても憂へず惑はず懼れず、徐ろに其原因を原ね、適當なる處置を取つて其患難を除き去る。否患難が自ら逃げ去るのである。又財貨と色欲とは最も人の德性を害ふものである。齊の宣王も「寡人疾あり色を好む。寡人疾あり貨を好む」と歎じてゐる。されば君子は此情慾の奴隷とならぬやう努めて之を遠ざけるのである。流言も亦憂世に免れ難いものである、が一方より考へると火の無い處には烟の無い筈であるから、君子は徒に爭はず又侮らず、自己を反省し事實を明白にし、流言をして自ら影を失はしむるやうに努める。管叔蔡叔の流言も終に周公旦を如何ともすることが出來なかつたではないか。「禍患は忽微より積む」。と歐陽修は歎じて居るが、いかにも禍はいつも人の氣づかぬやうな小さい所から起るものである。千丈の堤は動もすれば蟻の穴より潰れるものである。それだから君子は細心の注意を此處に拂つて禍患を未然に防ぐのである。古銘に「涓々壅がずんば終に江河と爲る。毫末札らずんば將に斧柯を尋ひんとす」とあるのも全く此意である。

字義　亦不以援の援は「引く」にて引き上げるにも引き下げるにも用ふるが、此處では不能の者が他の人を己と同じやうに引き下げるのである

君子己善亦樂人之善也。己能亦樂人之能也。己雖不能亦不以援。

【通解】人は誰しも同情心を持つてゐるが、又其反面には必ず嫉妬心のあるものである。同じ善でも己が爲せば善であるが、他人が之を爲せば寧ろ惡しざまに言ひたがるものである。己の能事は動もすると鼻先に出たがるが、他人の長所はとかく目の上の疣に見える。宗教家や藝術家の間に暗鬪の絶にないのは全く之が爲である。人の善をも我善の如く樂み、人の能をも己の能の如く樂む所に君子の君子たる特色がある。のである。樂むといへば心から愉快に思ふので、決して口先の御世辭ではない。己の不能をば、他の不能を例に引いて尤もらしく言ひわけにする者が多い。諸葛孔明が出師の表に「喩を引き義を失ひ以て忠諫の路を塞ぐべからず」と言つてゐるのも、此の人情の弱點を戒めたものではあるまいか。君子は決してさうでない。不能は何處までも不能として努力して行く。及ばざるが如くに學んで行く。そこに進歩があり向上があり、不能はやがて能となつて人に仰がるゝに至るのである。

字義　弗趣趣は促なり、性急にせりたてること。弗疾疾はニクムであるが、上の惡むに比し一層嚴しく惡むのである。不補は改むるのでなく、唯人前を補ひ繕ふので、いはゆる過を文るのである。不伐の伐は功である。それより轉じて功をほこるに用ひる。論語にも「孟之反伐らず」とあり。飾其美の飾は虛飾の意でなく修飾の意である。卽ち己の美點を修め長ぜしめること。

君子好人之爲善而弗趣也。惡人之爲不善而弗疾也。疾其過而不補也。飾其美而不伐也。伐則不益。補則不改矣。

【通解】　君子は固より人の善を爲すことを希ひ好むけれども、あまり嚴しく急ぎ立てることはしない。さうすると却て反感を招いて效果の薄いものである。それだから大戴禮子張入官篇に「優にして之を柔げ自ら求めしむ」とある通り、一步一步順序を逐うて優しく導いて行くがよい。人の惡に對しても亦同樣である。惡いことは勿論惡むべきであるけれども、孔子が「人にして不仁なる、之を疾むこと已だ甚しければ亂す」と言はれた如く、あまり嚴しく疾んで之を叱責すると、却て其人をして自暴自棄せしめるものである。現にかういふ徑路によつて謂はゆる不良少年等の出來て居ることは決して少くないのである。されば人の惡に對しては、その忠告や矯正は餘程注意せねばならぬ。自分の過は大に疾み大に責めるは當然であるが、併し餘りに其過を嫌ふが爲に之を補ひ繕つて一時を糊塗するやうな事があつてはならぬ。いはゆる「小人の過や文る」は君子の事ではない。過は過として之を改むるに憚らないそれでこそ「君子の過や日月の蝕の如し。過てば人皆之を見る。改むれば人皆之を仰ぐ」のである。自分の美點なり長所なりは十分に之を修飾し發揚するがよい。併し人に向つて誇り高ぶることは無意味であり無益な事であるから君子は爲さない。「願くは善に伐るなからん」と顏回も言つて居る。いつたい伐るといふことは自滿得意の念から起るものである。此自滿得意の念は人の向上進步の路を塞ぐ大障害である。又過を文るといふことは畢竟一時を糊塗して他を欺くものであつて、腹を雪ぎ膓を濯つて眞に過を改める決心のないものである。故に君子は伐らず文らず、孜々として善を力め、汲々として過を改めて行くのである。

君子不先人以惡。不疑人以不信。不說人之過。成人之美。存往者在來者。朝有過夕改則與之。

【通解】　猜疑邪推は小人の常であるが、君子は虛心坦懷を以て人に接し、初から其人を

善事を聞けば褒め稱へて其名を成し實を遂げるやうにする。與之與は許すなり相手にする事、論語に「我れ汝が如かざるを與すなり」とある。存往者在來者存も在も共に爾雅に察すると解してゐる。

字義　有常の常は一時的ならず、常住不斷なること。有鄰は同類惡人ならずやと邪推することなく、又初から信實の無い人間だらうなどゝ猜疑の眼を以て見るやうな事はない。孔子のいはゆる「不信を億らず詐を逆へず」である。論語に「君子は人の美を成し、人の惡を成さず。小人は之に反す」とあるやうに、人の失策を與がつて吹聽し、人の美點は一も二もなくけなすは亦小人の常である。既往の行をよく〳〵察し、又將來をもよく〳〵察して、其人が眞に過を改めてゐるか否かを認め、其人がたとひ朝に於て過が有つても、夕に於て之を改めたならば、その改めた所を認めてやるがよい。夕に於ける過も朝に於て改めたならば、最早や前非を彼此いふ必要はない、折角改めて居るのに徒らに既往を尤めるのは決して人を勸め導く所以ではない。君子の爲さない所である。既往を省察し未來を想察すること。

君子義則有常、善則有鄰。見其一冀其二、見其小冀其大。苟有德焉、亦不求盈於人也。

あることにて他に感化を及ぼすこと。論語に「德孤ならず必ず隣あり」とある意

字義　不絕人之歡、不盡人之禮歡は欵情の意。禮は禮物の意で、人

【通解】　小人も義を爲さぬことはないが、多くは一時的である。之に反して君子の義を爲すや、永久的である。持續的である。小人が申譯的に爲す善は、到底人に徹底し人を心服せしめるものではない。君子の眞心から湧き出た善によつて、始て人を感動させ人を同化するものである。舜の善は遂に頑嚚の父母を善良の父母たらしめたではないか。又君子は他人の一義一善を見れば、心より之を喜び、更に第二第三の義と善とあれかしと希望し、他の小義小善を見ては、我事の如く思ひ、更に一歩を進めて大善大義を行へかしと希望してやまぬものである。かやうに他人の義と善とを希ふことは頗る切なれど、又一方には人を寛容する度量がある。故に苟くも其人にして一德即ち一義一善の嘉すべきものがあれば先づ之を稱譽して、强ひて全德を要求しない。そこで其人は喜び勇んで、自ら進んで、を磨き修めるやうになつて來る。されば朱熹も「人に與して備はらんことを求めず。身を簡して及ばざるが若くす」と言づて居る併し小人はともすれば「人を責むるは明かにして、己むを恕することは昏し」となるものである。

君子不絕人之歡、不盡人之禮。來者不豫、往者

との交情は出來るだけ保つが、禮物の贈答は簡易に從ふの意。曲禮には「君子は人の歡を盡さず、人の忠を竭さず。以て交を全らす」とあるが此とは少しく意味が違ふやうである。來者不豫往者不愼來は未來、往は既往である。未來の事について確乎

不レ愼也。去レ之不レ謗、就レ之不レ賂、亦可レ謂レ忠矣。

【通解】人々相集まり相助けて社會を形成して居る以上は、相互に圓滿に交際して歎情を通ず　は人間の一つの務である。併し徒らに贈答の禮物を華美にすることは本を忘れて末に走つて居るものである。須らく形式的方面は出來るだけ簡易にして精神的交誼に重きを置くべきである。「事豫すれば立ち、豫せざれば廢す」。といふから豫じめ將來の計畫を立てるといふ事は、一身の小より一國の大に至るまで必要な事であるが、既往の事について戒愼し反省して、是非善惡を明かにしておかねば出來ないのである。古の哲人が數十百年後の事を火を睹るやうに推度るのは不思議のやうであるが、要するに既往の鏡によつて將來を照したものである。君に仕へるのも義である。友と交るのも義である。義が合はないで去るのは致し方がないが、去つても決して惡言を放つやうな卑劣なことをしない。又君に仕へるのにも友に交るにも自ら道がある。財貨を以て寵を求め疑を買ふのは決して正しい道ではない。義を以て去り、道を以て往き、去るが爲に謗らず、就くが爲に賂はない。此が露堂々の忠といふものである。

君子恭而不レ難。安而不レ舒。遜而不レ詔。寛而不レ縱。惠而不レ儉。直而不レ徑。亦可レ謂レ知矣。

【通解】物には必ず弊の伴ふものである。一利には必ず一害の伴ふものである。身を恭くすることは美德であるが、とゝすれば角々しく窮屈らしくなる。安らかに落付いて居るはよいが、餘りに無頓着な不取締なことに陷る弊がある。謙遜も程度を過すと優侯に入り、寛大は注意をしないと放縱に流れる。だから君子は恭安遜寛の德を修養すると共に難舒詔縱の弊に陷らぬ樣に努めるのである。又慈善の爲に財を散じて吝嗇ならず、何處までも正しく直き道を進むが、禮義を以て節制することを忘れない。此の如く似て非なるものを識別して行くのが謂はゆる道德的知識といふものである。「溫にして而も厲しく、威あつて而も猛からず。恭しくして而も安し。此が孔子の孔子たる所である。

字義　不難難は易の反對であるから安らかでなく窮屈らしいこと。不舒舒は　舒靜舒など用ふれば惡いことではないが、此處ではそれが極端になつてだらしのない不取締なことをいふのである。不儉儉は本來は

たる豫定が立たないのは、既往の事について愼重なる研究が足らないからである。孔子が「往者悔いずんば來者豫せず」の意である。去之不謗就之不賂之は君なり友なりを指す、仕を絶ち交を絶つても舊君舊友を謗らない。仕を求むるにも正しい道によつて財貨などによらない。

奢らざる美德であるが此處では吝嗇の意に用ひてある。不徑は率直にして毫も禮義によつて節するなとのないこと。孔廣林は「徑行は夷狄の道なり」と註してゐる。可謂知矣は一本に「可謂無私矣」に作つてゐる。

字義　不稱其諱諱は國諱即ち其國君の諱である。支那では古來此諱を稱することを甚だ忌んだものである。晉語に晉の范獻子が魯に聘して具山敖山を問うて大失敗をしたといふ話がある。それは魯の獻公の諱が具であり、武公の諱が敖であつたからである。獻子が歸つてから「人學ばざるべからず。吾れ魯に適きて其二諱を名いつて笑はれしは唯學ばざればなり」と言つて居る。それ程諱の問題はやかましかつたのである。懼惕之言は論語にあつて孔子が林放といふ人が禮の本を問へるに答へられたるをいふ。與其倨寧句三角形で直角より過ぎて居る。即ち鈍角を倨といひ、之と反對に鋭角を句といふので。其意はやはり物事は過ぎたるよりも及ばぬ方がよいと言つてゐるが、王念孫はやはり句の方がよいと言つてゐる。

君子入人之國不稱其諱不犯其禁不服華色之服不懼惕之言故曰與其奢也寧儉與其倨也寧句可言而不信寧無言也。

【通解】　春秋の時代は多くの國々が並び立つて居たので國と國との交際がなかなかましかつた。そこで士人たるものが公にても私にても他國に入つて、己が國を辱めず又その國の感を害せぬやうにすることは大切な務であつた。先づ他國に入つたならば其國君の諱などはよく承知して決して之を稱へないやうに注意せねばならぬ注意をせぬと范獻子さへもあんな失敗をしたのである。禮又記にも「境に入つては禁を問ひ、門に入つては諱を問ふ」とある。國禁にも特に注意を拂つて誤つて之を犯すやうなことがあつてはならぬ。彼の生麥事件も畢竟英國人が我が國禁を知らなかつたから起つた事である。華美なる衣服を用ひない詭激なる言を吐かないといふ事は、勿論平素に於てもさうであるが、特に他國に入つては人の耳目をひき、延いては自分の國を辱めるやうな事にもならから一層氣をつけねばならぬのである。だから古語に奢るよりも寧ろ儉なる方がよい。過ぎたるよりも及ばぬ方がましである言つて信ぜられぬやうな語ならば寧ろ始から言はぬがよいと訓へて居るのである。疾に衰ねて居る時、大夫より賜はつた華美なる簀に臥してゐるのを覺つて、直に之を易へさせて問もなく歿したことによつて、華服を服せずといふ曾子の平生を知るべく「是國に入れや言群臣に信ぜらるれば留まつて可なり」の語によつて「寧る言ふ無からんの」語を反證することが出來る。

懼惕之言惕もオソレルである。人が懼れて耳たるをいふ。與其倨寧句三角形で直角より過ぎて居る。即ち鈍角を倨といひ、之と反對に鋭角を句といふので。其意はやはり物事は過ぎたるよりも及ばぬ方がよいとの意である。一說に句は敬の缺畫であらうと言つてゐる。

與其奢也寧儉の語

字義　不在尤之中　尤はトガメである。論語に「天を怨みず人を尤めず」とある。人より彼此と非難せられること。亂言而弗殖　正道を外れた亂暴な言は夙に之を絶ちて蕃殖生長させない。而の字は下句に對して見ても衍字である事は明かである。神言不致神

君子終日言不在尤之中。小人一言終身爲罪。君子亂言而弗殖、神言弗致也。道遠日益云。衆信弗主。靈言弗與。人言不信不和。

【通解】　孝經に「言天下に滿つれども口過なし」といへる如く、君子は言語に注意するが故に、終日人と語つても人より尤められることなく、小人は之に反して僅か一言を吐いて一生の禍を釀すことがある。論語に「子は怪力亂神を語らず」とあるが、荒唐無稽の語は世道を害し人心を迷はせるものであるから、君子は亂言をば打消して生長させないやうにし、神言は之を口にせないやうにする。千里の道も一歩より始まるから君子は一歩一歩と脚痕下に注意して理想の彼岸に進むのである。此世に在つては輿論を尊重せねばならぬ　輿論に逆つて獨り賢がつてゐるのは君子の取らぬ所である。併し輿論の正しからざる時には「擧世皆濁り我獨り清む、衆人皆醉ひ我獨り醒む」といふやうに毅然として世の思潮に逆ふこともある。又人智の及ばざるやうな靈言は耳に入つても之を肯定することなく、根柢なき人言は決して之を信

言は奇怪不可思議の言である。致には送致と召致との二義があるが此處では送り致すの方で神言を人に向つて吐くこと。道遠日益云士の道は遠大で一朝一夕に到達することは六かしい。日に〳〵根づよく修業して進益すること。「云」の字は「矣」の字の誤である。荀子には此語を引いて「矣」に作つてある。一說には此五字は前後の句と倫せない、恐らくは錯簡であらう。荀子によつて本篇の「君子疑則不言……兩問則不行其難者」の下にあるべきものであるといつてゐる。衆信弗主　盧註に「僉議の同じき所は主たらず」とあるによつて「衆信」は「衆言」の誤であらうと思はれる。前後皆「言」であるのに此處ばかり「信」である筈はない。「三人占へば二人の言に從ふ」。の意で、强ひて輿論に逆はぬことである。靈言不與　靈言は神言と同じく怪談奇說のこと。與は許すである。卽ち然りと肯定すること、一本に靈言を黔言に作つて居る。「黔」は「陰」の古字である。

字義　不折辭　折獄の折に同じく、他人の言葉を强ひて打ちぜず。固より附和雷同することはない。此の靈言人言が前の亂言神言と重複するやうであるが、彼は自動的で自分からせぬといふ方であり、此は受動的で他から受けた場合について言つたものである。

君子不唱流言、不折辭。不陳人以其所能。言必有主、行必有法。親人必有方。多知而無親、博學

壞すこと。言必有主言語にも一定の主義があつて出鱈目なことを言はない。親人必有方の方は論語に「遊ぶ必ず方あり」の方と同じく、常である、法である。即ち人と親しむにも自ら常方があり、標準があつて誰とでも親しくするのではない。多知而無親此以下三句は荀子大略篇にあるが、此語の解釋に兩説がある。卽ち徒に知る所の人が多くて仁者に親づくを知らないといふのと。知識が多いのみで親ら之を實行しないといふのとである。孔檢討は前説を主張し、我國の塚田大峰は後説を是としてゐる。次の節に「知多

而無方、好多而無定者、君子弗與也。

【通解】孔子も「大人は游言を唱へず」といつて居られるやうに君子は事實の曖昧なことを言ひふらして世人を惑はすやうなことをせず、他人の　葉の缺陷を暴いて得意がるやうなこともしない。己の長所を人に向つて誇りがましくしない所に、言ひ知れぬ奥ゆかしさがあり、限りない進歩がある。そして一言一語にも確乎たる主義があり、一擧手一投足にも一定の法度がある。人と親しむにしても「汎く衆を愛して仁に親づく」といふ風に自ら差別の尺度がある。それだから知人は多くても已に優つた人に就いて進益を謀ることを知らない人、學問は博いが一定の主義も方針もない人、言葉ばかり徒らに多くして志操の定まらぬ人、かやうな人は君子の交るを屑しさせぬ所である。君子の行く所は「主あり」「法あり」「方あり」といふ坦々たる正路である。小人は「親無し」「方無し」「定無し」の曲徑邪路に彷徨して、遂に理想の彼岸に達する機會がないのである。

けれど擇ぶ」とあるから見れば前説が通じ易いやうに思ふ。博學而無方の方は「人に親づくに必ず方有り」の方に同じ。好多而無定學問を好み多きを貪るが、心が移り變りやすい人をいふと阮宮保は説いてゐるが、愈曲園の説によれば、「好多」は「多言」に作るがよい。始め「言」を脱したので、後に誤まつて「好」の字を補つたものである。下文の多知、博學、多言は正に此三項を承けてゐるから、如何しても「多言」でなければならぬ。それに「好多」といへば多知も博學も好多であつて重複する事になるといふのである。此は確説であると思ふ。

字義　多知而擇焉の知は知人である。知人は多くと　親しみ近づく所を擇ぶ意。博學而算焉の算は選と通じて選擇する意。漢書に論語を引いて

君子多知而擇焉。博學而算焉。多言而愼焉。博學而無行、進給而不讓、好直而徑、儉而好察者、君子不與也。

【通解】知人は多くても、汎く衆を愛しても、眞に交際するには善良なる人を擇ばねばならぬ。仁に親づかねばならぬ。博く學ぶはよいが、主點を選び定めておかないと謂はゆる「二兎を逐ふものは一兎を得ず」といふ結果になる。だから論語に「博く文

「斗筲の人何ぞ選するに足らんや」としてゐるから、古來「筭」と選と通用してゐたと見にる。進給面不讓給は捷給など熟して用ひ、己が名利を得るに躁忘なること。好直而徑徑は徑に同じ、史記上林賦に「陵に徑し險に赴く」とあるも矢張徑と同じく用ひられたのだ。阮宮保は「徑は弦の邪直なり」と言つてゐる。檀弓に「直情にして徑行するは夷狄の道なり」とあるから、徑は禮に外れた直である。儉而好侲の侲は一本に僅に作つてある。窒塞不通の意で融通のきかざること。王念孫は此句は「好直而徑」といふ上句と對する句であるから、「好」の字は「儉」の上に在るがよいと言つて居るが、さうすれば意味がよく通ずる。

字義　夸而無恥、夸は自ら大にして誇ること、楊僕の文に銀黃を

を學び之を約するに禮を以てす」と戒めてある。「物いへば唇寒し秋の風」で、口は動もすれば禍の門となるものゆゑ、たとひ多く言つても注意して過なきやうに努める。博く學ぶばかりで實行の伴はない人、利己にのみ汲々として他人を擠しても私慾を遂げんとする人、直の過ぎて徑に陷れる人、儉の過ぎて侲に陷れる人、かういふ人は正しき道を過つて横しまの路に入つたので君子の與にせざる所のものである。

夸而無恥、強而無憚、好勇而忍人者、君子不與也。

懷いて鄉里に夸る」とある。忍人者人を害するに忍ぶ意にて殘忍なること。

字義　亟達而無守亟は急なり、達は榮達である。餘り自己の立身出世を急いで禮義を守らないこと。好名而無體體は實である。虛名を好んで實體が之に伴はぬこと、忿怒而爲

【通解】自から尊大にして衒ひ誇り恥づるを知らないならば、たとひ其人に長所があつても賞するに足らない。己の強いのに任せて傍若無人の擧動があり、勇を好んで人を害するを何とも思はないならば、其強も勇も何の益もない。寧ろ身を害し世を害する凶器となるのである。それだから論語にも「勇にして禮なければ亂す」と戒めてある。かゝる人々は君子の與にせざる所である。

亟達而無守好名而無體、忿怒而爲惡、足恭而口聖、而無常位者君子不與也。

【通解】一身の榮達に汲々たること、恰も飢者の食に於けるが如く、渴者の飲に於けるが如く禮義も守らず廉恥も省みない人がある。自己の名譽に戀々として、實質の之に伴はぬ人がある。此等の人は皆外聞外見を務めて、內省の修養を忽にして居る人である。忿怒の情に任せて些の節制なき短氣者、心にもなき恭敬ぶりをなして人前を衒ひ、而も口先では如何にも賢さうなことを言ふ僞善者、一定の主義見識なく、唯時流を追ひ世俗に阿る輕薄才子、此等は皆小我の爲に大我を沒却する連中である。內省の功を勉め、大我

を養ふに努める君子は、此等の輩と與にせぬのである。

悪一本に「爲悪」を「無悪」に作つてあるが善いやうである。即ち人が左程悪くも無いのに妄に忿怒すること。足恭而口聖足は子遇の反にて音シュ　普通にはスウといふ）にて過ぐること、足恭は左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ」とある。口聖は口先で自らにらがつて居ること。詩經に「具に予を聖といふ。誰か烏の雌雄を知らん」とあるがこれである。無常位の位は爵位の意味でなく心の定まりである心の定まらぬをいふ。

字義　巧言令色故らに言語を飾り故らに容色を繕うて人に媚び諂ふこと。能小行小行は小道に同じく、大道に關せざる一技一能

巧言令色、能小行而篤難於仁矣。

【通解】　巧言令色といふ鍍金でごまかさうとやる樣な人は、眞の心の光を發揮することは出來ない。末技小藝に捕はれて、可惜光陰を過しては、大道を認めぬ中に日が暮れてしまふ。仁といふ重荷は到底かゝる人々の負荷に堪ふる所でない。蓋し論語の「巧言今色鮮いかな仁」或は「好んで小慧を行ふ、難いかな」の意である。王樹枏の補注鈔錄には、此節は文字が非常に錯亂したもので、本は「巧言令色、小行不能篤於仁、難矣乎」であつたのだと考證してゐる。

をいふ。論語に「子夏曰く、小道と雖も觀る可き者あり、遠きを致すには泥まんことを恐る」とある小道である。篤難於仁篤は甚の意で難しの副詞である。論語に「曾子曰く與に竝びて仁を爲し難し」とあるに似た語法である。一本には此節を「巧言而無能、小行而篤難爲仁矣」に作つて居る。

字義　酤酒酤は一夜を經て熟せる酒、鷄鳴酒ともいふ。詩經に「既に清酤を載す」とある。巷遊而鄉居者乎鄉居を一本に鄉飲に作つてあるがよいやうである「乎」は衍字である。

嗜酤酒好謳歌巷遊而鄉居者乎、吾無望焉耳。

【通解】　尙書大傳に「古者聖帝の天下を治むるや、五十以下は烝社に非ずんば敢て遊飲せず。唯六十以上は遊飲す」といつて老人の遊飲は戒めてあるが、いかにも修養し向上せんとするものは努めて誘惑を遠ざけねばならぬ。醉つたり歌つたりして、享樂氣分に其日〳〵を消すやうな人は、いはゆる濟度し難き衆生であつて、善を責むることも道を求むることも至難である、周禮司諫に「其屬遊を以て市に飲食するものを禁ず」とあるも此が爲である。

字義　出入不時內に居り外に出づることの不定不、

出入不時言語不序安易而樂暴懼之而不恐

規律なること、安易阮宮保の註には易を簡易としてゐるが、此易は慢易輕易驕易などの易で、アナドルの意と見た方がよくはあるまいか。即ち人を易ることを何とも思はぬこと。

字義 無由知之たとひ他に善事ありとも之を知るに由なき意、

說之而不聽、雖有聖人、亦無若何矣。

【通解】 茲に一人の人があつて、其人は出入にも一定の常法なく、言語にも整然たる秩序なく、徒らに人を侮り、且つ亂暴を樂んでゐる。しかも自我ばかり强くてどんなに人から戒されても恐れず、又どんなに人から說き戒められても耳を傾けない。かゝる人はたとひ聖人でも之を如何ともすることが出來ないのである。今頃高等教育を受けて居る人の中に往々こんな難物が居るやうである。

臨事而不敬、居喪而不哀、祭祀而不畏、朝廷而不恭、則吾無由知之矣。

【通解】 論語に「事を敬して信」とも「事に臨んで畏る」。ともある如く、事の初に當つて愼めば後に悔ゆるやうな失敗はない、また此も論語に「喪は易めんより寧ろ戚せよ」とも「喪に臨んで哀まずんば吾何を以て之を觀んや」ともある通り、喪の弟一義は心中の哀でなくてはならぬ、孔子が「祭る在すが如く」せられたのは鬼神を畏れる誠意を表されるからである。「大廟に入つて、事毎に問」はれたのは、朝廷に對して恭敬の至誠を拂はれたからである。然るに若し事に臨んで熟慮することなく、喪に居つて哀しむことを知らず、祭祀に當つて鬼神を畏れず、朝廷に在つて君卿を恭敬することを知らないならば、そは既に第一義を誤まつたものである。たとひ才智を以て一時をごまかすことは出來ても、又儀式作法は立派に行はれても、殆ど價値のないものである。

三十四十之間而無藝則無藝矣。五十而不以善聞則無聞矣。七十而無德、雖有微過亦可以勉矣。

【通解】 三十を壯といひ四十を强といへは、人は三十四十に至つて肉體は完成の域に達したものである。然るに此時に及んで未だ藝能の稱すべきものが無いならば、其人は終に藝無くして終るであらう。又五十に至つても善事善行の名を博することの出來ないやうな人間は、一生聞ゆることなくして終るであらう。花の咲くにも實を結

字義 可以勉矣勉は免と通用する此篇に「戰々殆勉於罪矣」の勉も同樣である。可免とは他から責められることを免れる意。

ぶにも時期があるやうに、人の藝を成し名を得るにも自ら時期がある。徒に「大器は晩成」などゝ光陰を空しく過してはならぬ。されば孔子も「四十五十にして聞ゆる無くんば斯に亦畏るゝに足らざるなり」と戒めて居られる。七十は古來稀といはれる年である。かゝる高齢に至つてはたとひ微過小惡はあつても、年に免じて他から許してくれる。即ち修養の圈外に置かれて居るのである「心の欲する所に從ひ、矩を踰にず」に至るには少壯の時より撓まず倦まず修養に修養を重ねた結果に外ならぬのである。老齢に及んで俄に德望を希ふは、宛も枯木に花實を望むやうなものである。

其少不ニ諷誦一其壯不ニ論議一其老不ニ教誨一亦可レ謂ニ無業之人一矣。

【通解】人は年齢の時期に應じてそれ〳〵適當の修業がある。即ち少年强記の時代には詩書禮樂等古聖賢の遺文を諷誦暗記することが必要である。壯年知慮漸く進むに及んでは、古今の學術、道德の義理等を論議研究することが必要である。かくて學術なり道德なりを自己に會得し、老年に及んでは他を教誨し誘掖し、自己に得た所を他人に及ぼすのである。此修業の三階段を踏まぬものを無業の人といふのである。荀子に孔子の語として「少にして學ばずんば長じて能無きなり、老いて教へずんば死して思ふ無きなり、是故に君子は少にしては長ずるを思うて則ち學び、老いては死を思うて則ち教ふ」とあるは全く此意である。

少稱ニ不弟一焉恥也、壯稱ニ無德一焉辱也、老稱ニ無禮一焉罪也。

【通解】弟道は孝道と並び稱せられて道德の根本である、基礎である。少年子弟修德の第一義である。而も少年にして不弟と稱せられるならば、少年の眞價は何處に在るであらう。禮記に「三十を壯といひ娶る」とあり、孔子は「三十にして立つ」と言つて居られる。壯年は人生の成熟期である。此期に及んでなほ德の稱すべきものがないならば、其人はいはゆる「秀でゝ實らざるもので」あつて辱づべき至である。又老年に至れば前にも「微過ありと雖も亦以て免る可し」とあつた如く、大抵の事は年に免じて寬假してくれるものであるが、それにつけあがつて無禮であるのは罪惡である。孔子も「幼にして孫弟ならず長じて述ぶるなく、老いて死せず、是を賊

字義　不弟は論語の朱註に「善く兄長に事ふるを弟となす」とある、

となす」。と言つて居られるが、孫弟ならずとは即ち子弟である。述ぶるなしとは即ち德の無いのである。死せずとは無禮厚顏にして徒らに生を貪るを責められたものである。

字義 倦也。說文に「倦は罷なり」とある。罷は疲れ衰へる意であるから、進取的氣象の乏しいこと。

過而不能改倦也。行而不能遂恥也。慕善人而不與焉辱也。弗知而不問焉固也。

【通解】過は君子も小人も免れ難いものである。唯君子は之を改むるに努め、小人は之を文ることに努める。そこに千里の差が生ずるのである。何故に小人は過を改むることが出來ないかといへば、修養に對する精進勇猛の念が乏しいからである。詩經にもある通り「初め有らざるなし、克く終ある鮮し」で、誰しも一時は計畫し發奮し努力することはある。併しそれが長く續かない「天行健、以て君子自彊息まず」といふ人は滅多にないものである。噴火的藥罐的は君子の恥とする所である。自分獨り賢がつて古の哲人を求めて私淑することを知らず、今の君子に從つて親炙することを知らぬ者は、遼東の豕であり、井底の蛙であつて亦君子の辱とする所である知らないことは問はなくてはならぬ。疑はしいことは問はなくてはならぬ。孔夫子でさへも禮を老子に問ひ、樂を萇弘に問ひ、琴を師襄に學んで居られるではないか泰山は土壤を讓らねばこそ彼の高大を成すのである。孔子も此の如く汲々と問はれたればこそ集大成せられたといつてもよからう。硜々乎と小さく固まつて居る小人は問ふことを恥ぢる。恥ぢるから問はない、問はないから進歩しない、進歩しないからいつまで立つても吳下の阿蒙である。

說而不能窮也。喜怒異慮惑也。不能行而言之誣也。非其事而居之矯也。

字義 說而不能窮也。人に向つて說いても、それが先方に徹底せず彼をして心服させることが出來ないのは、己に未だ通ぜざる所があるからである。或は「不能」の字の下に脫字

【通解】諄々と說き縷々と述べても通じないことがある。それはたゞ先方が沒曉漢であるばかりではない、自分に通じない所があるからである。孟子が「氣一なれば志を動かす」と言つたやうに、情も動もすれば思慮を動かすものである。喜怒といふ眼鏡で觀ると、眼界の總てが本色を失つて見えるものである、白樂天が「好すれば毛羽を生じ惡めば瘡を生ず」は實に人情の弱點である、人心の惑である。實行の出來ざることを喋々するは誣妄である。古人が「言に訥にして行に敏なる」は之が爲である。自分の爲すべき事に非ざるに、妄に之に當るは僭越である、一種の詐欺であ

があるであらう喜怒異慮惑也喜も怒も一時の感情である。一時の感情によつて本心の思慮を變ずるは惑である。孔子の「既に其生を欲し、又其死を欲するは是れ惑なり」の意である。誣也表記の註に「事に於て信ならざるを誣といふ」とあり、人前を繕つて眞實ならぬこと。矯也漢書高后紀の顏師古の註に「矯は詐僞なり」とある。

字義 道言而飾其辭は色々の說があり、阮元は「人言を稱道して加ふるに虛飾を以てす」と解いて居るが王樹枏は道言を道德の言となし、道言を以て其辭を飾る。が莊子が「庖人庖を治めずと雖も、尸祝は樽俎を越にて之に代らず」。と言つて居る所以である。

道言而飾其辭虛也。無益而厚受祿竊也。好道煩言亂也。殺人而不戚焉賊也。

【通解】 古聖賢の道德の言を受賣して巧みに己の辭を飾り、而も何等實行の伴はない虛僞である、虛妄である。又何等利益を與ふることなくして厚祿を受けて居るのは、受くるのではない竊むのである。議論を好み忿爭を喜ぶものは社會を亂す危險人物であり、法律上其他己むを得ざることによつて人を殺すことはないとも限らぬが、苟くも人を殺して一點同情の涙を濺がないやうな人は良心の痳痺した賊と言はねばならぬ。泣いて馬謖を斬つた諸葛亮に人情の美を見るのではないか。

字義 說其言說は悅に同じ。論語に「學んで時に之を習ふ亦說ばしからずや」とある說である。殆於以身近之殆を盧僕射は「危し」と註してゐるけれど孔檢討は此說を非とし

は後世の謂はゆる口頭理學者であると言つてゐる。それにしては「道言」の上に「唱」とか「說」とかの字が欲しいやうであるが、今は之に從つておく。好道煩言煩と忿とは一聲の轉で、煩言は忿言である。左傳定公四年に「會同は難し、煩言あるに至らば之を治むる莫けん」とあり、杜預の註に「煩言は忿爭なり」とある。なほ本書の太孝篇には「煩言已に及ばず」とあり、同じく大孝篇には「忿言已に及ばずとあれば、煩言忿言相通じて居ることが分る。不戚戚は憂へ痛むこと。不戚は忠恕の情の無いこと。

人言不善而不違、近於說其言。說其言殆於以身近之也。殆於以身近之殆於身之矣。

【通解】 人が不善の言を吐いたならば、たとひ正々堂々之を反駁することは出來ずとも少なくとも不贊成の意を表せねばならぬ。若し不善と知りつゝ面に贊同の色を表はすならば、それは殆ど心から悅服したと同じことになる。さうすれば身不善をなすのではないが、恰も不善を爲すに近い結果となるのである。不善を爲すに近いとやがて實際不善を爲すに至るものである、故に初に當つて自分の立場を明かにしておかないと、識らず知らずの間に邪路に入つて取かへしのつかないことになるものである。

「幾し」と見るがよいと言つてゐるが、いかにも其方がよい。

字義　色蒐焉蒐は畏れ憚ること。論語に「慎みて禮無ければ則ち蒐」とある。荀子に「諰々然として常に恐る」といひ、漢書に「諰々として常に恐る」とある。蒐諰總皆畏るゝ意。近之盧註にては近の字は遠の字の誤であると言つて居る。一應尤もなやうであるが、此說は「之を身にするに殆し」に至つて窮する。三つの之の字が前章と同じく不善を指す代名詞と見れば、原文のまゝで不都合はない。

字義　心之浮也浮は沈み隱れるの反對であつて、浮び現れる意である。即ち內の心が目によつて外に發露する意味である。韓詩外傳には浮を符に作つてある、符は目標であるさうすれば意味は甚だ瞭である。行之指也指は指示指鍼の指である。言葉の善惡は行の善惡に因るものであるから、言葉は行の指示された者であるとの意。播於外也播は說文に布也とある。外に向つて播揚する意。

人言善而色蒐焉、近於不說其言。不說其言殆於以身近之也。殆於以身近之殆於身之矣。

【通解】此章は前章の意を反說したものでめる。即ち人が善い事を言つて居るのに、徒らに畏れ憚つて贊成の意を表はさないのは、優柔である卑怯である。其結果は不善の言を聽いて斷乎として退くることが出來ず、面從すると全く同じく、何時の間にか不善を敢てするやうになるものである。

故目者心之浮也。言者行之指也。作於中則播於外也。故曰以其見者占其隱者。

【通解】孟子も「人に存するもの眸子より良きはなし」と言つて居るが、いかにも眼は精神の表徵である。そして言語は實行の指示である。發露である。胸中が正しければ眸子が瞭かであり、胸中が正しくなければ眸子が眊いものである、行の嚴正なものは言語も謹直である。行の輕卒なものは言語も粗野である。だから其の現れて居る眼と言語とを以て、其隱れたる精神と行とをト知することが出來るのである。孟子の「其言を聽いて其眸子を觀れば人焉んぞ廋さんや」といふ觀人法は、蓋し此意に本づいたものであらう。

字義　故曰此二字は衍字であらう。說之流流は水の

故曰聽其言也、可以知其所好矣。觀說之流、可以知其術也。久而復之可以知其信矣。觀其所

一方に流れ赴く如く、その説く所の主張傾向をいふのである。其術術は心術をいふ。久而復之復は履むである言づた事を履行すること。論語に「信、義に近ければ言復むべし」とある復である。

字義 臨懼之臨の字は恐らくは衍字であらう。不惛惛は心の亂るゝこと。説文に「惛は不憭なり」とある。憭は慧であるから不憭は心の暗く亂れることである。不誣王念孫は「誣」は「輕」の誤であるといつて居る。文王官人篇には「輕」に作つてある。居約而觀其不營也約は論語に

愛親可以知其人矣。

【通解】 金錢を好む人は、とかく金錢のことを話したがり、名譽を好む人は、とかく名譽のことを話したがるものである。だから其人の話を聽けば大概其人の好む所は想像が出來るものである。又人の意見を吐くのを聽いてその説の傾向を觀れば、其人が如何なる術數を胸中に藏してゐるかを忖度することが出來る。孟子が「詖辭には其蔽はるゝ所を知り、淫辭には其陷る所を知り、邪辭には其離るゝ所を知り、遁辭には其窮する所を知る」と言つてゐるのが正しく此である。又久しく時日を經過しても能く前言を履行するならば、其人は必ず信義を守る人であゝ。「同氣相求め、同聲相應ず」るが自然の情であるから、其愛親する所の人によつて、其人の如何を知ることが出來る。論語にも「因、其親を失はずんば亦宗とすべきなり」といつてある。要するに此章は謂はゆる觀人法である。併し觀人法は人相師を學ぶではない。人を觀ると共に、人に觀らるゝことを思つて自ら反省するのである。

臨懼之而觀其不恐也。怒之而觀其不惛也。喜之而觀其不誣也。近諸色而觀其不踰也。飲食之而觀其有常也。利之而觀其能讓也。居哀而觀其貞也。居約而觀其不營也。勤勞之而觀其不擾也。

【通解】 誰しも事の無い時は强さうな事を言つて居るが、さて威武を以て壓するとか、兵刃を以て脅すといふやうな事に遭遇させて、初めて其人の勇怯が分るのである。智慧のあるやうな人でも一朝の怒に本心を失ひ、身を亡ぼし家を破る例は少なくない。怒るやうな事に出會しても其心を亂さない所に其人のおちつきを觀ることが出來る。嬉しい事には有頂天になりがちなものである。ヂット抑へて感情を縱まゝにせぬ所に其人の重々しいことが分る。晉の謝安が淝水の捷報を聽きながら、そ知らぬ顔に碁を圍んで居た所に、彼の輕からざる態度を想像せられるではないか。色に近づいても決して道ならぬ心を起さず、飲食に當つても必ず常軌を逸せないならば

「不仁者は以て久しく約に處るべからず」の約で貧困の意。嘗は亂す惑はす意文王官人篇には「之を煩亂すれども嘗せず」とありて、亂なりと註し、淮南子精神訓には「物能く營するなし」とありて、惑なりと註してゐる。熒惑の熒と同意である。不擾の擾は煩擾紛擾など熟し心を亂すこと。

字義　色勿爲不善を爲さうと思ふ

其人は必ずや意志の堅固な人である。利益を壟斷するものは賤丈夫であると孟子は言つて居るが、利益を專有せられる場合にあつて、而も其利益を他に割愛するのが眞に能く讓るといふものである。哀即ち喪は死者に對する禮である。死者に對するは生者に對するより怠慢に流れ易い。喪に居つてよくその禮を盡すならば、其人は必ずや終始變らざる貞心のある人である「其喪を省みて其貞良を觀る」とは此意味である。「不仁者は以て久しく約に處るべからず」。「小人は窮すれば斯に亂す」。とある通り、貧困窮約は實に人の志操の堅否を試す試金石である。無事の時に精神の安靜を保つはなほ容易である。忙しく勞勞しながら心の安靜を失はないのが眞の安靜援れざるの人である。此章も一種の觀人法であるが、特にかゝる事項を設けて人を試驗する意味ではない。人は自ら色々な境遇に置かれるものである。その境遇に處する方法によつて其人と爲りを觀るのである。

君子之於不善也、身勿爲可能也。色勿爲不可能也。心思勿爲不可能也。

【通解】　すべて不善を爲す道程を考へて見ると、先づ不善を爲さうとする心が中に動きそれが顏色に露はれ、行爲に發するものである。行爲に發しては最早致し方がない。君子は身に不善を行はないのみならず、顏色にも之を現はさない。顏色にも現はさないのみならず、初からそんな考を心に起さない。其の不善を身に爲さないこと、不善を顏色に現はさないことまでは、或は及ぶことが出來るが、初から不善の心を起さないといふこと、即ち謂はゆる「思邪なし」の境涯は、君子修養の極致であつてなか〳〵及び難い所である。バイブルに「婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したるなり」とあるは、正しく心に不善を爲すを戒めたものである。

太上樂善、其次安之、其下亦能自彊。

【通解】　人間最上の德は善を樂むにある。樂むとは心中愉快に堪へないことである。善を爲すことが名譽の爲でもなく、利益の爲でもない、唯善を爲す其事が愉快で、謂はゆる「手の之を舞ひ足の之を踏むを知らぬ」のである。其次は善に安んずるので心が顏色に現はれること。次の句の色也の也の字は衍字であらう。心思勿爲群書治要には思の字が無い。なる程語句の均衡から言へば無い方がよいが、意味の方から言へば有つても差支ないと思ふ。

字義　自彊彊は强に同じく勉强すること。易經に

「君子自ら彊む」とあり。

字義　智者利道智者は道を以て利なりとして之を行ふこと。愚者從愚鈍なる者は徒に他人に從ふばかりで自分から進んで爲すことがない。謂はゆる「碌々人にある。安んずるとは固く善を信じて如何なる誘惑にも動搖せぬことである。其次は善事を認めて、苦しきを忍び辛きを堪へて勉強して之を爲すのである。自ら强むるものは未だ假物たるを免れないが、之を修養して安んずるに至つて、善事が斯に我物となるのである。更に進んで樂むに至れば、善の外に我なく、我の外に善なしといふ境涯に進むのである。孔夫子が疏食を食ひ水を飲んで居られても、顏子が一簞の食一瓢の飲の中に在つても、悠々として樂んで居たのが此太上の德である。中庸に「或は安んじて之を行ひ、或は利して之を行ひ、或は勉强して之を行ふ、其功を成すに及んでは一なり」とあるは個中の消息を傳へたものである。

仁者樂道、智者利道。愚者從、弱者畏不愚不弱、執誣以彊、亦可謂棄民矣

【通解】　仁者は道を樂むもので、前章の謂はゆる太上の德に屬するものである。智者は道を利として行ふもので、仁者の次となすべきものである。論語にも「仁者は仁に安んじ、知者は仁を利す」とある。徒に人に從ふばかりなる愚者、敢爲の勇なき弱者、此等は哀むべき劣敗者ではあるが、なほ善導すべき餘地がある。彼の固く我見を執つて頑然他の忠言を容れざる人は、下の下なる者であつて之を如何ともすることが出來ないのである。

字義　執誣以彊誣妄の自說を固く執つて、屈强で頑强で決して他人の言を容れないこと。棄民最下の人民で濟度し難いものである。

太上不レ生レ惡。其次而能レ夙絕レ之也。其下復而能レ改レ也。

【通解】　初から惡を爲さうといふ心の起らないものは、いはゆる生知安行ともいふべく、上の上なるものである。併したとひ惡心が生じても、理性の力を以て夙に之を根絕したならば過を復びせないで濟むだらう。此がいはゆる學知利行に屬するもので其次とすべきものである。上文に「禍の由つて生ずる所自ら孅々たり、是故に君子夙に之を絕つ」とあつたのが此である。又夙に之を絕つことが出來ず過を復びするに至つても、眞に過を自覺し、之を改むるに憚らなかつたならば、亦過なきに至るであらう。いはゆる困知勉行であるが、遂に過なき人となるは同然である。「分け登るよつて事を成すもの」である。弱者畏意志の弱い人は何かを爲さうと思つても、頭を畏れ尾を畏れて遂に成すことがない。執誣以彊誣妄の自說を固く執つて、屈强で頑强で決して他人の言を容れないこと。棄民最下の人民で濟度し難いものである。

字義　其次而能王念孫の說に「其次の字の下に「生」の字を脫して居るだらうと言つて居り、阮元は之に反對してゐるが、たとひ初から無かつたにても生の字を入れて考へ

て見た方が意味がよく通ずる。其下復復は論語に「過を復びせず」とある復にて貳たびの意である。

龍の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」である。

字義　殞身殞は「落」である。阮宮保は殁なりと註して居る。身を亡ぼすこと。鄂々鄂はもと「咢」に作つてある。相逆らふ意である。韓詩外傳に「願はくは鄂々の臣たらん」とあり、史記趙世家にも諸大夫の朝する、徒に唯々を聞く。周舍の鄂々を聞かず」とある。普通に諤々と書くは俗字である。戰々おのゝき懼れること。詩經に「戰々兢々として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」とある。殆免殆は近しと訓むことは、上章に「身を以て之に近づくに殆し」とあつたと同じ。

復而不改、殞身覆家、大者傾覆社稷。是故君子出言以鄂々、行身以戰々、亦殆免於罪矣。

【通解】たとひ復びしても改めさへすれば、過は消えるのであるが、「過つて改めざる是を過といふ。」とある通り、改めないと恐るべき結果を生ずるのである。即ち小にしては身を亡ぼし家を覆すことゝなり、大にしては國家を傾覆するやうな事にもなるのである。だから君子の言を發するや侃々鄂々正義を楯として他の過を正して行き、自らの行は戰々兢々と謹み懼れて過無きを期するのである。かくてこそ彼の身を殞し家を覆し、將た社稷を傾覆する恐ろしい罪惡を免れることが出來るのである。

字義　由爲大也は古へ「猶」と通じて用ひらる。勿慮無慮亡慮などゝ同じ。淮南子俶眞篇の註に「無慮は大數の名なり」とある。大凡といふ意味である。

是故君子爲小由爲大也。居由仕也。備則未爲備也。而勿慮存焉。

【通解】前節にあつたやうに戰々と身を行つて罪を免れることが出來るから、君子は注意した上にも注意して、小事を爲すにも大事を爲すが如くにし、些の油斷をしない。いつたい小事を小事として油斷をするから、思はぬ失敗を招くのである。「山に躓かずして垤に躓づく」と韓非子が戒めて居る所以である。家に居つても身を怠らず氣を弛めず、全く君に仕へて朝に在るが如き心持で居る。孔夫子は「書に云ふ、孝か惟れ孝、兄弟に友に、有政に施す、是れ亦政を爲す」と言つて居られる。併し一國と一家とは、地の大小に於て人の衆寡に於て、到底比較にならない。一家の事はたとひ備はるといつても、國家に比較すれば備はると言はれぬは當然の事なれど、家を齊ふる中に大凡そ國家を治むる理は存して居ることは次節に說く通りである。

字義　承嗣　承は「丞」と通じ嗣は「司」と通ずる。丞司の文字は左傳にもあつて、副官に當るものである。

字義　所予從政者　予は「與」と通じ、トモニと訓む。共に政に從ふ所の者、即ち家臣をいふ。賜與其宮室　宮室は妻子の居る所を指して言ふ、荀子大略篇には此文を引いてあるが、楊倞の註に「宮室は妻子なり」とある。なほ大略篇には慶賞の上に「用」の字があり、國の下に「家」の字がある。

字義　自內始　內は家庭の內を指していふ。下の內

事父可以事君、事兄可以事師長。使子猶使臣也。使弟猶使承嗣也。

【通解】　此章は前章の「居る由ほ仕ふるが如きなり」の意を說明したものである。家に在つて父に事ふるの道は即ち仕へて君に盡す道である。家に在つて兄に事ふる道は即ち出でゝ師長に事ふる道である。孝經にも「君子の親に事ふる孝、故に忠君に移すべし、兄に事ふる悌故に順長に移すべし」とある。又父として子を使ふは、恰も顯職に在つて其私臣を使ふが如く、兄として弟を使ふは、主宰の官に在つて其副貳の官を使ふが如きものである。此の如く一家は一小社會である。上に對する道もあれば下に對する道もある。一家に於て善良なる家族となり得れば、社會に出て善良なる國民となり得るのである。

能取朋友者亦能取所予從政者矣。賜與其宮室亦猶慶賞於國也。忿怒其臣妾亦猶用刑罰於萬民也。

【通解】　家に居る時、能く良友を擇んで交を結ぶ者は、人を識る明のある人である。かゝる人は一たび仕ふれば必ず政を與にする家臣を得るであらう。賞罰は國家の重大事であるが、一家の戶主として其妻子眷族に給與することが、過ぐることなく及ばぬことなく、偏せず私せざるやうに行はれるならば、其方法を國家の政事上に移せば、やがて公平なる慶賞の道となるのである。又奴僕婢妾の非を正し惡を矯むるに緩急宜しきを得、彼等をして自暴自棄せしめず、眞に悔悟し覺醒するやうに忿怒の利器を用ふることが、即ち國家として刑罰を萬民に用ふる方法であり精神である。要するに家庭は國家の短縮であり、國家は家庭の擴大である。齊家と治國とは根本義に於て相違のあるべき筈はないのである。

是故爲善必自內始也。內人怨之雖外人亦不能立也。

人は家庭の内の人をいひ、外人は家庭以外の一般の人をいつたものである。不能立を阮宮保は孝經に本づいて、名を立つることゝ註して居る。

字義　不淫は大なり。詩經に「既に淫威あり」とあり、自ら尊大にすること。臨事而栗栗は慄に同じく懼るゝこと。鮮不濟矣鮮は少なしであろ。論語に「巧言令色鮮いかな仁」とあり、濟は成なり、物を成し遂げること。

字義　日且は前に「日且業に就き夕に自ら省る」とあつた通り朝

【通解】家庭と國家との關係前述の如くなるが故に、善を爲すにも、徒に天下だ國家だと大言壯語するを止め、先づ家庭の内から始めるがよい。謂はゆる齊家の法を誤まつて家族に怨言のあるやうな事では、如何に多數の外人はあつても、眞に芳ばしい名を立つることは出來ないのである。孝經にも「家に居つて理なり、故に治官に移すべし。是を以て行内に成つて名後世に立つ」とある。今の世道德宗教を講ずる大家先生も、一たび其家庭を窺へば、亂行悲劇人をして眉を顰めしめる者は少なくない。感化教育の事が微々として振はないのは寧ろ當然といはねばならぬ。

居上位而不淫、臨事而栗者鮮不濟矣。

【通解】地位が高くなる。俸給が多くなる。贅澤がしたくなる。威張りたくなる。人から排斥せられる。位置が保たれなくなる。滿を以て損を招くもの比々皆此である。だから孝經にも「上に在つて驕らずば高けれども危からず。節を制し度を謹めば、滿つれども溢れず」と戒めてある。又盲目的に猪突するは勇に似て勇でない。孔子が「事に臨んで懼れ、謀を好んで成す者なり」と言はれたのが眞勇である。栗るゝとは躊躇逡巡の意味ではない。愼思熟慮の意味である。愼思熟慮の後に敢爲斷行が伴ふのは勿論のことである。日露戰爭に於ける日本海海戰の大捷は、我東鄕大將が、上位に在つて益々謙抑せられた人格と、事に臨んで懼れた眞勇とがもたらした成果であることは、萬人の齊しく認めて居る所ではないか。

先憂事者後樂事、先樂事者後憂事。

【通解】物は成るの日に成るものでなく、必ず由つて來る所のあるものである。であるから其の由つて來る所を憂へ慮つて、所謂「天の未だ陰雨せざるに牖戶を綢繆し」ておけば、決して臍を噬むやうな心配はないのである、之に反して唯眼前の樂事に耽溺して明日の計を慢るならば、必ずや哀むべき運命は其人に授けられるであらう。宋の忠臣范仲淹が岳陽樓の記に於て「必ずや天下の憂に先だつて憂へ、天下の樂に後れて樂む」と言つたのは此に本づいたものではなからうか。

昔者天子、日且思其四海之內、戰戰惟恐不能乂也。諸侯日且思其四封之內、戰戰惟恐失損

の事であるが、此處では日日或は日夕の意に用ひられて毎日のことである。戰々前にも註した如く戒め懼れること。不能乂乂は治なり、世の中の平かに治まること。史記封禪書に「方内乂安にして民人疾なし」とあり。四封封は境なり四境と同じく國内のこと。

之也。大夫士日旦思其官、戰々惟恐不能勝也。庶人日旦思其事、戰々惟恐刑罰之至也。是故臨事而栗者、鮮不濟矣。

【通解】事に臨んでは慄れねばならぬ。事に當つては憂へねばならぬ。併し其事は各自の地位によつて大小廣狹がある。一天萬乘の天子は四海を以て家として居られるから、日夜思を四海の内に致し、平和の破れんことに軫念せられる、「四方の海みな同胞と思ふ世になど浪風のたちさわぐらん」の明治大帝の御製を拜誦するとき、世界の不和を御心配になつた大御心を想察し奉るのである。又一國を領有する諸侯は常に封境の内を思ひ、己が德化の足らず政治の善からず、其國家を失ひ損ふことなきかを恐れる。大夫なり士なりは各官職がある。官職に對する責務がある。そこで荒怠相誡めて、己が成績の他に劣る無きかを恐れるのである。庶人は庶人として各農工商の行事がある。其行事を慎んで怠らず偽らず、戰々として刑罰に陷らぬやうに注意するのである。此の如く上は天子より下は庶人に至るまで、事に臨んで戒慎して行けば、決して失敗は無いのである。彼の小にしては一身一家を亡ぼし、大にしては天下國家を亂すに至るは、畢竟此の「思」と「恐」と即ち「栗」を忘れるからである。孟子が「夫れ人必ず自ら侮り、然後人之を侮り、家必ず自ら毀ちて而る後人之を毀ち、國必ず自ら伐ちて而る後人之を伐つ」と言つて居るのに首肯れるのである。冒頭の昔者の字は、今の此の如くならざるを慨したものである。

君子之於子也、愛而勿面也。使而勿貌也。導之以道而勿强也。

【通解】君子も固より其子を愛するが、其愛情を顏色に形はして機嫌を取るやうな事をしない。又其子を使つては其勤勞に同情するが、是亦顏色を動かして慰勞することをしない。面貌を以て其子を慰め悅ばすことは、他人がましく小惠を施すに近いからである。父母の愛は天の如し、「天何を言ふか、四時行はれ百物育す」。でなければならぬ。正しき道を以て之を善導はするが、之を强ふることをしない。善を責むるは朋友の道であつて父子の道ではない。孟子も「父子の間は善を責めず。善を責むれば離る。離るれば不祥これより大なるはなし」。と言つて居る。

字義　此語は荀子大略篇に引いてあるが「愛」の下と「使」の下とに「之」といふ字がある。勿面愛する心を顏色に表はさないこと。勿貌顏貌を以て之を慰勞しないこと。貌と面とは互文であつて

同意である。徂徠が「禮貌を假りて其驕傲を長ずる勿れ」と解いて居るのは取らない。

字義　宮中雍々　當時は上下通じて家室を宮と言つたので宮殿の意味ではない。雍々は和ぐ貌、肅々敬ひ謹む貌。憘々悅び樂しむ貌。切々論語の朱註に「切々は懇到なり」とある。一説には切磋して相正す義としてゐるが、此説が適切のやうである。

宮中雍々外焉肅々兄弟憘々朋友切々。

【通解】人は時と處と位とによつて適當に身を處して行かねばならぬ。家庭の中に於ては宜しく和樂して春の如くあるべきである。諺にも「笑ふ門には福來る」と言つて居る。「門を出でゝは大賓を見るが如く」、苟くも傲慢の態度なきやうにし、兄弟は天倫なれば憘々として和悅するを主とし、朋友は義を以て交るものなれば、切々として善を責むるを第一とすべきである。されば論語にも「朋友には切々たり偲々たり。兄弟には怡々たり」。とある。

字義　遠者以貌近者以情　遠は文の疏遠なること。貌は禮貌の意にて人に對して儀容の正しきをいふ。近は遠の反にて交の親近なること。情は貌に對して中情即ち眞心の意である。立其所能能は賢能の意である。立は下の遠ざくに對して居るから朋友として立てゝ己之に近づく意である。無失其所守心の中に確乎として守る所がある。即ち志操の賢實にして奪ふ可らざる人をいふ。孟子に「曾子の守約なり」とある「守」である。

遠者以貌、近者以情。友以立其所能而遠其所不能。苟無失其所守亦可與終身矣。

【通解】交際の疏遠なるものに對しては、努めて禮儀を失はないやうにし、交際の親近なるものに對しては中情の阻隔なきを要する。己に如かざる者を友とするは損あつて益がないから、友を選ぶにはよく其賢不賢を辨別し、賢なる者を近づけ、不賢なる者を遠ざくるやうにする。此の如くすれば論語に曾子のいはゆる「文を以て友を會し、友を以て仁を輔く」となるので、友より受くる益は蓋し少なくない。併し如何に賢能であつても、其人の志操が堅實でなかつたならば、論語にいはゆる「與に適くべからず」「與に立つべからず」である、たとひ賢能にはあらずとも其人にして確乎として守る所があるならば、終身の交を結ぶに足るものである。

白がねも黃がねも玉も何せんにまされる寶子にしかめやも　山上憶良

世の中に思あれども子をこふる思にまさる思なきかな　紀貫之

子を思ふ心の道の心もて親につかへよ世の中の人　松平定信

曾子本孝

本孝といふのは此篇の首句に「忠は其れ孝の本か」とある義を取つて名づけたもので、忠を以て孝の本とすることを述べたものである尤も忠とは後世に專ら君に對して用ふる忠の意味ではなく、忠恕の忠で眞心の意である。

曾子曰、忠者其孝之本歟。

【通解】孝といふ字は「老」と「子」との合成文字である。即ち子弟が長老に對する道である。此孝が百行の本であるが、孝は決して虛飾でない外貌でない。一個の忠から來て居る。「中」と「心」との合成が忠である。即ち僞らざる人の至情である。純乎たる胸中の至誠である。中庸に孔子が「忠恕道を違ること遠からず。諸を已に施して願はずんば亦人に施す勿れ」とある忠恕である。孔夫子が「吾道一以て之を貫く」と言はれたのを、曾子が門人に對して「夫子の道は忠恕のみ」と說明して居る忠恕である。忠恕は我儒敎に於て身を立て道を行ふ根本であつて、實に曾子が孔夫子から學び得た心法である。大戴禮に孔子曰く「孝は德の始なり。弟は德の序なり。信は德の厚なり。忠は德の正なり。參や夫の四德に中る者なり」とあれば、曾子が斯道を體得した事を知られるのである。

孝子不レ登レ高不レ履レ危。痺亦弗レ憑。不レ苟レ笑。不レ苟レ訾。隱レテハ不レ命。臨ミテハ不レ指。故ニ不レ在ル尤之中ニ也。

【通解】我身は父母の分體である遺體である。されば孝子は戰々兢々と身を愼み行を戒め、徒に高きに登り危きを履み深きに臨んで、身體髮膚を毀傷することを爲さない。且つ一顰一笑をも苟くもせない。故なくして笑つたならば儀容を失ふであらう。故なくして毀らば禍を招くに至るであらう。かくて我身を辱かしむるは卽ち父母を辱かしむる所以である。曲禮にも「人の子たるものは……無聲に聽き無形に視、高きに登らず、深きに臨まず、苟くも訾らず、苟くも笑はず。孝子は闇に服せず、

字義 庳亦弗憑庳は卑であつて、低いこと卽ち深いことであるから、深きに臨まないことをいふ。不苟訾は毀るである。隱不命孔撿討は「人隱僻あるも之を訐かず」と註してゐるが、稍牽强の解と思ふ、私

は張惠言が「隱幽の處に在つて言を以て命ぜず」と說いて居るを取る。即ち物蔭の暗いやうな處に居て、俄に頓狂な聲を發すれば必ず人を驚かすものである。臨不指臨は下臨の意で高きに登つて見下すこと。曲禮にも「城に登つては指さず、城上にては呼ばず」とある。尤之中尤は咎なり。人より非難攻擊を受くること。

字義　惡言死惡言は人より毀られること。荀子大略篇に此語を引き楊倞の註に死は澌にて消亡盡すことゝ言つて

孝子惡言死焉、流言止焉、美言興焉。故惡言不レ出レ於レ口、煩言不レ及レ於レ己。

危きに登らず、親を辱かしめんことを懼るればなり」とある。物隱れたる所に在つて、出しぬけに發言したり、高處に登つて下方を指さすは、共に不謹慎な態度であつて、人を惑はしたり疑を抱かせたりするものであるから、遺體を慎む孝子はさる事を爲さない。だから人より非難を受けることもなく、父母を辱かしむる事もないのである。

【通解】孝子が一言一動を戒め慎むこと彼の如くなれば、惡言は何時の間にか消に去り流言は何時の間にか止まつて、讃美の言が自ら興つて來るのである。大學にも「言悖つて出づる者は亦悖つて入る」とある如く、爾に出づる者は爾に反るものである

が、孝子は人に向つて惡言を吐かざるが故に、人も亦孝子に向つて忿言を反さないのである。小戴記に「一たび言を出すにも敢て父母を忘れず。是故に惡言口に出さず、忿言身に反らず」とあるは全く此と同意である。

字義　居易以俟命。易は易經にいはゆる易簡の道であつて、徒に作爲を弄しないこと。俟命は天命に任せておく。興險行以徼幸一本に險を儉に作ある。韓非子に「善の生ずること春の如く、惡の死すること秋の如し」とあるも同一の用法である。美言興美言は善言と同じく讃美の言をいふ。煩言不及己煩は前にも註した如く忿と通じ、忿言は忿爭の言である。人が自分に亂暴な忿言を仕向けぬこと。

故孝子之事レ親也居レ易以俟レ命、不レ興レ險行以徼幸。孝子游レ之、暴人違レ之。出レ門而使、不レ以レ或爲父母憂也。

【通解】父母の分體を奉じて父母に事ふるには、平易自然の道を踏んで天命を俟つべくて行くが、世には此道に違つて身を忘れ親を忘れる暴人も居る。又使して門外に出

つてあるが、相通じて用ひたものである。險は左傳に「大にして嫋、險にして易行す」とあつて、上の易簡平易の道の反對なる險難傾危の道である。微は要むと訓み、萬一の幸を希ふこと、いはゆる僥倖である。此は中庸に在る曾子の語であるが、中庸には「君子は易に居て以て命を俟ち、小人は險を行つて以て幸を徼む」とあつて「興」の字は無い。孝子游之游は由と通じ從ひ由ること。「之」は上の易に居つて險を興さゞる道を指す。不以或爲父母憂或は惑である。疑惑の爲に父母をして憂へしむるやうな事をなさない。

でたならば殊に其行動を公明にすべきである。かの芳しからざる噂を立て、父母をして疑惑せしめ憂慮せしむるが如きは亦不孝の一つである。

字義　險塗隘巷危險なる路、狹隘なる街にて、共に身を害ふこと多き處である。

險塗隘巷不求先焉。以愛其身以不敢忘其親也。

【通解】國の爲君の爲には死地に入らねばならぬ場合もある。さる特別の時を除いては險塗隘巷の如き危險の地に、人に先んじて入らぬがよい。かうして我身を愛するは要するに我身を單に我身と思はず、尊き父母の遺體なることを忘れざるが爲である。呂氏春秋に曾子が「舟して游がず、道して徑せず、能く支體を全うして以て宗廟を守る」と言つて居るのも全く此意である。

孝子之使人也、不敢肆行。不敢自專也。父死三年不敢改父之道。又能事父之朋友。又能率朋友以助敬也。

【通解】父母が生存して居れば、孝子は奴僕を使ふのにも決して自由勝手にすることなく、必ず父母の許しを得、父母の命を待つて之を使ふものである。曾子が曾皙を養ふに、酒肉を徹する時には必ず與ふる所を質ねたといへば、況んや父母の召使ふ奴僕を我物顔に使用せないのは當然のことである。父が亡くなつて三年の間は父の道を改めない。三年はいふ迄もなく父母の喪期である。喪中はなほ父在すが如く、其爲し置きたる事を改むることは情に於て忍びないのである。その忍びない情に從ふのが大孝である。されば論語にも「父死して三年父の道を改むるなきは孝と謂ふべし」とあり、又曾子も「吾れ諸を夫子に聞く。孟莊子の孝や、其他は能くすべきなり。其の父の臣と父の政とを改めざるは能くし難きなり」と言つて居る。能く父の

字義　君子之孝　君子は下の士及び庶人に對すればいはゆる在位の君子にて卿大夫を指したものである。以力惡食　勤儉力行して父母に甘美を奉じ己は粗食に甘んじてゐる。一說に惡食は善食の誤であるといふ善食とすれば、父母に甘美の食を致すことである。三德は三老に同じく、三公の年老いたるもの、白虎通に「三老を臣とせざるは孝を崇ぶなり」とあり。

朋友に事へ、又能く己の友人と交り、彼等の歡心を失はなかつたならば、彼等は我に親しむと共に、我父に對して敬意を拂ふのであらう。さすれば謂はゆる敬を助くることゝなるのである。されば孝經にも「人の歡心を得て以て其親に事ふ」とある。

君子之孝也、以正致諫。士之孝也以德從命。庶人之孝也、以力惡食任善不敢臣三德。

【通解】　孝の本義に於ては固より上下貴賤の別はないが、其方法に至つては地位によつて自ら異なるものである。即ち卿大夫など上流の階級に位する者は、常に正義正道を以て親を諫め、親をして世間から非難を受けしめないやうにすることが最も大切である。孝經にも「父爭子あれば身不義に陷らず」とある。平重盛の大孝は實に此點に存するのである。中流の階級なる士も、唯親の命に從ふのが孝ではない。德命即ち正しき命ならばもとより從ふべきであるが、若し正しからざる命であつたならば宜しく赤心を捧げて諫むべきである。荀子にも「孝子の命に從はざる所以のもの三あり」とあつて、命に從へば親危き場合、命に從へば親辱しめらるゝ場合、命に從へば禽獸たる場合は、たとひ親の命なりとも從はないと言つてある。彼の父の亂命に從はず遂に父の妾を他に嫁した魏顆を決して不孝の子とは言はないのである。

要するに荀子のいはゆる「從不從の義を明かにして、能く恭敬忠信誠慤を致し、以て愼んで之を行はゞ大孝と謂ふべし」とある。下流の階級に屬する庶人に至つては勤儉力行し、自らは粗衣粗食に甘んじ、親をして衣食の滿足を得させるといふ事が第一の孝行である。養老の孝子などが此に屬するものである。孝經には「庶人の孝は、天の道に任じ、地の利を分ち、身を謹み用を節し以て父母を養ふ」とある。最後に王者の孝を述べたのである。天下を以て家とする王者は、善に任じ賢を用ふることが第一であるが、三公の年老いたる者は特別の法を以て之を待遇し、臣下として取扱はない。かくて天下に向つて敬老尙齒の範を示されるのである。現に我國の宮中に於ても高齡の高位顯官に對して、賜杖其他の恩遇あるは、正しく王者の大孝を御示しになるものと拜察するのである。王樹枏の補注叙錄には王者の孝を最後に述べてあるは順序を誤つてゐる。最後の句は當に最初の君子之孝也の下に在るべきものである。君子とは君を指したものである。そして以正致諫の上に卿大夫之孝也の六字が無けられねばならぬ。かくて上天子より下庶人に至る孝を順次に述べることになると言つてゐる。一說として存しておく。

字義　哀以莅焉莅は臨に同じ、たちのぞむこと。

故孝子於親也。生則有義以輔之。死則哀以莅焉。祭祀則莅之以敬。如此而成於孝子也。

【通解】　之を要するに、孝子の親に對する道は、親の生存中は正義を以て之を輔け、亡くなつたならば「喪は易めんより寧ろ戚め」にて、葬儀萬端に滿腔の哀情を盡す。去る者は日に疎しといふが、春秋伏臘には在すが如く之を祭つて、些も敬意を失はず、追遠の誠を致すのである。生前に善く事へただけではまだ孝とは言はれない。善く喪に居つても、まだ大孝とはいはれない。永久の祭祀に永久の敬意を盡すに至つて始て孝を完うする者と言はれるのである。換言すれば眞の孝子の親を思ふ情は義と哀と敬とを以て一生を貫くものである。

たしからぬ身ぞ惜まるゝ父母の親の残せる形見と思へば　元政

秋の日は山の端近し暮れぬ間に母に見になん急げわが駒　大江千里

父母はわが家の神わが神と心つくしていつけ人の子　本居宣長

曾子立孝

篇首に「君子孝を立つるに其忠を之れ用ふ」とあるから、立孝の二字を取つて篇に名づけたのである。

曾子曰、君子立孝、其忠之用也。禮之貴也。

字義　其忠之用忠は前にも述べた如く、忠恕の忠である。用は說文に「施行すべきなり」とあれば、忠を行ふ意と見れば意は通ずるが、由と用

【通解】　前篇にも「忠は其れ孝の本か」とあつたやうに、僞らず飾らざる人の忠情が孝の本である。即ち心の中に燃ゆる愛の力を孝と名づけるのである。但忠即ち愛のみを用ひると、餘りに抑れて敬を失し易いものである。そこで君子は禮を貴んで其弊を補ふものである。中江藤樹先生が常に愛敬の二字を掲げて子弟を教育せられた精神も此處であらうと思はれるのである。論語に「今の孝は是を能く養ふと謂ふ。犬馬に至るまで皆能く養ふあり。敬せずんば何を以て別たんや」とあるは孝道に敬の大切なること、即ち禮の貴ぶべきことを言つたものである。

と通用する故、忠にこれ由ると訓めば更によく解るやうに思ふ　但由を用と用ひた例は、詩經の「君子は易く言を由ふるなし」など、其他諸所にあるが、未だ用を由ると用ひて居る例を見つけないから暫く說文の解に從つておく。

字義　承其兄承は從順の道を以て兄に事へること。順其弟順は訓と通じて用ふ。廣雅に「訓は順なり」とある。一月には順を訓に改めて居る。

故爲人子而不能孝其父者、不敢言人父不能畜其子者。爲人弟而不能承其兄者、不敢言人兄不能順其弟者。爲人臣而不能事其君者、不敢言人君不能使其臣者也。

【通解】人の子として其父に孝道を盡すことの出來ないものは、他人の父が其子を善く養育することの出來ないのについて、とかくの言を挾む資格はない。父に對する孝即ち愛敬の精神の無いものは、到底子を教育する力のある者ではないからである。同じく人の弟として善く兄に事へることの出來ない者は、他人の兄が其弟を善く訓ふることの出來ぬを咎めることは出來ず、人の臣として善く其君に事へることの出來ない者は、他の人君が其臣を使ふ道を誤まつてゐるのを責めることは出來ない。たとひ自分には十分の自信があつても、他人の行を責めることは六かしいものである、況んや自分の行を省みないで人の行を責められる者ではない。よし責めても何の効果のあるものではない。

字義　順弟此順も前節と同じく訓ふると訓む、

故與父言言畜子、與子言言孝父、與兄言言順弟、與弟言言承兄、與君言言使臣、與臣言言事君。

【通解】前節にもあつたやうに、自分の爲すべきことを爲さないで人を責めても効の無いものである。故に人は他に求むるよりも先づ自ら修めばならぬ。即ち父としては子に孝を望むよりも、先づ如何にして子を養ひ育つべきかを考へねばならぬ。忠恕相因るといふから父の其眞心は子をして自ら孝道を盡さしむるに至るものである。故に人の父と語れば先づ子を畜ふことを語るといふのである。之と同じく、人の子と語れば先づ孝道を語るのである。以下兄弟君臣と語るにも必ず各自の本務について語

るといふのである。儀禮の士相見禮に「君と言へば臣を使ふを言ひ、大夫と言へば君に事ふるを言ひ、老者と言へば弟子を使ふを言ひ、幼者と言へば父兄に孝なるを言ひ、衆と言へば忠信慈祥を言ひ、官に莅む者と言へば忠信を言ふ」とあるは同一の精神であるが、但彼は君臣を先にし、此は父子を先にして居る處に其書の特色が見はれて居つて面白いと思ふ。

君子之孝也忠愛以敬反是亂也。盡力而有禮、莊敬而安之。

【通解】前にも述べたやうに、孝は愛と敬とによつて成るものである。即ち忠を以て愛し、禮を以て敬せなくてはならぬ。愛敬の軌道を外れたものは亂である暴である。されば子夏が「父母に事へては能く其力を竭す」と言つたやうに、孝子は親に對して全力を盡すと共に、かの禮敬を忘れず、親の體を養ふばかりでなく、親の志を養つて、親をして常に安心させるやうに努める。孝經にも「愛敬親に事ふるに盡く」とあり、又「慈愛恭敬、親を安んじ名を揚ぐ」とあるは、共に愛の偏廢すべからざるを言つたものである。

字義　莊敬。莊は嚴かに恭しきこと。論語に「之に臨むに莊を以ですれば敬す」とある。一本には莊敬を恭敬に作つてある。

微諫不倦。聽從不怠。懽欣忠信、咎故不生。可謂孝矣。

【通解】親に正しからざる事のあつた時、子として之を諫めるのは固より善い。然し親子の間柄は君臣や朋友とは違ふ、諫めるにも出來るだけ婉曲に諷諫し、親の感情を害せぬやうにし、今日聽かれなかつたら明日、明日聽かれたかつたら又次の日、機會と機嫌とを見料つて徐ろに諫めて、遂に其非を覺らせるやうにすべきである。彼の一たび諫めて聽かれぬと、怒り恨み、遂に父子天倫の情を失ふ如きは、諫めざるよりも大いなる罪である。又親の言ふ所が正義であつたらば、勿論聽き從つて之が實行に努める。かくて父子相欣び樂しんで一家春の如く、僞らず飾らず忠信の至情を以て事へて行けば家庭に忌はしき風波もなく、憂ふべき事故もなく、瑞福や幸運が自ら來るのである。孝經に「明王萬國の懽心を得て以て其先王に事ふ、是を以て天下和平、災害生ぜず、禍亂作らず」とあるは國家を以て家とする國君の大孝を言つたものであるが、亦懽欣忠信にして咎故生ぜざるの意である。

字義　微諫。不倦。微諫は論語に「父母に事へて幾諫す」とある幾諫に同じく、親の怒に觸れぬやう徐々に諷諫すること。不倦とは此も論語に「志從はざるを見ては、又敬して違はず」とある樣に、親が諫を聽かずとも決して短氣を起さず、又機會を見て諫

めるやうに、根づよく倦まないこと。聽從不怠親の言に聽き從つて之を實行して怠らないこと。懽欣忠信懽も欣も「よろこぶ」である。親子の間が圓滿で平和で、忠信の至情を以て相接し、僞り飾りといふやうな隔てのないこと。咎故不生咎は災である。後漢書に「深く災咎を悼む」とある。故は憂ふべき事である孟子に「兄弟故なし」とある故である。

字義　不入也阮宮　保は「入は納なり、敬にして忠ならずんば諫を親に納るゝ能はず」と註して居る。胡珩は「不入」は小人の誤であると言つてゐるが、下文に「敬以入其忠」の入は、正に此「入」の字を承けたものであるから胡説を取らない。

字義　將其力阮宮

盡力無禮則小人也。致敬而不忠則不入也。

【通解】子たる者が親に對して力を盡すのみで、禮を以て之を敬することを知らなかつたならば、謂はゆる犬馬を以て養ふことになるから、未だ小人たるを免れない。又敬を致すのみで中心の至誠が無いならば、謂はゆる色莊者である。如何して親の歡心を得ることが出來ようか。温かい情を經とし、正しい禮を緯として、始て孝といふ立派な機は織出されるのである。

是故禮以將其力敬以入其忠。飲食移味。居處

は爾雅に本づいて將を送ると訓んでゐるが、「行ふ」と訓む方が穩かであると思ふ。書經にも「爾有衆を以て天罰を奉將す」とある將は行ふ義である。力を將ふとは、やはり力を盡す意である。飲食移味移は美であり、美は餘る意である。禮記郊特牲の「其蜡乃ち通じ以て民を移す」の鄭註に「移は美なり」とある。即ち飲食する物が餘分にあること。孟子にある「曾子の曾皙を養ふや必ず酒肉ありやと問へば必ず有りと曰ふ」といふのが此である。居處温愉處も居るである。温は温和、愉は愉樂で、謂はゆる和氣愉色である。家に居る親に事へては氣を和げ色を樂ませて親に心配させぬやうにすること。著心處くといふに同じ。

溫愉。著心於此濟其志也。

【通解】前述の如く忠愛と禮敬とは孝道の兩輪であつて、離すべからざるものである。故に禮敬を以て忠愛の力を行ひ、禮敬を以て忠愛の誠を納れるのである。親の飲食は常に餘あるやうにし、敬は冷かならず、忠愛は正しく行はれるのである。かくて禮親の居處には和氣愉色を以て事へる、移味は體を養ふもの、温愉は志を養ふものである。志を養ふは特に大切である。されば孔子も「孝子の深愛ある者必ず和氣あり。和氣ある者必ず愉色あり。愉色ある者必ず婉容あり」と言つて居られる。忠愛と禮敬とを偏廢せず、體養と志養と併せ行ふといふ此點に精神をおいて精進するならば、必ずや孝道の志を成すことが出來るであらう。

字義　可入を宋本には「人」とあるが勿論誤である。入は前にもあつたやうに「納る」である。即ち諫を親に納れることである。吾辭其罪辭を阮宮保は辭は自ら以て辭をなすと言つてゐる。即ち此は親の罪ではない全く己の罪であると辭を以て言ひ立てること。

字義　有子七人此は詩經邶風の凱風の末章である小序に「凱風は孝子を美するなり。衛の淫風流行し、七子有るの母と雖も猶其室に安んずる能はず。故に七子の能く其孝を盡し、以て其母の心を慰めて、其志を成すを美するのみ」とあり。七人の子が淫亂な母を怨みず、却て自らの不德を責め、我等を苦勞して育てゝくれた母を慰むる事の出來ぬのを悲しんだ詩である。夙興夜寐無忝爾所生此は詩經小雅の小宛の第三章で、小序に「小宛は大夫の宣王を刺るなり」とある。忝は辱しむるである。所生は我を生む所の意にて父母のこと。此句の前に「我日斯に邁ぎ、而して月斯に征く」とあり。即ち日月はずん〳〵過ぎ去る故に、朝は早くより起き、夜は遠く寢れ、政事に勉強して、父母を辱かしめるなと希つたのである。不自舍舍は釋と通じ、自釋とは自分の是非を辨解すること。自分の是非を辨解すれば自ら親を悪

子曰可入也、吾任其過。不可入也、吾辭其罪。

【通解】　此は孔子の言を借りて微諫の方法を陳べたものである。親を諫めて幸に親が其諫を聽き入れてくれたならば、自分が正しい賢いといふやうな顏をせず、親をして此の如き過あらしめたのは全く自分の注意の足らなかつた爲であると、其過る自ら引受けようし、又若し親が其諫を受け入れてくれなかつたならば、親の不德を恨んだり非道を怒つたりすることなく、是れ全く己が忠誠の足らずして親を動かすことが出來ないのである、やはり己の罪であつて親の罪でないとする。かういふ風に微諫すると、聽かるれば父子の親を害することなく、聽かれずとも必ず覺る時がある に違ひないといふのである。汪拔貢は最初の「子曰」の二字を他處の誤入であると言つてゐる。又王引之は本文の「可入也」と「不可入也」とを上下入れ代へ、そして「辭其罪」とは親を辱かしむる罪を辭することであると言つてゐる。

詩云、有子七人、莫慰母心。子之辭也。夙興夜寐、無忝爾所生、言不自舍也。不恥其親、君子之孝也。

【通解】　凱風の詩に「子七人あり、母の心を慰むるなし」と歎じてゐるのは、七子が親を責めず、自ら罪を引いて己を責めた辭である。小宛の詩に「夙に興き夜に寐ね、爾の所生を忝しむるなかれ」と詠じて居るのは、ひたすら己を勤め、決して己の理非を辨せないことを言つたものである。要するに罪は何處までも己に引受け、己は何處までも勉強して、親をして恥づべき行あらしめないのが君子の孝行である。

くすることになるから自ら舍かないのである。不恥其親父母に恥づべき行あらしめぬこと。

字義　順下可知順は從順、下は謙下にて年少者の長者に事ふる道である弟弟之謂也上の弟は悌順の悌なり、下の弟は兄弟の弟である。即ち兄に事へて悌順なる弟の意。先修先づ我身を修めること。

是故未有君、而忠臣可知者、孝之謂也。未有長而順下可知者、弟弟之謂也。未有治而能仕可知者、先修之謂也。

【通解】孝は愛と敬との結合である。此愛と敬とを以て君に事へれば忠である。されば未だ君に事へないでも屹度此人は忠臣であると知られるものは孝子である。謂はゆる「忠臣を求むる必ず孝子の門に於てす」の意である。此と同じく特に長者に事へずとも、其人の能く順下なるべきを知られる者は孝子である。要するに親に事へる道と、君に事へる道とは異なつたものではなく、兄に事へる道は即ち長者に事へる道である。又未だ實際の政治に當らないでも、此人は仕官をすれば必ず實績を擧げるだらうと知られる者は、平素よく身を修めてゐる人である。孝經に「孝を以て君に事ふれば則ち忠、孝を以て長に事ふれば則ち順」とあり。中庸に「身を修むる所以を知らば則ち人を治むる所以を知る」とあるのは正に此意である。

字義　故今本は「故」の下に「日」の字がある。壹孝壹弟壹は「專ら」といふ意。左傳に「人に與みする之れ壹なり」の杜註に「壹は貳心なきなり」とあり。大學の「壹是に修身を以て本となす。」の鄭註に「壹是は專ら是を行ふなり。」とある。可謂知終身を終へるを知るの意である。人は終に君に事へ長者に事へて身を終へるべきものである。されば能く君に事へ長者に事ふるを知るは身を終へるを知る所以である。今本は「一孝一弟」に作つて居る。

故孝子善事君、弟弟善事長。君子壹孝壹弟、可謂知終矣。

【通解】されば孝子が君に事へて善く忠であり、悌弟が長者に事へて善く順であるは理の當然である。有子も「其人と爲りや孝弟にして上を犯す者は鮮し。」といひ、又「君子は本を務む。本立つて道生ず。孝弟は仁を爲すの本か」と言つてゐる。君子は此根本を務むるが故に、孝に專らであり、弟に專らである。そして其孝弟を君に移し長者に移して一生を終へるから、よく身を終へる所を知ると謂はれるのである。

思ふこと今はなきかな撫子の花さくばかりなりぬと思へば　花山天皇

年へぬる竹の節をかへしても子のよを永くなさんとぞ思ふ　同

曾子大孝

大孝といふのは篇首の「孝に三有り大孝は親を尊くす」より取つて名づけたものである。此篇は孝道について論じたものであるが、孝の最も大なるものは親を尊うするにある、親と富貴を共にするは大孝であることに歸結して居るのである。

曾子曰、孝有三。大孝尊親、其次不辱、其下能養。

【通解】孝にも三樣あつて、最も大なるは其親を尊くすることである。誰しも大舜のやうに天下を以て父を養ふといふ事は出來ないが、「身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯す。」ことは出來ぬことではない。己の名を揚げることが、即ち父を尊くする所以である。其次は親の名を辱しめぬことである。積極的に親を尊くすることはなくとも、身を修め行を愼しんで、人の口にもかゝらず、公の刑にも觸れないならば、親を辱しめぬものであつて次の孝とすべきものである。又親として飢寒の苦に遭はしめず、能く之を養ふこと又其次の孝とすべきものである。大小の順序からいへばかうであるが、之を行ふ順序から言へば、親の體を養ふに始まり、親の名を辱しめぬに至り、親を尊くするに終るのである。

字義　其下能養阮宮保は養を「志を養ふ」と說いて居るが、此は普通の養と見た方がよいと思ふ下文に參は直だ養ふ者なり、安んぞ能く孝と爲さんや」とある語と矛盾するやうであるが、此は曾子自身の謙辭である。且つ養を以て孝を全括することは出來ないが、孝の下なるものとする事は出來るのである。志を養ふは下文の「意に先だち志を承くる」もので決して下孝とは言はれないのである。

字義　是何言與何といふことを言はれるかといふ意で、自から當らぬことを驚き否む時に言ふ。孟子に「然らば則ち夫子は既に

公明儀問於曾子曰、夫子可謂孝乎。曾子曰、是何言與、是何言與。君子之所謂孝者、先意承志、諭父母以道、參直養者也、安能爲孝乎。

【通解】曾子の門人公明儀は、日常師の敎を聽き師の行を視、遂に「夫子孝と謂ふべきか。」の問を發したものである。此は疑問といふよりも寧ろ師の間然するなきに心服する餘りに發した歎辭である。曾子は固より孝を以て自ら居るものではない。ど

聖なるか、曰くあゝ是れ何の言ぞや」とあるが此意である。之を重言して更に意を強めたものである。先意承志意も志も親に屬し、親の意親の志である。子たる者は親が未だ意はぬ先に萬事に氣を付け、親の志をば敬んで之を奉じて違はぬやうにする。諭父母諭は普通には上より下に告ぐるに用ふるが、此は直養直は特と音義相通じて唯の意である。

うして〳〵そんな事があらうと、強く公明儀の言を否定し、さて君子の孝を述べていふ、抑も君子の親に事へるには、親の一擧手一投足にも注意し、常に親の意に先だち善く親の志を奉じ、親をして些の不安不平なからしめるやうにせねばならず、又萬一親に正しからざる言行のあつた時には、徐ろに諷諫して終に正道に立歸らせるやうにせねばならぬ。謂はゆる志を養はれば孝といふ事は出來ない。余は唯わづかに口體を養ふに止まるのであつて、決して孝などと言はる可きものでないと答へられたのである。が孟子に「曾子のごときは志を養ふと謂ふべきなり。」とあれば、曾子は決して唯體養されたのではない事は勿論であるが、併し曾子の答を單に謙辭とのみ見る可き者ではない。曾子と雖も自らは決して孝道に於て至れり盡せりとは思つて居られなかつたのに相違ない。否孝道に於て未だ足らない未だ足らないと思つて居られたのが曾子の曾子たる所以で、又大孝の名を萬世に遺された所以であると思ふ。

字義　身者禮記には此上に「曾子曰」の三字がある。居處不莊莊は前にも解したやうに、嚴かに身を持する事。即ち平素家に居るにも惰容のないこと。莅官不敬莅　臨である官途に就く意。敬は職事を敬して忽にせぬ事。災及乎身禮記には戮及乎親とあ

身者親之遺體也。行親之遺體、敢不敬乎。故居處不莊非孝也。事君不忠非孝也。莅官不敬非孝也。朋友不信非孝也。戰陣無勇非孝也。五者不遂、災及乎身、敢不敬乎。

【通解】我身が單に我身と思つてはいけない。我の身體髮膚は盡くこれ父母の遺體である形見である。から思つた時、如何して我身を侮ることが出來ようか。否必ず我身に對して敬虔の念が生ずるに相違ない。自愛自尊の心が湧くに相違ない。そこで戰々兢々として一言一行をも愼しむことゝなる。されば家に處つて身を持すること莊ならざるも孝でない。君に事へて忠勤を奉げぬも孝でない。官に臨んで事を敬せざるも孝でない。朋友と交つて信ならざるも孝でない。戰陣に臨んで勇なきも孝でない。若し自暴となり自棄となり、此五行を成し遂げなかつたならば、必ず災厄が我身に及ぶに違ひない。即ち父母の遺體を辱かしむることになる。遺體を辱しむるは

る哉は災の本字である。

字義　烹熟鮮香禮　記の祭義には享孰羶薌に作つてある。烹は烹た肉、熟は熟した穀である。羶即ち鮮は肉の香である。薌即ち香は穀の香である。故に鮮は烹に屬し、香は熟に屬する。或は直に鮮を肉、香を穀とし、鮮香を烹熟しと訓んでも通ずる。禮記には「故」の字が無い。

字義　稱願焉稱は稱譽稱揚の稱にて褒めること。願は我にも斯る父母を辱しむる所以である。かく觀じ來れば如何して敬せずに居られようぞ。敢不敬乎の句を前後に置いて、一敬が孝道の要素であり、且つ百行の源泉なることを深く强く戒めたものである。

故烹熟鮮香、嘗而進之非孝也、養也。

【通解】親の遺體を敬し、彼の五者の行を成し遂げるこそ眞の孝行である。良肉良穀を烹熟して香氣美しく、先づ自ら試食して親に進むるが如きは、可は可なりと雖も、未だ口體の養たるを免れないので眞の孝とは言はれないのである。

君子之所謂孝者、國人皆稱願焉、曰幸哉有子如此、所謂孝也。

【通解】君子は身を愼しみ行を修めて親の遺體を辱かしめず、親に對しては敬愛の至誠を盡して事へる。實の在る所には名が伴ふものである。世人は其名を聞いて「あゝ何の誰は良い子を持つなものだ。實に幸福なものだ。あんな子を持ちたいものだ。」と褒め稱へる。己の名を揚げることは、即ち親の名を顯はすことになる。此が謂はゆる眞の孝なのである。論語に「孔子曰く、孝なる哉閔子騫、人其父母兄弟を間せず。」とあるが、普通には父母兄弟の言だけでは未だ孝を許すことは出來ぬ。世人の公評によつて始て之を許すことが出來るのである。

子あれかしといふなり。焉は禮記には「然」に作つてあつて、鄭註に「然は猶ほ而の如し」とある。然し焉然は互に通じて共に助字と見ればよい。禮記の檀弓にも「穆公召縣子而問然」とある「然」は焉と同じく助字に用ひたものである。

字義　民之本教人の德の根本となるべき教である卒爲難卒は「終」である。終を完

民之本教曰孝。其行之曰養。養可能也、敬爲難。敬可能也、安爲難。安可能也、久爲難。久可能也、卒爲難。父母既沒、愼行其身、不遺父母惡名、可

うするのが困難である意。

謂能終也。

【通解】孝經に「夫れ孝は德の本なり、敎の由つて生ずる所なり。」とある如く、孝は人間道德の根本である。そして其孝を行ふには養から始めねばならぬ。養とは親に衣食の不自由のないやうにし、且つ朝夕に安否を省みるなど、謂はゆる奉養の誠を致すのである。親を養ふことは或は出來ても、親を敬することがなか〳〵六かしいのである。又敬することは或は出來ても、親をして心から安んぜしむることは更に六かしい。一時は安んずることが出來ても、長く久しく續けることが困難である。始より終まで變ることなく、終身孝を以て一貫することは難中の難で、又最も尊い所である。孟子に「大孝は終身父母を慕ふ。五十にして慕ふ者、予大舜に於て之を見る。」とある。父母が既に歿した後も、我身は父母の遺體なるを思ひ、身を修め行を愼しみ、決して他から爪彈きせられたり、刑罰を被つたりするやうな事のないやうに努める。かやうに我身を持すれば、父母の名を辱しめることはない。即ち父母の惡名を遺すやうな事はない。此が謂はゆる能く終るといふものである。漸層法の筆を以て、孝の終を完うすることの至難なるを言ひ、最後の一節は更に「終」の義を說明したものである。

字義 仁者仁此者上の仁は實字で下の仁は虛字である。此を仁するは此を愛して身より離さぬやうにすること。「此」は孝を指したもの。以下の八つの「此」も皆孝を指したものである。忠者中此阮宮保は中を「億すれば則ち屢中る。」の中

夫仁者仁此者也。義者宜此者也。忠者中此者也。信者信此者也。禮者體此者也。行者行此者也。彊者彊此者也。樂自順此生、刑自反此作。

【通解】孝はあらゆる德行の根本である。仁といふものは、此孝を變して心より離さない德に名づけた名である。義は此孝を時と處とに應じて宜しきやうに行ふことである。忠は此孝が中に滿ちて、それから發したものである。信は此孝を心より信じて之を外に表はしたものである。禮は此孝を體得し履行することである。善行とは要するに此孝を各種の方面に行ふことである。勉强するといふ事は、他の義ではない、此孝を勉强することである。孝は人間の生命であり、社會の基礎である。されば一身の樂も一家の樂も、將た一國の和樂も此孝道に順ふによつて生ずる結果である。若し之に反して孝道に逆つたならば、一身は刑戮の人となり、一家は、衰運に傾き、大にしては一國の滅亡を來すことになる。警むべきことである。畏るべきことである。

であると言つて居るが、中心の中と見て、心の中に此を守つて居る意に取つた方がよいと思ふ。禮者體此體とは體につけて離さないやうにする。謂はゆる拳々服膺する意である。尤も禮記や呂氏春秋には體の字を「履」に作つてある。彊者彊此彊は強に同じく、「つとむる」である。

字義　孝者天下之大經也經は緯と對する名で、始より終まで變らざること機の經絲の如しの意である。即ち孝は仁義忠信等の大本となるもので天下に通じて決して變ずることなき大道である。禮記には此一句が無い。置之而塞於天地置は字のまゝに置くと讀んでも通ずるやうであるが、詩經の商頌に「我が鞉鼓を置つ。」とあり。鄭註に「置は植つなり。」とあるから、立つと訓むがよい。塞は充塞の意である。孟子にも浩然の氣を稱して「直を以て養つて害するなければ天地の間に塞がる」とある。「之」は言ふまでもなく孝を指したもの、孝道の大なるを形容したもので、孝道は無形なものであるが、有形的に之を假想して天地の間に立つれば、其大なること天地に充滿するに足るとの意である。衡之衡は合從連衡の衡で、横の字に同じ。横に横はり充つるの意がある。孝經に「孝弟之至、光於四海」の光はやはり横はるの意である。光と横とは音通であつて、尚書の「四表に光被す」を漢書には「横被」に作つてある。禮記には(溥)に作つてある。溥は普にて遍く行き渡らせる意である。施諸後世而無朝夕朝とは朝と夕との變化をいふ。孝道は現世のみならず、後世に施しても善く行はれて、決して時代によつて變化ずるものではないといふ意。

夫孝者天下之大經也。夫孝置之而塞於天地、衡之而衡於四海、施諸後世而無朝夕。

【通解】孝はあらゆる德行の根源であつて、人間の履むべき最も大なる常道である。若し之を天地の間に立てたならば天地の間に充ち塞がり、之を四海の外に擴げたならば四海の外に横はり滿つる程至廣至大の道である。而も獨り現世のみならず後世に施しても決して動くこともなく變ることもない。此が孝の孝たる所以である。謂はゆる「これを古今に通じて謬らず、これを中外に施して悖らず。」である。淮南子原道訓に「夫れ道は之を植てゝ天地に塞がり、之を横たへて四海に彌り、之を無窮に施して朝夕する所なし」とあるのは、此に本づいたものである。

字義　推而放諸東海而準放は至るである。孟子に四海に放るの語がある。準は「平」である。孝

推而放諸東海而準、推而放諸西海而準、推而放諸南海而準、推而放諸北海而準。詩云、自西自東、自南自北、無思不服。此之謂也。

【通解】古今東西、孝の行はれぬ時はなく、孝の行はれぬ處はない。若し孝を東海に至

といふものは諸らしめたならば、換言すれば孝道が東海に行はれたならば、東海は必ず平かに治まを推して東海の遠きに至るであらう、西海も南海も北海も同樣である。孝道に國境なしともいふべきである。たならば東海は平かに治まる意　されば詩經に武王の德を稱して「東より西より南より北より、服せざるなし」と歌つてゐる詩は、移して孝の德を讃美した詩とも見られるのである。

詩云詩經の大文偃王有聲の詩である。無思不服思は助辭である。服は悅服である、此詩は武王が鎬京を建て辟廱を作り、武を偃せ文を興したのを、四方の人が悅んだことを述べたのである、

字義　大孝不匱詩經大雅既醉篇に「孝子匱しからず、永く爾に類を錫ふ」とあり。毛傳に「匱は竭なり」とある。孝道の竭き極まる時無く、我より彼に、家より國に、感化を及ぼすことを言つたものである。中孝用勞は精神を勞すること。小孝用力力は專ら形體の力を指す。

字義　博施備物孝德の敎化を廣く四海に施す、さうすると四海各地より種々なる品物を來貢する故、四方の物を備へて父母を奉養する事が出來る。慈愛忘勞禮記には慈愛の上に風化を及ぼすことか無いとは限らない、此は唯大體の論である。

孝有二、大孝不匱、中孝用勞、小孝用力。

【通解】此篇首にもに孝に三種あるとを說いてあつたが、此處に述べてある孝の類別は稍彼と趣を異にし、此は位の高下によつて區別したものである。即ち大孝は王者の孝、中孝は士大夫の孝、小孝は庶人の孝を言つたものである。王者の孝は己の孝を以て博く四方を風化して行くべきものである。士大夫の孝は身を辱かしめぬやう、親の名を辱かしめぬやう、精神を勞するものである、庶人の孝は專ら形體の力を用ひて父母を奉養する所にある。併しから區別はしてあるものゝ、決して定規で度るやうに確然と區劃し得るものではない。大孝も力を用ふることもあれば、小孝も人

博施備物可謂不匱矣尊仁安義可謂用勞矣慈愛忘勞可謂用力矣

【通解】王者は己の孝德を博く四方に及ぼして四方を悅服せしめ、其來貢する品々を以て、父母に供し祖先を祭るのである。此が謂はゆる匱しからざる孝である。仁を尊ぶは愛の至である。義に安んずるは孝の至である。愛と敬とを以て孝を修め親に事へるのが謂はゆる勞を用ふるの孝である。「親思ふ心に勝る親心」である。その親の慈愛を思つての親の爲に粉骨碎身の勞を忘れるのが、謂はゆる力を用ふるの孝といふものである。禮記には小孝を先にし大孝を後にし、丁度此と反對の順序に書いてある。

に「思」の字があつて、親が己を慈愛するを思うて、親の爲に勞苦を忘れるの意としてゐる。併し此まゝとすれば、子が親を慈愛することとてある。慈は多く親が子を慈しむことにも用ひるが、子が親を愛することにも用ひる。慈孫とか慈烏とか皆親を愛するの意である。孝經にも「慈愛恭敬親を安んじ名を揚ぐ」とあり。併し今は前説に從つておく。

字義　加之如此謂禮終矣加之の二字は王念孫も既に之を疑つてゐる。衍字であらう。一説こ「如」の一字を衍字とし、「之」の字を「如此」の下に置くべしと言つて居る。さうすれば意味はよく通ずる。禮記には「父母既に歿すれば、必ず仁者の粟を求めて之を祀る。此を之れ禮終ると謂ふ」に作つてある。禮とは父母に對する禮にて孝道を指したものである。

字義　傷瘳瘳は癒に同じく病のいはゆること。書

父母愛之、喜而不忘。父母惡之、懼而無怨。父母有過、諫而不逆。父母既歿、以哀祀之。加之如此、謂禮終矣。

【通解】父母が自分を愛してくれたならば、その愛情を感謝して忘れず、常に之に報ゆることを思ふべく、又父母が自分を惡むことがあれば、罪た己に反求して、懼れ慎しんで父母に獲られるやうに努め、決して怨むやうな事はない。順境に於ての孝はまだ容易いが、此逆境に處する孝は非常にむづかしいものである。舜の大孝は實に此にある。孟萬章篇に「父母之を愛すれば、喜んで而して忘れず、父母之を惡めば勞して怨みず。」とあるは此に本づいたものであらう。孝經に「不義に當つては子も以て父に爭はざるべからず」とあるやうに、父母に過があれば諫めねばならぬが、前にもあつた通り、父母を諫めるは君を諫め友を戒めるとは違ひ、微諫して感情を害せぬやうにするが肝要である。以上は生前に於て事へる道であるが、若し父母が歿したならば、哀戚の情を以て之を葬るは勿論、孝經にも「春秋祭祀、時を以て之を思ふ」とあるやうに、哀戚追慕の情を捧げて之を祀るべきである。生前の孝に比して死後の孝は更に至難である。論語に曾子が「終を愼しみ遠きを追へば民德厚きに歸す。」と言つて居るのは正に此である。「去る者は日に疎し」などは決して孝子の眞情でない。「霜露既に降れば、君子之を履んで必ず悽愴の心あり。其寒を之れ謂ふに非ざるなり」とある如く、君子は時氣の移り節物の變るにつけて常に父母を思ふのである。孟子も「大孝は終身父母を慕ふ」と言つて居る。故に此死後の孝を盡して始て孝道終れりとなすべきである。

樂正子春下堂而傷其足。傷瘳數月不出、猶有憂色。門弟子問曰、夫子傷足瘳矣、數月不出、猶

經に「若し藥瞑眩せざれば厥疾瘳にす」とあり

字義　善如爾之問也。如は助字である。呂氏春秋に

有憂色何也。

【通解】樂正子春は曾子の弟子である。公羊傳に「樂正子の疾を視るや、復一飯を加ふれば脫然として愈ゆ、復一衣を加ふれば脫然として愈ゆ、復一衣を損すれば脫然として愈ゆ」とあるを以て、如何に親の疾を視るに周到であつたか、如何に孝道に厚かつたか、略其人と爲りを知ることが出來る。其樂正子春が、或日堂を下らんとして足を傷けた。さしたる怪我でもなかつたので其傷は間も無く癒にたのであるが、其後數月を經過しても門外に出でず、鬱々として憂はしき樣子であつた。其憂色を見て取つた門弟子は師に向つて其故を尋ねた。門弟子の問に前の事實を繰返すのはくだ〳〵しいやうであるがさうでない。寧ろ自然の描寫であつて、此が謂はゆる復言法である。孟子の有名なる一妻一妾の節の如きは、正に此筆法を學んで限なき餘情を表はしてゐるのである。

樂正子春曰、善如爾之問也。吾聞之曾子、曾子聞諸夫子。曰、天之所生、地之所養、人爲大矣。父母全而生之、子全而歸之、可謂孝矣。不虧其體、可謂全矣。

【通解】樂正子は先づ門人の問を嘉し、さていふやう、今余の答ふる所は決して余の私見にあらず、親しく曾先生から承つた所である。そして曾先生は實に孔夫子から御聞きになつた所である。抑も天地の間に發生し養育されて居るものは、鳥獸魚介より金石草木に至るまで、生物無生物殆ど無數であるが、其中に在つて人ほど尊いものはない、謂はゆる人は萬物の靈長である。されば父母は其子を單に自分の子と思はず、天地間の靈物として之を敬し之を愛し、大切に生み大切に育てねばならぬ。子たるものも我身を單に我身と思はず、我身は萬物の靈長であり、且は父母の遺體であり覆育の賜なるを思ひ、自愛し自重し、意義ある人生を終へ、完全に之を父母に歸さねばならぬ。此が眞の孝行である。孝經に「天地の性、人を貴しと爲す、人の行は孝より大なるはなし」とあるは、正に此章と發明すべきものである。其體を毀傷せないで歸すのが、謂はゆる全うするといふものである。曾子もその臨終に於て「予が足を啓け、予が手を啓け、……今にして免るゝを知るかな小子」と言つは「善乎」に作つてある。善哉といふ意味である。不虧其體虧は「そこなふ」或は「やぶる」の意であるから不虧とは謂はゆる身體を毀傷しないこと。夫子孔夫子を指す。

て居るが、曾子は單に肉體を愛護して終られた者ではない。體は心を入れる器である。體と心とは決して離るべきものではない。體を愛するは即ち心を愛する所以である。されば其體を虧かずといふのも、心身を兼ねて考へた方がよいと思ふ。

故君子頃歩之不敢忘也。今予忘夫孝之道矣。予是以有憂色。

【通解】人の人たる者の、親の遺體を愼むべきこと彼の如くなれば、君子は戰々兢々と注意した上にも注意して、半歩の間も此を忘れることがない。然るに今予が堂を下る時に足を傷けたのは、全く不注意の爲である。孝道を忘れた結果、親の遺體を傷ふ大罪を犯したと思ふが故に、此の如く憂色が有るのである。

字義　頃歩禮記の鄭註には「頃は當に跬に爲るべし、聲の誤なり」とあれど、古音相通じたものであらう。荀子には頃歩に作つてある。跬は一足を擧ぐることにて半歩のことである。呂氏春秋には「咫尺を行きて之を忘るゝなし。」とある。

字義　道而不徑徑は正しき道に非ざる小路にて、自ら危險の伴ふものである。論語に「澹臺滅明といふ者あり、行く徑に由らず」とある徑である。行殆殆は危殆など熟する字にて說文に危きなりとあり。

故君子一擧足不敢忘父母。一出言不敢忘父母。故道而不徑、舟而不游。不敢以先父母之遺體行殆也

【通解】君子は一たび足を擧ぐるにも、又一たび言を發するにも、決して父母を忘れることはない。されば道を行くにも必ず正しき大いなる道を行き、危く小さき捷徑を歩まない。川を渡るにも必ず舟にて渡り、游ぎ渡るやうな危險を冒さない。此が一たび足を擧ぐるにも敢て父母を忘れぬといふものである。要するに君子は父母の遺體を愛敬して、要なき冒險を事とせないのである。

一出言不敢忘父母。是故惡言不出於口、忿言不及於己。然后不辱其身、不憂其親、則可謂孝矣。

【通解】君子は一言を發するにも、父母を忘れないから、決して他人に對して罵詈雜言

字義　惡言いはゆる惡口にて他人を罵詈すること。忿言恨み怒る言

を發することはない。曾子が「之を戒めよ、之を戒めよ、爾に出づる者は爾に反る」と言つて居るやうに、他人に向つて惡言を發すれば、其惡言は必ず他人の怨言となつて我に反るであらう。さうすれは我身を辱かしめることになる。我身を辱かしめる事は、やがて父母を憂へしむることになる。故に孝子は一言を發するにも注意して、他人の怨恨を買ふが如きことをなさないのである。

草木以レ時伐焉、禽獸以レ時殺焉。夫子曰、伐レ一木一殺レ一獸不レ以レ其時一非レ孝也。

【通解】陽春の節は草木も禽獸も生々發育する時期である。されば草木を伐つたり、禽獸を殺したりするには此季節を避け、秋氣肅殺の時を以てするがよい。孟子にも、敷罟洿池に入らずんば、魚鼈食ふに勝ふべからず。斧斤時を以て山林に入れば材木用ふるに勝ふべからず。」とある。故に孔夫子も一木を伐るにも一獸を殺すにも其時を以てせないのは孝でないと戒めて居られる。草木が萌動し禽獸が生育するのは、天地生々の仁である。宇宙自然の愛である。そして孝は人間自然の仁である。父子天倫の愛である。一木一獸の生命を奪ふのに其時を以てせず、其道を以てせないのは、天地自然の仁愛を害ふと共に、又人間の孝道を損ふことになるは當然自明の理である。是に於てか孝道が百行の本であり、大慈大悲の大德であることが益々明かになるのである。

字義 以時時とは草木を伐るべき時、禽獸を殺すべき時である。禮記月令に「是月や（陽春の月）命じて山林川澤を祭らしめ、犧牲は牝を用ふるなく、木を伐るを禁止す」とあり。同書王制には「獺魚を祭り（十月）、然る後虞人澤梁に入り、豺獸を祭り（九月）、然る後田獵し、鳩化して鷹となり（八月）、然る後蔌羅を設け、草木零落して、然る後山林に入る。昆蟲未だ蟄せずんば、以て火田せず。麛せず卵せず、胎を殺さず、夭を殀せず、巢をさ覆ず」とありて、古者動植物の愛護に用意の周到であつた事を知られる。

立ちかへり捨てゝし身にも祈るかな子を思ふ道は神も知るらむ　藤原俊成

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな　藤原兼輔

子を思ふ涙くらべば夜の鶴われおとらめや音に立てずとも　内大臣實忠

君をこそ朝日とたのめ故郷にのこす撫子霜にからすな　阿佛尼

人の子の親になりてぞ我親の思はいとゞ思ひしらるゝ　康資王母

曾子事父母

此篇は單居離の問に因つて父母に事へて幾諫する道、弟として兄に事へ、兄として弟を使ふ道を述べたものである。

單居離問於曾子曰、事父母有道乎。曾子曰、有。愛而敬。父母之行若中道則從、若不中道則諫。

字義 中道中は中庸の中でなく、命中の中である論語の「億すれば屢中る」の「中」である。伊藤仁齋の古義に「中は理に中るなり」と言つて居るが、理は即ち道である。

字義 達善而不敢爭辨親に向つては善言を進め善道を示すのみであつて、あまり理窟づめに是非曲直を辨じ爭ふことをせない。

【通解】 曾子の弟子單居離といふ人が、父母に事へるに特別なる道のあるものですかと尋ねた。曾子は先づ「有り」の一語を以て斷じ、次いで其道を陳べていふ、父母に事ふる道は忠愛の念と敬虔の情とである。若し父母の行が道に叶つて居れば愛敬の念を以て從順に事へ、若し父母の行が道に外れて居れば愛敬の念を以て微諫する。孝經にも「父、爭子あれば身不義に陷らず。」とあれば、父母と雖も諫めねばならぬ。若し諫めても其諫を用ひず、不義を行つて居るならば、子たる者は怨まず怒らず、其を親の過とせず、己がかういふ行を爲させたやうに思つて、全く罪を我身に引受け、さうして機會を窺つて更に微諫して、遂に其非を改めさせるやうにする。立孝篇に「君子の孝や、患愛以て敬す、是に反するは亂なり。」又「微諫して倦まず、疏從して怠らず、懼欣忠信、咎故に生ぜず、孝と謂ふべし」。及び「入る可くんば吾其過に任じ、入る可らずんば吾其罪を辭す」の意と參照玩味すべきである。

從而不諫非孝也。諫而不從亦非孝也。孝子之諫、達善而不敢爭辨。爭辨者作亂之所由興也。

【通解】 父母の命に從ふことのみを知つて、其過を諫むることを知らないのは孝ではない。又父母の過を諫むることのみを知つて、其命に從ふことを知らないのも孝でない。前者は愛を知つて敬を知らないものである。後者は敬を知つて愛を知らないものである。愛敬を合せ行なつて始て眞の孝といはれるのである。孝子が父母を諫むるには、唯徐に善言を進めて自ら其非を覺らせるやうにし、理論がましく爭辨せな

作亂の「作」は衍字であると王念孫は言つてゐる

字義　由己爲無咎則寧己は子自らを指す。無咎は過なしといふこと。寧は亂の反にて自然の道に悖らぬこと。即ち自分の諫に由つて親が過を免れるに至る程度

い。若し爭辨を事とすれば、必ず父子の情を害ひ、人倫の大亂を來すことになる。されば孝經にも「强諫して從はざるは善諫ならず」と戒め、禮記には「父母過有れば氣を下し色を怡ばせ、柔聲以て之を諫む。若し入らずんば敬を起し孝を起し說べば復た諫む」と敎へて居るのである。

由レ己爲レ無レ咎則寧、由レ己爲レ賢人則亂。孝子無レ私憂無レ私樂。父母所レ憂憂レ之、父母所レ樂樂レ之孝子唯巧變、故父母安レ之。

【通解】子が親を諫むるに己の諫によつて親をして大過を免れしめようと、穩かに柔かに善言を進めるは安順の道であるが。不賢を矯めて賢に至らしめようとすれば、勢論難辨爭せざるを得ないことになる。さうすれば父子の親を害することになつて人倫の大亂である。絕交を期して善を責むるは朋友の義であつて、父子の道ではない孝子は自分一個人の憂といふものなく、又自分一個人の樂もない。父母の憂ふる所が自分の憂であり、父母の樂しむ所が自分の樂である。己れの身が父母の遺體であれば、父母の體は己れの前身である。我と父母と、父母と我とは別物ではないと思ふからである。孟子が大舜の孝を稱して、「好色富貴以て憂を解くに足る者なし。惟父母に順なる以て憂を解くべし。」と言つて居るのが此である。此の如く孝子は父母の憂樂を以て己の憂樂とし、常に父母の憂樂に注意し、其憂を除き其樂を成すに務めるから、父母は安んじて日を送ることが出來るのである。

にすれば安全である。由己爲賢人則亂己の由て不賢なる親を變じて賢人たる親に爲さうとするのは、却て人倫の自然を害することになる。亂は悖亂である。孝子唯巧變孝子は親の喜憂に從つて喜憂するから巧に變ずると言つたのである。巧といへど巧言令色の巧ではない。心からさやうに變ずるのであるが、他から見ると如何にも巧に變ずるやうに見にるのである。

字義　坐如尸尸は「カタシロ」神代）とて、祭祀の時に神位の代として端然と坐して祭を享けて

若夫坐如尸、立如齊、弗訊不言、言必齊色、此成人之善者也未得爲子之道也

【通解】端坐することは祭尸の如く、直立することは祭者の如く、一問を發せず、一語を吐かず、若し言はねばならぬ時は、必ず顏色を齊へ正して言ふやうにする事は、

ゐるものである。嚴肅に坐つてあるを形容したのである。立如齊齊は齋に同じく齋戒して鬼神を祭るを言ひ、立つことの端整なるを形容したのである。弗訊訊は本來上より下に問ふのであるが、此處では問と同意に用ひたものである。成人論語に「久要平生の言を忘れず、亦以て成人と爲すべし。」とあり、朱註に「成人は猶ほ全人と言ふが如し。」とあつて、學德の一通り成立した人をいふ。

その莊敬なる態度は、成人の善行として賞するに足るが、人の子たる道としては決して上乘なるものでない。何となれば父子の間は情である親である。春のやうな溫みが無くてはならぬ。形式や外貌は成人の道として必要な事もあるが、眞に親に事ふる所以ではない。

字義　爲己望望は易經に「君子は柔を知り剛を知り、萬夫の望なり」とある望である。仰ぎ尊んで儀表とする意

單居離問曰事兄有道乎。曾子曰、有。尊事之以爲己望也、兄事之不遺其言。

【通解】　單居離は更に兄に事ふるに道があるかと問うた。曾子は之に答へていふには、固より道がある。弟たるものが兄に事へるには、之を尊び之を敬ひて己の儀表と仰がねばならぬ。假にも輕んじ侮るやうのことがあつてはならぬ、何處までも兄は兄として事へ苟くも兄の命する所は之を遵奉して違ふことがあつてはならぬ。

兄事之不遺其言他人に兄事するならば聞にるが、兄に兄事するとは餘りに當然であるといふので、阮宮保は兄を大の意として前の尊事と同じいやうに解釋してゐるが、兄を兄として事へると見ても可笑しくはないと思ふ。其言は兄の命ずる所の言である。王念孫は「兄事之」の三字を衍文と見てゐるが、「尊事之」に對したもので必ずしも衍文ではあるまい。俱望也の「也」は「其言」の下に在るべきを誤まつたものであるといふ王樹枏の說は妥當であると思ふ。

字義　兄事之此語は下句の養之と對する句であるから、「兄」の字は衍であるといふ王念孫の說は當つてゐる。養之孟子に「中や不中を養ひ、才や不才を養ふ」とある。朱註には「養は涵育薰陶して其の自ら化するを俟つなり。」とある。阮宮保は養を容なりとし寬容の意とし、盧註は隱すの意としてゐるが、此等の意は、各共通の點を以

兄之行若中道則兄事之、兄之行若不中道則養之。

【通解】　兄の行が正しく道に合うて居れば、弟道を以て從順に事へて行かうし、不孝にして兄の行が道に外れることがあつても、俄に嚴しく其非を責め、却て兄弟怡々の情を害する事のないやうに、寬容の態度を以て徐々に諫めて、自ら其非を覺らせるやうに務めねばならぬ。

て居る。

字義　養之內不養於外　養之內不養於外は家を言ひ、外は家庭の外を指す。是越之也　越は爾雅釋言に「越は揚なり。」とあつて揚ぐると訓ず。兄の過を外に揚げ見はすこと。

字義　嘉事不失時　嘉事は謂はゆるおめでたい事にて、冠を加へたり妻を娶つたりするをいふ。冠婚の時を失はないやうにすること。

字義　兄事之弟　兄に事へるやうに、敬意を以て弟を遇すること　諂　兄之道諂は屈に同じ、兄でありながら弟に兄事するから、屈するといつたのである。舍之

養之內不養於外則是越之也。養之外不養於內則是疏之也。是故君子內外養之也。

【通解】兄の行が道に中らなかつた場合に、之を容れ之を養はればならぬ事は前節に說いた通であが、それも唯家庭の內に於て養ふのみで、家庭の外に於ては毫も寬容することなく、假借することなく、其非を責めるやうであつたならば、是は兄の過を外に向つて發揚し暴露するといふものである。若し之と反對に、家庭の外に於ては養ふが、家庭の內に於ては養はないとなれば、是は兄を疏んずるといふものである。換言すれば兄に對する親切の無いものである。だから善く兄に事ふる君子は家庭の內と外とを論ぜず、其非をば寬容し、且つ諷諫し、兄をして自暴せしめず、自棄せしめず、終に正道に立歸らしめるやうにせねばならぬ。

單居離問曰、使弟有道乎。曾子曰、有。嘉事不失時也

【通解】單居離は又弟を使ふ道を聞いたので、曾子は之に答へていふやう、冠婚は人生の大禮である。長男は家を繼ぐべきものゆゑ、誰しも其冠婚には注意を拂ふが、二男三男となると往々忽がせにするものである。併し人が自暴に陷り自棄に流れる原因を探つて見ると、冠婚の時期を失ふに由ることが少なくない。故に兄たるものは弟の冠婚に對して時を失はないやうに注意することが肝要である。

弟之行若中道則正以使之、弟之行若不中道則兄事之。諂事兄之道若不可然後舍之矣。

【通解】弟の行が道に中つて居れば、兄として正しい道を以て之を使つて行けばよい、若し弟が道に中らざる行をなしたならば、宛も弟が兄に事へるやうに、益敬意を拂つて之を待遇して行く。さうすれば必ずや彼の良心に感じて自ら非を改めるに至るであらう。徒らに其非を叱責するが如きは却て彼の反感を激發するのみで効果の無いものである。併しかやうに十分に彼を尊敬し、出來るだけ柔かに彼を諭しても、猶ほ言を用ひず、行を改めなかつたならば、先づそれ限り打ちやつて後日を待つがよい。此上激論痛責するが如きは、害あつて利のない徒勞である。

舍は釋と同じくオクであるが、禮記の學記に「力問ふ能はずして然る後に之に語ぐ。之に語げて知らずんば、之を舍つと雖も可なり」とある鄭註に「之を舍いて後を須つ」とあるやうに、斷然舍てる意味ではない。暫く舍ておいて後日を待つて更に言はうとするのである。

字義　不與小之自也　與は謂なり、小正傳に「其れ必ず之を獸と與ふ」とあり、自は由と同じくヨルである。禮に由り從ふ意である。胡珩は「不與」の二字を衍としてゐるが、今は孔穎討の說に從ふ。

曾子曰、夫禮大之由也、不與小之自也。

【通解】曾子が更に禮について說明していふには、抑も禮禮といふが、禮にも大きな禮もあれば小さい禮もある。その大いなる者に由り從はねばならぬ。小さい者卽ち枝葉の禮を履んだとて、未だ眞に禮を盡したとはいへぬ。此大前提よりして弟の兄に對するにも、大いなる禮に從はねばならぬことを次に述べるのである。

字義　飲食以齒　はヨハヒと訓じ年齒のこと。飲食に當つては長幼の序に從つて

飲食以齒、力事不讓辱事不齒。執觴觚杯豆而不醉。和歌而不哀。

【通解】飲食するに當つては年齒の長幼に從ひ、勞力の事は長者に讓らず、幼者之に當り、卑賤の事も長者を推さずして幼者之を爲す。荀子修身篇にも「勞苦の事は先をする。力事不讓勞力を要すること。卽ち力仕事は長者に讓らず幼者先づ之に當るのである。辱事不齒辱事は卑賤の仕事である。卑賤の事は長幼の序に由らず、幼者が之に從ふの意で、國語晏語の「危事は黨せず」と同意である。一說に不齒は不恥の誤であるとし、幼者が長者の辱事に當つて恥ぢない意に取つて居る。觴觚杯豆禮記の孔疏に「一升を爵といひ、二升を觚といひ、三升を觶といひ四升を角といひ、五升を散といひ、總名を爵といひ、之に實たすを觴といふ。」とあつて、大小に由つて名を異にしてゐたと見にる。杯はサカヅキ類の總名である。豆は禮記の鄭註に「木を以て之を爲す、四升を受く。」とあつて高臺の杯である。和歌而不哀人の歌ふに和して歌ふ時には哀しさうにしない。樂しむべき時に悲しむのは禮に違ふものである。「君子は哭すれば歌はず、歌へば哭せず」の意である。

爭ひ、饒樂の事は能く讓る。」とある。觴觚杯豆を執つて酒を飲むことはあつても、醉つぱらつて前後不覺になるやうな事はない。人の歌に和する時に、哀戚の情を現はして他の樂しみを妨ぐるやうのことがない。此五個の事柄は固より禮に適つた行ではあるが、謂はゆる禮の小なる者であつて、大禮を履んだ者とは言はれない。

字義　夫弟者孔穎討は此　字は前節の「飲食以齒」

夫弟者不衡坐、不苟越、不干逆色、趨翔周旋、俛

の上に在るべしと言つてゐるのは卓見だと思ふそして此「弟者」の字が此節の最終の「未成於弟也」に應じてゐるのである。不衡坐衡は横である。曲禮に「並び坐して肱を横たへず」とあれば、肱を張つて坐らないこと。不苟越此も曲禮に「先生の書策琴瑟前に在れば、坐して之を遷す。戒めて越ゆる勿れ」とある意で、種々の器具を跨らないやうにする。不干逆色干は犯である。逆色は怒色である。長者に怒つた顔色があれば犯して言はない。趨翔周旋趨は小走りに行くこと。翔は肱を張つて行くこと。周旋は歩むに圓形を畫きて曲ること。禮記玉藻篇に「周還(旋に同じ)規に中り、折還矩に中る」とある。不見顔色長者の命に從つて勞苦の事に服しても不平不滿の顔色を現はさない。

仰從レ命ニ、不レ見ハ於顔色ニ。未レ成ル於弟ニ也。

【通解】長者と並んで坐する時には肱を張ることなく、長者の器具は之を跨ることなく長者に怒色あれば之を犯すことなく、長者の爲に趨翔し周旋し、種々樣々の命に從つて勞苦することがあつても、更に不平の色を具はさない。此等も弟者の體として固より正しい美しい行である。併し猶ほ小禮たるを免れない。故にたとひ以上の諸禮を行ひ盡しても、未だ弟道を成した者とは言はれない。眞に弟道を成さんには、前に逃べたやうに「君子は内外之を辨ふ」といふ所が出來ねばならぬのである。

曾子制言上

制言とは阮宮保が「裁制あるの言以て法と爲すべきなり」と言つてある通り、裁制し折衷してあつて、法度となすに足る言の意である。

曾子曰、夫レ行ハ也者行レ禮ヲ之謂也。

【通解】いつたい人間としての美しい行といふのは如何なることを意味するかといへばそれは單に禮を行ふといふ事である。換言すれば禮を行ふ程度によつて智愚賢不肖の別が出來るのである。孔子が齊の景公の政を問へるに答へて、「君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり」と言はれたのも、要するに此禮を行ふ意と同樣に解せられるのである。

字義　行也者行は人としての立派な行である。恰も道といへば自ら正しい道の意味になると同樣である。行禮禮は禮儀作法といふやうな狹義の意味ではなく、禮記祭義に「禮は履なり」とある如く、人として履行すべき道である。「己に克ち禮に復る」の禮である。

字義　老者孝焉禮記の祭統に「祭は養を追ひ孝を繼ぐ所以なり。孝とは畜ふなり」とあるによつて、此孝は老人を勞はり養ふ意と見るがよい。少者友焉少者は幼者よりも稍長じたる若者。友は友として親しく交ること。司馬溫公の語に「君子相友し道德以て成る」とある。

夫禮貴者敬焉、老者孝焉、幼者慈焉、少者友焉、賤者惠焉。

【通解】　前に禮は人の履むべき道であると言つたが、又禮は差別に對する適當の道であると言ふことが出來る。此世の中には如何しても貴賤とか老幼とか、其他種々の差別が無い譯にはゆかぬ。其差別に順應する道を履んで行くのが禮である。即ち貴い者は之を敬ひ貴び、老いたる者は之を養ひ勞はり、幼き者は之を愛し慈しみ、若き者は之と親しみ交り、賤しき者は之を憐み惠んでやる。此が禮であつて人の道である。禮記禮運篇に「父は慈に、子は孝に、兄は良に、弟は弟に、夫は義に、婦は聽く」とあるのが此意である。此差別即ち名に從つて正しき道を履むことが、我儒教の本來の主義であつて、名教の名の生ずる所以である。彼の平等主義や社會主義は我等の斷じて容さぬ所である。

字義　行之則行也

此禮也、行之則行也。立之則義也。今之所謂行者、犯其上、危其下、衡道而彊立之。

【通解】　禮といふものは、之を行へば人間としての立派な行となり、更に進んで之を立つれば萬事に宜しき義となるのである。即ち社會の秩序も安寧も此禮によつて保たれて行くのである。然るに今の謂はゆる行ふといふ連中は果して何を行つて居るであらう。下としては上を犯し、上としては下を虐げ、謂はゆる上下交々爭ひ、禮といふ大道に逆つて、强ひて小我の偏說を立て、社會に害毒を流しながら、得々として居るのは言語道斷といふきべである。

行也の行は立派な行と見る。一說に此「行」の字は「仁」の誤であるといふ。然し此篇首にも、「行は禮を行ふの謂なり。」とあるから、本のまゝ解して善からうと思ふ。立之則義也立つは行ふよりも禮に對する態度が鞏固である。論語にも「與に道に適くべきも、與に立つべからず。」とある。要するに確然と禮を立て、如何なる事があつても禮の軌道より外れないこと。義は宜である。萬事に適應する道である。立事篇に謂はゆる「復た其類に宜し。」の意である。衡道而彊立之衡は横である。道に横はるさは正しい道に循はないこと。そして强ひて新奇の說を立てゝ得意がるのである。「之」は自己一流の說を指す。

字義　無道故若故

天下無道故若。天下有道、則有司之所求也。故

若を盧注には「且つ自如なり。」とある。自如は自若と同じく、本のまゝの意である。だから孔檢討は「故若は猶ほ故の如しと言ふが如し。」と言つてゐる。或は故を「故に」と讀み、「若」の下に脫字が有るのではあるまいかとも思はれる。此まゝに解すれば、天下に道がないから、無道を行ふ輩も其まゝ許容されて居るといふ意。王引之は「天下道なき故なり、若し天下道あれば」と讀んでゐる。有司之所求也求は求拘の意にて、罪人を求めて之を拘引するのである。淮南子に「不孝不弟戮暴傲悍を求めて之を罰す」とある。興道之士特別な行を爲して一時名譽を博するやうな人をいふ。

君子不レ貴二興レ道之士一而貴二有レ恥之士一也。

【通解】正しい道に逆ひ、强ひて新奇の說を立てゝ、虛名を博するやうな輩が、平然として社會に立つて行かれるのは、要するに天下に道が無いからである。換言すれば社會に制裁力が無いからである。若し天下に道が有つたならば、斯かる輩は決して假借せらるべきものではない。必ずや官憲は之を求めて誅罰を加へるに相違ない。彼輩が自己一流の說を唱道するのは決して固い信念から出たものでなく、一種の名譽心に驅られた結果である。名譽心を餘りに奬勵すると、謂はゆる賣名衒名の徒が續出する。だから君子は名譽を外に求める人物を貴ばないで、廉恥を內に省みる人物を貴ぶのである。現今我國に於て流行してゐる種々の表彰といふ事も、其方法を誤ると、恐るべき弊害のあるといふ事を知らねばならぬ。

若由二富貴一興レ道者、與二貧賤一吾恐二其或失一也。若由二貧賤一興レ道者、與二富貴一吾恐二其贏驕一也。

【通解】斯に一人の人があつて、富貴なるが故に、或は慈善事業に或は公共事業に、莫大の金錢を持じ、其が爲に會から褒めはやされて、慈善家であるとか、公共心が厚いとか、色々名譽を博したとする。そんな人が一朝何かの災厄に罹つて貧賤となり、境遇を一變したならば、十中の八九は困亂迷惑して其處置を失するに至るであらう。此と反對に昨日まで貧賤なる境遇に居つた爲に、清廉である潔白であるなどと、名節に誇つて居つた者が、今日忽ち風雲に際會して、富貴を得たならば、恐らくは氣滿ち志驕つて、清廉は變じて貪慾となり、潔白は變じて奢侈となるであらう。斯かることは現今に於ても其實例は少なくない。されば外部に於ける名譽などによつて、其人の眞價を品定することは出來るものではない。其と同時に名譽心の挑發は危險なものである。

字義　恐其或失也　或失を「或は失ふ」とも見られるが盧注には「或は猶ほ惑の如し」となし、或失を熟語と見てゐる。後の贏驕に對する語として盧注の說が妥當である。恐其贏驕也　贏を一本に羸に作るのは善くない。贏は餘である、滿である。贏驕は氣の滿ち驕ること。

字義　富而不以道　阮宮保は「驕吝無禮の若し」と注して居るから富んで後に道ならざる行をなすと見て居るやうであるが、余は「富むのにしき道を以てしない」の意に取りたいと思ふ。「富而可求」の語法で富而を前に出したのである。

夫有恥之士、富而不以道則恥之、貧而不以道則恥之。

【通解】　前に謂ふ所の道を興す士といふのは、道を他に求むるものである。されば外物の富貴とか貧賤とかいふ地位の境遇によつて志操が變ずるのである。然るに恥ある士といふのは道を己に求むるものでゆる。故に富貴は人として、欲すべきものではあるが、若し正しき道を以て得るでなければ却て之を恥とする。孔子が「不義にして富み且つ貴きは吾に於て浮雲の如し」と言はれた所以である。貧賤には誰しも爲りたくない。然し正しき道を行つて居ながら貧賤になるのは致し方がない。唯恥あるの士は正しからざる道によつて貧賤を得ることを恥とするのである。顏回が一簞の食一瓢の飲を樂しんで居たのは、心に恥づべき事が無いからである。要するに貧富貴賤は己の外である。道は己の內である。廉恥ある士は常に內に省みて道に適つて居るか否かを慮るばかりで、外の貴賤貧富は問題外である。問題外としてゐるから「富貴も淫する能はず貧賤も移す能はず。」の境涯が得られるのである。論語に「富と貴とは是れ人の欲する所なり。其道を以て之を得ずんば處らざるなり。貧と賤とは是れ人の惡む所なり。其道を以て之を得ずんば去らざるなり」とあるは正しく此意ではあるまいか。

貧而不以此道も前節と同一筆法にて正しからざる道によつて貧を得るのである。阮宮保は「怨詛守無きが如し」と言つて居る。

字義　廧陰廧は牆に同じ、垣のかげである。而明行之王引之は「而不聞」の誤であると言つてゐる。蓋し「明」と「聞」とは字形が似て居るから誤り、又「不」の字を脫したもので

弟子毋曰不我知也。鄙夫鄙婦相會於廧陰可謂密矣。明日則或揚其言矣。故士執仁與義而明行之。未篤故也、胡爲其莫之聞也。

【通解】　論語の開卷第一章に「人知らずして慍らず亦君子ならずや」とあるが、人は誰しも他人に知つてもらひたい、己の長所を認めて貰ひたいものである。從つて若し人に知られないと、そこに言ひ知れぬ不平のあるのである。此章も其れを戒めたものである。弟子どもよ、人が己を知らぬとて不平の言を漏らすな。匹夫匹婦が堵牆の陰に相會して喃々語りあつてゐるのは、如何にも秘密な事で、誰も知るものは無さうであるが、其翌日は既に其言が世上に傳へられてゐるではないか。此の如き隱

あるといふのである。「行之」は下に屬して讀むのである。

字義　殺六畜不當及親　側雅に「馬牛羊豕犬雞之を六畜といふ」とあり、不當は時に當らざるをいふ。凡そ畜類を殺すには時を擇んで、繁殖を妨げないやうにせねばならない。孟子にも「雞豚狗彘の畜、其時を失ふ無し」とある。及親を孔檢討阮宮保は累を親に及ぼす意に取つてゐるが、洪頤煊は禮記の玉藻に「六畜を殺して其禮に當らずんば親愛の心を失ふ。」とあるを引いて「及」は「失」の誤であると言つてゐる。一說であるが下の「國」に對しては親はオヤと見るがよいやうであるから、今は前說に從つておく。

字義　蓬生麻中蓬は和名ウタヨモギといふものにて莖一二尺にて眞直に伸びざるもの。麻は莖方にして眞直に伸ぶこと七八尺に及ぶ。白沙在泥損するに至るべく、小仁に注意せざれば大仁を害ふに至るであらう。

れたる些細な事でさへも、忽ち世に知れ渡ること此の如しとすれば、士たるものが仁義の大道を執つて、正々堂々と行つて行けば、世の中の人が認めぬ筈はない。認められないのは、之を行ふことが未だ十分に篤くないからである。篤ければ終には必ず知るに至るであらう。荀子勸學篇に「善を爲し邪を積む、安んぞ　にざる者有らんや」とある意である。要するに人は「己を知るなきを患へず、知らるべきを爲すを求むる」がよいのである。

殺二六畜一不レ當レ及レ親、吾信レ之ヲ矣。使レ民不レ時失レ國、吾信レ之ヲ矣。

【通解】　六畜を殺すに其時に當らないやうな人は、同情心の乏しい人である。殘忍性の人と言はねばならぬ。かやうな人は必ず人を害し世を亂して、其禍が親に及ぶに至るは疑なき所である。又人の上に立つて其民を使ふに時を擇ばず、春稼の時と言はず、秋收の時と言はず、徵發使役するならば、終には　心を失つて國を亡ぼすに至ることも疑ふ餘地のない所である。六畜を愛する愛も愛である。親を愛する愛も愛である。民を使ふ仁も仁である、國を治むる仁も仁である。小愛を愼しまねば大愛を

蓬生麻中不レ扶自直、白沙在泥、與レ之皆黑。

【通解】　此節は友人の感化力の大いなるを喩へて、子弟に賢友を擇ぶべきを戒めたものである。莖の直からざる蓬も、直き麻中に生れずば、特に扶け矯めないでも自ら直くなるものである。又白い砂でも黑い泥中に在れば何時しか黑く染まるものである王充の論衡には「蓬麻間に生ずれば扶けずして自ら直く、白紗緇に入れば染めずして自ら黑し。」とあるは此に本づいたものであらう。孔子家語に「善人と居るは、芝蘭の室に入るが如し。久しうして其香を聞かず、卽ち之と化す。不善人と居るは鮑魚の肆に入るが如し。久しうして其臭を聞かず、亦之と化す。是を以て君子は其の

王念孫は「沙は、即ち今の紗の字にして泥沙の沙に非ず。泥は讀んで涅となす、黑色を謂ふ、亦泥沙の泥に非ず」として詳細な考証をしてゐるが、今は先づ普通の說に從ひ文字通り解釋しておく。

字義　相濟達也濟は助くるである達は至るである互に助け合つて目的の彼岸に到達するのである人非人不濟濟は成ると訓ず。人の道は人と人とが相依り相助け與に處る所を謹む。」とあるは本文の註釋と見ることが出來る。群書治要には蓬の字の上に「故」の字があるが、今は之に從はぬ。

是故人之相與也、譬如舟車然。相濟達也、己先則援之、彼先則推之。是故人非人不濟。馬非馬不走。土非土不高。水非水不流。

【通解】　人は社會的動物である。相集まつて共同生活をなして行くことは、宛も舟や車が互に助けて目的の地に達するが如く、己れ若し先んじて居れば、後なる彼を援き、彼れ若し先んじて居れば、我は後より之を推すべきである。此の如く前後相助けて行くのが人の道即ち仁である。だから韓退之も「之が前を爲す莫くんば、美と雖も彰れず。之が後を爲す莫くんば盛なりと雖も傳はらず。」と言つてゐる。故に人は人て行くでなければ成るものではない。

字義　無席則寢其趾席は座牀の上に敷くもの。阮宮保は「坐するに席を用ひ、臥するに袵を用ふ」と言つて居るが、此は袵席をねたものと見るがよからう。趾は足である。席が無けらねば長者の足もとで寢るのである。爲人負汪拔貢は「人」は「之」の誤であらうと言つてゐる。夫人阮宮保は此「夫」の字及び下節の夫杖の

君子之爲弟也、行則爲人負、無席則寢其趾。使之爲夫人則否。

【通解】　君子の年少者としての道は、行きて長者が重荷を持つを見れば、己れ長者の爲に之を負ひ、又長者と同席して己の坐席が無ければ、謙讓して長者の足もとで休むのである。此は年少者としての道であるから、老人となれば勿論かやうな事をすべきものではない。

々助け合はなくては仁道は成るものでない。仁といふ字は「二」と「人」との合成文字である。之と同じく馬も、馬と馬とが互に競うてこそ善く走ることが出來るのである。土も土の上に土を重ねてこそ高くなり、水も水の上に水が加つてこそ善く流れるのである。古語にも「泰山は土壤を讓らず、故に能く其大を成し、河海は細流を擇ばず故に能く其深に就く」と言つてゐる。之を要するに相愛し相助くるのが人間道德の根源である。

「夫」の字は共に「老」の誤である。老の篆字は耆であつて「夫」と似て居るから誤まつたものであると言つて居る。

字義　近市無賈賈は說文に「坐して賣售す」とありて行商に對する字である。老人はたとひ市に近くても自ら店を開いて商賣することはない。在田無宿宿は野宿である。耕す爲に田に在ることはあつても、野宿をするやうな事はない。行無據旅據は依據卽ちタヨル意。旅は逆旅卽ち宿屋である。行くことはあつても旅宿に投ずるやうな遠方には行かない。俞樾は「據旅は猶ほ旅距の如し、後漢書馬援傳黠羌　距せんと欲すとあり。李賢の註に旅距は不從の貌、亦或は據旅に作る、云々」と言つてゐる。何れにしても此句は解し難いやうである。夫杖可因篤焉夫は前節の夫人の夫と同じく「老」の誤であらうとの說に從つておく。杖をつくやうな老人が篤厚なる人の道に依つて行くことが出來る。

近市無賈、在田無野、行無據旅。苟若此則夫杖可因篤焉。

【通解】年老いたるものは、甲に近くても商賣を營むことなく、田に在つても野宿することなく、たとひ行きても旅籠屋に宿るやうな事がない。年少者が老者を勞ることは此の如く、己が身を約すること彼の如くあつたならば、謂はゆる孝悌の道が行はれて、老杖者はその懇篤なる仁道に因つて行くことが出來る。即ち「人、人に非ずんば濟らず。」の意である。前節の負趾否の三字、及び此節の賈野旅の三字は韻を踏んでゐる。

字義　富以苟苟は苟且苟安の意にて、なほざりなる生活をいふ。視死如歸死することを視ること、宛も我家に歸るが如く思ふ意にて、死を何とも思はぬこと。

富以苟不如貧以譽。生以辱不如死以榮。辱可避避之而已矣。及其不可避也、君子視死若歸。

【通解】不淨の財を積み、不義の富を累ねて、人道を外れた放漫な生活をするよりは、たとひ淸貧洗ふが如くであつても、正しき道を履み、正しき行を行つて、自ら令譽のある方が、人間として何れだけ生甲斐があるか知れないのである。又生を貪つて恥辱を受けるよりは、寧ろ潔く死んで榮名を取るがよい。列女傳に楚の伯嬴が「妾聞く生きて辱しめらるゝは死して榮ゆるに如かず」と言つてゐるのは此語を守つたものである、但し此身は親の遺體である、生命は天の賦與である。莊子も「生も亦大なり」と言つて居るやうに、身體を輕々しく思つてはならない。生命を容易く失なつてはならない。若し生きて居て恥辱を避けることが出來ればそれを避けるがよい。唯生きて居つては如何しても恥辱を避けることが出來ない場合には、斷然一

死を決する。謂はゆる「志士仁人身を殺して仁を成すあり」である。泰山より重き義に對しては、一身は鴻毛より輕くなるのである。此處になると決して生に戀々たらず、死を視ること家に歸るが如くなるのである。論語の「以て六尺の孤を託す可く、以て百里の命を寄すべく、大節に臨んで奪ふ可らずんば、君子人か君子人なり」の語と併せ見て、曾子の毅然たる人格を想像することが出來るではないか。

字義　不與同生父母の讎とは此天地の間に共に生活しない。彼を斃すか我斃るゝかである。曲禮に謂はゆる「父の讎は與に同じく天を戴かず」の意である。不

父母之讎不與同生兄弟之讎不與聚國朋友之讎不與聚鄉族人之讎不與聚鄰

【通解】父母の讎は謂はゆる不倶戴天の讐である。父母の讐と共に天地間に棲息するのは、生きて辱めを被るものである。必ずや讎を復するか、自ら處決するか、其一を執らねばならぬ。兄弟の讎は國を共にせない。周禮に「兄弟の讎は諸を千里の外に辟く」とあるは此意であるが、曲禮に「兄弟の讎は兵を反さず。交遊の讎は國を同じうせず」とは餘り太だしいやうである。親交あろ朋友の讎は、國を同じくすることはあつても、鄉を同じくすることはない。また疏遠なる族人の讐は鄉を同じくすることはあつても鄰を同じくすることはない。かやうに關係の厚薄によつて、其の讎に對する態度が自ら異ならねばならぬ。我國でも謂はゆる「敵討ち」を許して居た時代もあつたが、現今の國法は絶對に之を許してゐない。國家が相當の刑罰を以て復讎してくれるから、直接敵を討つことは罪惡であることを知らねばならぬ。

字義　與聚國兄弟の讎とは同じ國に居らない。檀弓に「昆弟の讎は仕ふるに與に國を共にせず」とある意である。不與聚鄉鄉は論語集解に「萬二千五百家を鄉となす」とあり、國よりは範圍が小さいのである。族人之讎不與聚鄰族人は盧註に「絶屬者をいふ」とある。此によれば親族の籍を絶つた者のやうであるが。疏族の意と見ればよいと思ふ。鄰は周禮に「五家を鄰となし、五鄰を里となす」とあるが、必ずしも此に拘泥せず、小さい一部落をいふと見ればよい。即ち疏遠なる親族の讎とは部落を共にしない意である。

良賈深藏如虛君子有盛教如無

【通解】眞に實力ある商賣人は、徒らに品物を飾つて外を衒はず、寧ろ深く藏してゐるが故に、ちよつと見ると品物の虛しいやうである。てうど其のやうに、君子は盛なる教の道を抱いてゐるけれども、自ら其學に矜らないから、何　優越せる德が無いやうである。そこに君子の奥ゆかしさを觀るべきである。蓋し當時からいふ古語が行はれたのであらう。論語に曾子の語として「有れども無きが若く、實つれども虛

字義　良賈賈は前にもあつたやうに行商に對する坐賈である。良賈は實力ある商賈人である。

しきが若し。昔者吾友嘗て斯に從事せり」とあり、史記の孝子列傳には「孝子曰く吾之を聞く、良賈は深く藏して虛しきが如く、君子は盛德あれども容貌愚の如し」とある。共に此格言の意を敷衍したものである。但し君子は故らに無きが如くする意味ではない。謙抑してゐて自らさう見にるのである。

弟子問於曾子曰、夫士何如則可以爲達矣。曾子曰、不能則學、疑則問、欲行則比賢、雖有險道、循行達矣。

【通解】弟子の或者が士たる者は如何にすれば達と爲すことが出來るかを曾子に問うた。曾子は之に答へていふやう、己の能くせざる所は、學んで能くするに至るべく、疑はしき事は知れる人に尋ねて疑を解くべく、行はんと欲することは、賢者の行に比較して之に追及せんことを希ふべきである。なほ人生の行路は決して平坦ではない。險しい坂もあれば深い淵もある。併し一歩一歩に注意して次序を追うて進んで行ったならば、必ず彼岸に到達する時がある。此が達といふものである。要するに德行を成し聲譽を得るは、一朝一夕の能くする所ではない。必ずや多年積學修養の効を積んで、始て得られるものである。

字義　可以爲達論　語顏淵篇に「子張問ふ、士何如なる斯に之を達と謂ふべき。」とあり、皇侃は「達は身命の通達を謂ふ」と言つてゐるから窮達の達と見るべきである。併し達は「聞」とは異なり、德立ち行成つて自ら名聲も揚り理想も行はれるのである。欲行則比賢行はうと思へば其行が賢人に比して如何と省みる。論語の「賢を見ては齊しからん事を思ふ」の意である。循行達循は「牆に循つて走る」の循にて一歩一歩と次第に進み行く意「夫子循々然善く人を誘く」の循々も次序ある意である。

今之弟子病下人、不知事賢。恥不知而又不問。欲作則其知不足、是以惑闇。惑闇終其世而已矣。是謂窮民也。

【通解】今の弟子たる者は、身を持することが尊大で、人にへり下ることを嫌ひ、賢者に事ふる事を知らない。知らない事を恥として問はないから、終に知る時がない。何か爲さうと思へば其知が足らないから事毎に惑はざるを得ぬ。惑ひ惑うて一生を終る。是が謂はゆる窮民といふ者である。窮は遙に達と相應じてゐる。子張が達を

字義　病下人病むは快く思はぬこと。人にへりくだる事をいやがること。是以惑闇知足らずして物事に惑ひ心の闇きこと。窮民窮は達の反、困

窮せる人民である。

字義　吾無知知は知友相知の知で相知れる友人をいふ。謂之主主は客に對していふ。「孔子衛に在つて顏讐由を主とす」の主である。即ち己れ客となつて彼を主とすることである。

問うた時、孔子は「慮つて以て人に下る」と言つて、謙退の德の大切な事を敎へて居られる。書經仲虺之誥篇に「問を好めば則ち裕、自ら用ふれば則ち小」と好問の德を稱してゐる。智愚賢不肖の差は傲慢と謙抑、好問と自用とによつて生ずると言つても過言ではない。

曾子門弟子或將之晉、曰吾無知焉。曾子曰何必然。往矣、有知焉謂之友、無知焉謂之主。

【通解】曾子の門弟子の或者が西の方晉に行かうとした。交通不便の當時魯より晉に行くといふ事は容易の事ではなかつた。而も晉に知己の無いことを憂へた。そこで曾子は之を慰め且つ勵ましていふやう、そんなにくよ〳〵心配しないで往け、初めから知つて居るならば友といふものである。初めから知つては居ないが、行きて賴るものは主といふものである。たとひ友は無くとも適當な主は得られるものである。適當な主を得れば善い知己を得たと同じい事である。蓋し「因る其親を失はずば亦宗とすべきなり」の意である。

字義　先行後言行はとかく及ばざるもの、言はとかく過ぎるものであるから、行を先にし言を後にするやうにすると、言行の一致が保てるのである。謂はゆる訥言敏行の意である。庸孰廬註に庸は用とあるが、左傳に「庸に貳に非ずや」

且夫君子執仁立志、先行後言、千里之外皆爲兄弟、苟是之不爲、則雖汝親庸執能親汝乎。

【通解】未知の地と雖も、必ず適當の主は得られるものであるのみならず、君子が固く仁を執り、確乎と志を立て、行を先にし言を後にするやう、自己の修養に務めたならば、謂はゆる「同聲相應じ同氣相求む」で千里の外も皆兄弟である。子夏が司馬牛を慰めて「商之を聞けり、死生命有り富貴天に在り。君子敬して失ふ無く、人と恭しくして禮有らば、四海の內皆兄弟なり。君子何ぞ兄弟無きを患へん。」と言つたのと同じ意である。說苑にも孔子の語として「其行を效し、其禮を修めば、千里の外も視ること兄弟の如し。」とある。併し此に反して自棄自暴し、修養に務むることがなかつたならば、千里の外はおろか、汝の親族さへも汝を見棄てるであらう。要するに此世を廣く渡るも狹く暮すも、己の心がけ一つである。子張が行はれんことを問うた時、孔子は之に對へて「言忠信、行篤敬ならば蠻貊の邦と雖も行はれん。言忠信ならず、行篤敬ならずんば、州里と雖も行はれんや。立てば則ち其前に參はるを見るなり。輿に在れば則ち其衡に倚るを見るなり。夫れ然る後行はれん。」と言は

れたのと併せ見て益々其意を明にすることが出來る。

とある庸と同じく「豈」と訓じた方が解し易いと思ふ。

父母の十恩

稅所篤子

唯しばし露を宿せる草の葉もおきふしやすきものとかは見る　（懷胎守護）
いき死にの海の波間をわけてこそこの白玉はかつぎあげしか　（臨產受苦）
鶯の谷のと出づる一聲にこそその寒さは忘れはてつゝ　（生子忘憂）
山がらす軒のすゞめも朝夕におのが爲にはあさらぬものを　（嚙苦吐甘）
思子のぬるゝを惜みとこの海に我身は浮きてねぬ夜半もなし　（回乾就濕）
父母の細乳にかけて繫がずばたまの小琴はねも絕になまし　（乳哺養育）
子の爲に洗ふつゞりの暇なみ筒井のもとに立たぬ日もなし　（洗濯不淨）
峰つゞき花より花に遊びけり待つらん親の心知らずに　（遠行嚴念）
子を思ふ關こそやがて後の世の闇きに迷ふしるべなりけれ　（爲遠惡業）
世を救ふ三世の佛の心にも似たるは親の心なりけり　（究竟憐愍）

曾子制言中

曾子制言

仁は人間の理想鄉である。仁は貧富貴賤や他人の毀譽の上に超然たるものである。君子は徹頭徹尾この理想鄉に驀進せねばならぬといふのが此篇の主意である。

曾子曰君子進則能達、退則能靜。豈貴其能達一哉、貴其有功也。豈貴其能靜一哉、貴其能守也。

字義　進則能達　進は進んで仕ふること。能は耐ふる意。卽ち可能の意である。達は顯に立身出世すること。進み仕へては驕ら

【通解】　君子は進み仕へては、職務に恪勤して匪躬の節を致し、決して傲慢不遜の行や安逸遊惰の心が無いから、能く顯達の地位を保ち聲譽を維持して行くことが出來る。又官を退いたならば、足るを知り分に安んじ、富貴利達に戀々たらざるが故に、不平もなく不滿もない。そこで寧靜の境涯を保つて行くことが出來るのである。顯達を保つ其事が貴いのではなく、顯達の地位に相當する功業を擧げることを貴ぶので

ず高ぶらず能く顯達の地位を保つこと。退則能靜退は進の反にて、仕へずして家に處ること。

ある。單に寧靜を保つのを貴ぶではなくて、其の動かず迷はずして、確然と守る所ある志操を貴ぶのである。「梁甫吟成年廿八、風雲他日豈無期、誰知天下三分計、已在悠然抱膝時。」の詩の如く、廟堂の上に立つて驚天動地の大事業を爲す者は、其の野に在るや必ず寧靜閑寂の氣宇を養ふ人で無ければならぬ。「英雄回首即神仙」も亦個中の消息を反證するものである。

靜は寧靜の意で、心の險躁ならず落ついてゐること。諸葛亮の子を戒むる語に「夫れ學は須らく靜なるべきなり。靜に非ずんば、以て學を成す無し。」とある靜である。

字義　有二觀二樣の觀方があるといふ意で、即ち進んで功ありや否や、退いて守る所ありや否やを指す。

夫唯進之何功、退之何守。是故君子進退有二觀焉。

【通解】されば進んで仕へるならば、果して如何なる功績を擧げたかを問ふべく、又官を退いたならば果して守る所ありや否やを問ふべきである。是故に君子の進退には功守二樣の觀方がある。實際現時の有樣を觀るに、一資半級を得れば得々として人に驕り、何等功績の見るべきものなく、一朝罷免の厄に逢へば、悲歎沮喪して爲す所を知らぬといふ始末である。出處進退の節によつて人の品位が略評價せられるものである。

故君子進則能益上之譽、而損下之憂。不得志、不安貴位、不懷厚祿。負耜而行道、凍餓而守仁。則君子之義也。

字義　益上之譽上は己の仕へてゐる君である。主君の名譽を益すとは臣たる者が己の功績を君の功績とし、謂はゆる美を君に歸するのである。不安貴位貴い位を安しと思はぬ意で、貴位に懇々たらざること

【通解】故に君子は時に遭うて進み仕へたならば、必ず相當の功績を擧げ、其功績を君に歸して、君の名譽を益し、又務めて民利を興し民弊を除き、人民の憂を減ずるやうにする。即ち前節の「進む之れ何の功ぞ」の意を述べたものである。又若し志を得ずして、官途に就くことが出來なかつたならば、悠然衣冠の志を脱し、貴位を慕はず、厚祿を懷はず、耜を負うて田園生活を營みながらも、正しき道を履み外さずたとひ飢ゑ凍にる窮地に陷つても固く仁を守つて動かない。即ち「退く之れ何の守ぞ」の意を解したものである。此の如く進んでは功を擧げ、退いては仁を守るといふのが、君子の正義であり、正道である。「菊を採る東籬の下、悠然南山を見る。」と

詠じた陶靖節の如きは、正しく耜を負うて道を行ふ者ではないか。一簞の食一瓢の飲、陋巷に在つて其樂を改めなかつた顏回の如きは謂はゆる凍餓すれども仁を守る者ではないか、其行ふ所は境遇によつて異なれども、君子の義に至つては一なりといふべきである。

有知之則願也、莫之知苟吾自知也。吾不仁其人、雖獨也吾弗親也。故周公曰、不如我者、吾不與處、損我者也。與吾等、吾不與處、無益我者也。吾所與處者、必賢於我。

字義　有知之之は己の功なり守なりを指す。

【通解】誰しも己を知つてもらひたいのは人情である。況して己の功や仁を認めて貰ひたいのは當然である。併し知られないで不平を懷くのは小人である。「人知らずして慍らず、亦君子ならずや。」である。たとひ人は知つてくれなくとも、自分は自分を知つてゐる、自ら省みて疚しくなかつたならば、此上もなき愉快である。松林飯山が

「磨得一團方寸鏡、自家妍醜自家知」と詠じたのも、吉田松陰が「悠々天地事、感賞在明神」と吟じたのも、徒らに他に知らるゝを求めない精神を述べたものである。羊頭を掲げて狗肉を賣る現代の思想とは實に霄壤の差である。曾子が「文を以て友を會し、友を以て仁を輔く」と言つたやうに、友は無くてはならぬものである。友の無い程寂しい者はない。富には何不足のない故岩崎翁も、親友のない寂しさをしみ〴〵感じたといふではないか。併し惡友ならば寧ろ無い方がよい。若し自分が彼は不仁である惡友であると認めたならば、たとひ友を得ることが出來ずとも、決してさやうな人と交際をしない。されば周公旦も我に及ばぬものは、友としても我を損するばかりであるから交らない。又我と同等の者は我を損することは無いが、我を益するものでないから交らない。必ず我より賢つた者を擇んで交ると言つて居る孔子の「己に如かざる者を友とするなかれ」の意である。同じく交友の道を言つて子夏は「可なる者は之を與し、其不可なる者は之を拒ぐ。」といひ、子張は「君子は賢を尊んで衆を容れ、善を嘉して不能を矜む。」と言つてゐる。甚だ矛盾してゐるやうであるが、子夏は專ら自己の進修向上の方面より言ひ、子張は寛仁を兼ねて言つてゐるもので決して矛盾ではない。曾子も周公も共に修養切磋の方面より言はれたものである。とにかく自分より劣等の人と交れば、自分は賢さうに見にるし、氣樂

ではあるし、相手は己の自由になるから、人情の弱點として自分以下の友と交りがちである。其弱點を戒めたのが此である。周公以下の三十七字は盧註には註文に入れてある。併し汪容甫は此を疑ひ、正文と爲すべきを言つてゐるが、未だ確乎とした證據はなかつた。然るに阮宮保は呂氏春秋觀世篇（呂氏春秋は曾子の文を加刪改易せるものが多い）によつて、必ず正文なるを確めたので、今は阮本に從つたのである。

故君子不假貴而取寵、不比譽而取食。直行而取禮、比說而取友。

字義　不假貴而取寵　權貴の人の地位や勢力を假り賴んで君の寵愛を得ようとしない。不比譽而取食　比の字については種々の說があり、或は比較の義とし、或は比附の義としたのもあるが、今は阮宮保が射義の鄭註に本づいて「比は親合なり。」と解した說に從つておく。食は秩祿の意、禮記に「寧ろ民をして食に浮ならしめん」の食である。相互に親しみ褒め合ひ、謂はゆる虛譽を作つて祿を求めようとすること。直行而取禮　禮を取るとは他から禮せられるのである。己の行を直くして、自ら他より尊敬せられるやうにする。比說而取友　比は比譽の比に同じ。說は悅である。心より親しみ悅んで友を得る意。言語や容貌の上の交は眞の友ではない。

【通解】　君子は自ら知るを尊び、自らを欺くことを爲さない。故に他の貴顯に倚つて君寵を得ようなどとはしない。閨閥によつて地位を求めようとしたり、財閥を賴んで勢力を得ようとする根性は君子の唾棄する所である。又互に褒めあひ實なき名譽を博して、秩祿にありつかうとしない。世間滔々たる自家廣告者流は君子の笑ふ所である。たゞ正しき道を正しく行つて、人から自ら尊敬を受けるのは、謂はゆる求めずして自ら至るものである。孔夫子が「溫良恭儉讓以て之を得」られたのは、夫子が之を求められたのではなく、人が自ら與へたのであると同じ意である。志同じく道合へば、相親しみ相悅んで心の友とする。「朋あり遠方より來る、亦樂しからずや」といふのが此の眞の友である。貴を假りて寵を取り、比譽して食を取るのは、小策を弄して利己心を滿たすもので、虛僞は君子の最も惡む所である。直行して禮を取り、比說して友を取るは、當然爲すべきを爲し、自ら至るのを得るので眞實である、眞實は君子の好む所である。

有說我則願也。莫我說苟吾自說也。故君子無恺恺於貧、無勿勿於賤、無憚憚於不聞。

字義　有說我說　說は悅である、我を悅ぶとは、人が自分に對して好

【通解】　社會に共存して行く者は、誰しも人に悅ばれ容れられることを願はぬものはな

意を持つてくれることである。無悒々於貧悒は心安からず憂ふること。楚辭に「武發殷を殺す何の悒ふる所」とある。貧乏に屈託しないこと悒々の字は立事篇にもあつた。無勿々於賤勿々は急遽の意で、あわたゞしさうなこと。今の匆々の義である。說文に據ると勿は州里に建つる旗で、此旗は民を趣がすものであるから、急遽のことを勿々といふやうになつたといふのである。身分が賤しいからとてあわてあせらないこと。無憚々於不聞憚々は立事篇にもあつたやうに心を勞すること。不聞は自分の名聲の世間に聞こえぬこと。人に知られぬことを氣にかけぬこと。

い。併し時あつてか世と相容れず、人に悅ばれぬことがある。其時に悶にてはならぬ。自ら省みて正義に外れた事なく、疚しいことがなかつたならば、自ら滿足すべきである。自分で滿足の出來る程愉快な事はない。故に君子は貧乏だからといつて悒々と憂ふる事なく、賤しいからといつて勿々とあせる事もなく、自分の名が聞こえずといつて憚々と心を勞する事もないのである。「疏食を飯ひ水を飲み、膝を曲げて之を枕とする。」は貧に悒々たらざるものではないか。「委吏となつては會計當らんのみと曰ひ、乘田となつては、牛羊茁として壯長せんのみと曰ふ。」は賤に勿々たらざるものではないか。「用ふれば則ち之を行ひ、舍つれば則ち之を藏する。」は不聞に憚々たらざるものではないか。

字義　疏食米即粱

布衣不レ完疏食不レ飽蓬戸穴牖日孜々上レ仁。

【通解】布の衣も十分に著ることが出來ず、玄米の飯も十分に食ふことが出來ず、其上に住居は見すぼらしいあばら屋である。衣も食も住も此の如く貧弱極まる中に在つても、志ある君子は孜々として仁を務めるのである。謂はゆる「造次も此に於てし顚沛も此に於てす」るのである。一匹夫として畎畝に耕して居た時も、南面して天子の位に昇つた時も、孜々として仁を成した點に於て毫も異なる所のなかつたのが舜である。君子たる所は實に此に在るのである。

字義　蓬戸穴牖　蓬を以て戸となし、穴を穿つて牖とする意で、貧困なる有樣を形容したものである。禮記にある篳門圭竇とか、賈誼の過秦論の甕牖繩樞など〻同じ意である。日孜々上仁孜々は孳々と同じく勤勉すること。書經に「孜々として余一人を奉ぜよ」とある。上は尙で尊ぶと訓ずるのである。日々汲々として仁を務めるのである。

ち白げざる米の飯である。孔安國が論語集解に疏食を菜食と註して居るのは、疏を蔬と解したものである。朱子は麤飯と註してゐる。

字義　訢々訢は欣に同じく喜ぶである。孟子に「終身訢然」とある。

知レ我吾無ニ訢々不レ知レ我吾無ニ悒々是以君子直レ言直行不ニ宛レ言而取レ富不ニ屈レ行而取レ位。

【通解】人が自分を知つてくれたからといつて、欣々然と喜んで得意になることなく、

悒々は前に註した如く憂ふること。不宛言而取富宛は說文に「委曲なり」とあるから、屈と同じく曲げる意である。即ち正しい言葉を屈げて富貴を取らうなどとしないこと。

字義　畏之見逐說文に據ると、畏に惡む意義があるから、君が之を惡んで逐はれると見れば、通ぜぬこともないが、汪拔貢は畏

其反對に人が自分を知つてくれないからといつて、憂へ悲しんで氣を腐らすことがない。此は謂はゆる「人を相手にせず、天を相手にする人」でなくては出來ない事である。君子は他人の毀譽を以て欣戚となさず、徹頭徹尾己の言を直くし己の行を直くして行くのである。富を取るが爲に言葉を曲げたり、位を得るが爲に行を屈げることはない。必ずしも貧賤を好んで富貴を惡むわけではない。不正なる手段を以て富貴を得るのは君子の爲さぬ所である。

畏之見逐、智之見殺、固不難。詘身而爲不仁、宛言而爲不智、則君子弗爲也。

【解解】君子が朝に立つ時、或は不德の君に際會する事もある。或は邪惡な同僚に遭遇することもある。そんな場合には己が仁なるが故に、却て排斥の憂き目を見ることもある。己が智なるが爲に却て刑戮の害に會ふこともある。楚の忠臣屈原も、懷王の不明と上官大夫の讒誣とによつて、遂に汨羅の鬼となつたではないか。併しそれは君子は難しとはしないのである。如何に排斥せられようと、又殺戮に會はうとも

は「仁」の誤である、初め形の上から仁を位と誤り、更に聲を以て位を畏と誤るに至つたのだらうと言つてゐる。成程下の仁智の字に對應して、其方が善いと思はれる。己は仁でありながら却て逐はれるの意である。孔檢討も此說を取り、正文を仁と改めてゐる。

字義　雖言不受君が臣の言を受け納れずともといふ意、以下皆同一の語法である

己の身を屈して不仁を敢てしたり、己の言を曲げて不智を裝ふやうな、卑怯な陋劣な事は君子の爲さない所である。「寧ろ湘流に赴いて江魚の腹中に葬らるとも、又安んぞ能く皓々の白きを以て世俗の塵埃を蒙らんや。」凜乎たる屈原の辭は千歲の下懦夫をして起たしめるのではないか。王念孫は固不難の三字は前後接屬しかねるやうであるから、多分脫誤があるであらうと言つてゐる。

君子雖言不受、必忠曰道。雖行不受、必忠曰仁。雖諫不受、必忠曰智。

【通解】君子はたとひ君が不明にして己の善言を採用せずとも、何處までも忠誠を以て其言を薦めて行く。此が人としての正しい道である。又君が正しい行を受け納れる度量がなくとも、我は何處までも忠誠を以て其行を守つて行く。此が眞に君を愛する仁である。又君が頑固にして諫言を聽き入れずとも、我は忠誠を以て如何にかし

て其諫を納れようと思ふ。此は一方から見れば馬鹿らしいかも知れぬが、此が眞の智といふものである。孟子に公明高が舜の德を讃美して「孝子の心を以て是の若く恝ならずと爲す。」とある、恝とは愁無き貌である。即ち自分の務むべき事を務めて親が自分を愛してくれねば致し方がないと冷然と諦めることである。孝子の心はそんな冷かなものではない。忠臣の心もさうである。一度や二度で己の言行が用ひられず、己の諫が受けられぬと、此君は駄目であると言つて、冷然と見棄てるやうな事は決して君子の爲すべき事ではない。

天下無レ道、循レ道而行、衡塗而賃、手足不レ揜、四支不レ被。詩云行有死人、尙或墐之則此非士之罪也、有レ士者之羞也。

【通解】天下に道なく、忠誠の士が用ひられず、道路に窮死して、屍を横たへ、しかも誰しも世話する者も無いと見にて、手足も覆はれずに暴されてゐる。誠に無慘な有樣である。詩經の小雅小弁の詩に道に死人があれば、たとひ親族知友の關係はなく

字義 循道而行此道は道路の意である、不明の君に逐はれて何處ともなく道路に沿うて落ち行くこと。衡塗而賃衡は横はるである。塗は路である。賃は僵るゝである。死骸を路に横たへて斃れてゐること。手足不揜揜は掩に同じく覆ふこと。死骸に何の被せ物もないこと。尙或墐之墐は詩經の毛傳に「路冢なり」とある。屍を埋めて路傍に冢を立てること。

とも、尙ほ之を埋めて標の塚を立てゝやるのが人情である云々といつてゐるのは、蓋しかういふ行斃れを憐んだ者であらう。此の如き同情をこそ受くれ、其の斃れた士には何の罪も無い。唯かゝる士をかゝる無慘な最後を遂げさせたといふのは、全く此士を抱へてゐた主人の罪である恥辱であるといはねばならぬ。要するに「生きて以て辱しめらるゝは、死して以て榮なるに如かず。」の意を強く言つたものである戴校本や孔檢討本は「詩云行有死人、尙或墐之」の十字を注文が誤まつて正文に入つたものだと斷じてゐる。成程說苑の說叢篇には「士横道而偃、四支不掩。非士之過、有士之羞也」とあつて、詩經を引いてない、且つ有士を有士に作つてゐる。有士は士地を領有して居る者の意で、やはり士の事へて居た主人を指すから、有士者といふも大意に於て變りはない。主要な問題は詩經の詩が正文であるか、注文の誤入であるかである。阮宮保は固く正文說を主張し、戴本の根據なる永樂大典本も左程信用すべきものではないと言つて居るが、私は前後の文格から觀て注文誤入說に贊成するものである。

是故君子以レ仁爲レ尊。天下之爲レ富何爲レ富、則仁

字義　是故の二字を汪拔貢の正誤には衍文としてゐるけれど、必ずしも削らなくてもよいと思ふ

字義　唯以得之汪容甫は以の字は仁の誤であると言ひ、孔檢討は

爲レ富也。天下之爲レ貴何爲レ貴、則仁爲レ貴也。

【通解】是故に君子は生命よりも、何よりも彼よりも、仁を以て最上の尊としてゐる。世の中には謂はゆる富豪も有れば成金も居る。併しそんな物は眞の富ではない、眞の富は仁其物である。位爵勳等なども貴いものである、併しそれが果して眞の貴であらうか。否眞の貴は如何しても仁其物でなくてはならぬ。何となれば晉楚が之を奪ひ得るからである。孟子に曾子の語を載せて「晉楚の富は及ぶ可らざるなり、彼は其富を以てし、我は吾仁を以てす。彼は其爵を以てし、我は吾義を以てす。吾何ぞ慊ならんや。」とあるのは即ち此である。孟子が「仁は天の尊爵なり。」の信念は此邊から得たものであらう。眞に仁を最上の富貴と信じなければ「富貴も淫する能はず。」といふ大丈夫の心事に達することが出來ぬのである。

昔者舜匹夫也。土地之厚則得而有之、人徒之衆則得而使之。舜唯以得之也。是故君子將說之に從つて正文を改めてゐる。王引之は以の字の下に仁の字が脱してゐると言つてゐる。何れにしても此處に仁の意を持たせなくてはならぬが、馬宗璉は「以は用なり、仁を用ひて之を得るなり。」と言つて、且つ古人の辭は質であるから、上文から推して仁を用ふることであることは首肯かるると說いてゐる。

字義　死於溝澮之

富貴必勉於仁也。

【通解】昔舜が畎畝に耕し河濱に陶してゐた時には、眇たる一匹夫であつた。しかも一朝天子の位に昇り、天下の廣き土地を有し、天下の衆き人民を使ふ身となつたのは、唯仁を用ひて之を得たのである。即ち孟子の謂はゆる「天爵を修めて人爵之に從ふ」ものである。此の如くにして得た富貴は決して卑しむべきものではない、否尊いものである。是故に君子は富貴を語れば、必ず同時に仁を勉むるやう說くのである。若し仁を說かずに富貴のみを語つたならば、孟子の謂はゆる「上下交利を征つて國危し。」の結果となるのである。論語の「子罕言利、與命與仁」を徂徠が「孔子罕に利を言ふ、利を言へば必ず命と俱にし、必ず仁と俱にし、其の單に利を言ふ者幾希なり」と言つてゐるのは、此節の意味と合致してゐて面白いと思ふ。

昔者伯夷叔齊仁者也。死於溝澮之間、其仁成

間。孟子に「溝澮皆盈つ。」とあり趙註には大溝小溝とあるが、周禮によれば澮が溝より大きい。とにかく澮もミゾである。論語にも「匹夫匹婦溝瀆に經る」とあるやうに野たれ死にをすること。居河濟之間河は黃河、濟は濟河である。河濟の間は今の山東省で、孟子に謂はゆる「伯夷紂を辟けて北海の濱に居る。」といふのである。綴も表と同じく色々な目じるしに用ひるものであるが、表は單に表木であり、綴は他の物が繫いであるらしい。禮記郊特牲に　表暾とある暾は綴に同じ。

名於天下。夫二子者居河濟之間、非有土地之厚、貨粟之富也。言爲文章、行爲表綴於天下。

【通解】伯夷叔齊は古の仁者である。しかも史記に據れば、義を以て周の粟を食ふを恥ぢて、首陽山に餓死したといふことである。此は溝澮に陷つて死んだともいふべく、塗に衡はつて僨れたともいふべく悲慘な最期である。しかも遂に仁道を離れなかつた芳名は、天下に鳴り後世に輝いてゐる。抑も伯夷叔齊は初め河濟の間の片田舍に居り、廣い土地を持つてゐた譯でもなく、又多くの財產を積んで居た譯でもない。然るに其言は燦然たる文章となつて天地間に留まり、「父死して未だ葬らず、斯に干戈に及ぶ、仁と謂ふべきか。臣を以て君を弑す、仁と謂ふべきか。」の如き、實に千古不磨の金言となつてゐる。又仁を求めて仁を得て遂に餓死した行は、凜乎として天下の模範となすに足り、百世の下その風を聞けば懦夫をして起たしめるではないか。「匹夫にして百世の師となり、一言にして天下の法となる」とは、移して伯夷叔齊の贊辭とすることを出來る。

是故君子思仁義、晝則忘食、夜則忘寐、日旦就業、夕而自省、以歿其身。亦可謂守業矣。

【通解】舜にしても伯夷叔齊にしても、人間として尊ぶべきは、其天爵にある仁義にある。人爵の尊卑は人格の高下を語るものではない。それだから君子は常に仁義の存養に志し、寢食をも忘れるに至るのである。孔子も「憤を發して食を忘れ、樂しんで以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らず。」と言つて居られる。朝には孜々として業に就き、夕には靜に終日の行を反省し、謂はゆる學んでは思ひ、思うては學び、かくて意義ある一生を了するのが、能く業を守るといふものである。日旦以下の文は立事篇にあつたと同じく唯省の字の下に「思」の字が無いばかりであるから、參照して觀るがよい。

曾子制言下

此篇は、君子は德を秉り己を持し、貧賤に安んじ、困窮を事とせず、決して亂れたる世に阿附して富貴利祿を貪らないことを說いたものである。

曾子曰、天下有道、則君子訢然以交同、天下無道、則衝言不革。

字義　訢然以交同　訢は欣と同じく喜ぶである。交同は世間の人と交り合致してゆくこと。衝言不革　衝は平である言を平かにする

【通解】天下に道が有れば、君子は治世を喜び、治世に際會せるを喜び、欣然として世と容れ世と交るのである。併し若し不幸にして天下無道の時に遭遇したならば、言を平穩にし、決して危急の言を用ひない。此が賢哲身を保つの法である。亂世に在つて徒らに言を危うするのは身を危うするのみで害あつて益のない事である。論語に「邦道あれば言を危うし行を危うし、邦道なければ行を危うし言孫ふ。」とある意とは、言を危くせないで世に順ひ、そして害に遠ざかるやうにすること。不革を己の守るべき所を改めない意に解した說もあるが、私は阮宮保の說を取る。それは革を急の意に解し、急激な言を用ひて人に迫らないとする。禮記の檀弓に「夫子病革る」とあるを鄭註に急としてゐるのと同例である。普通に革るをアラタマルと訓むのは不可である。

諸侯不聽則不干其土。聽而不賢則不踐其朝。是以君子不犯禁而入人境。不通患而出危邑。

字義　不干其土　干は犯すである。其領土に犯し入ることをしない　不賢則不踐其朝　不賢則不踐其朝　賢を知り己を賢として採用してくれるでなければである。但し伊藤仁齋が「孫ふは阿諛に非ず、害に遠ざかるのみ」と言つて居るやうに、言を衝かにするといふのも、世間に附和雷同するといふ意味ではなく、稍鋒刃を收めて禍を避くるのである。

【通解】諸侯が其領土に入るを聽さなかつたならば、强ひて其土を犯して境に入ることをしない。又たとひ聽してくれても眞に己の賢を知つて採用してくれるでなければ其朝に仕へて爵祿を受けることをしない。孟子の謂はゆる「是君に事ふれば容悅をなす者なり。」は君子の恥づる所である。それだから君子は郊に及んでは必ず國禁を問ひ、禁を犯してまで人の國境に入らない。又危難ある邑に出でゝ患を共にすること

ば其朝に仕へて爵祿を受けないこと。不通患而出危邑患を通ずるは患を共にする意。危邑は邑の亂れて危難あるもの。出に經過の義のあるのは曲禮に「離立(兩立の意)するもの中間に出でず。」とあるに同じ。要するに危亂の邑を通つて患難を共にするやうな事を爲さぬこと。盧僕射の註に「師敗るとも苟も免れず。」とあるより、一本に通を改めて避とし「患を避けて危邑を出でず。」と解してゐる。併し此處の曾子の意は、前者即ち危邑に出でずの方であらうと思ふ。又一本に邑を色に作つてあるのも誤である。

字義　秉德之士不讕秉は把の意に近く、固く手に把持する意。燭を秉る、國の均を秉るの秉である。德を秉るは確乎と德を守つて離さない人である。讕は詔に同じくへツラフである。以爲己說說は悅である。己が悅ばれる、即ち他人の氣に入るやうにすること。不乘貧賤以居己尊乘は凌ぐ意。貧賤なる者を凌いで己を尊くしようとしない又他人の貧賤を侮り凌いで、己の尊さを張らうとしない。上に向つて便佞媚を求むる者は、必ず下に向つて驕慢己を高くする人である。

字義　吾不長長は周禮天官の註に「公卿大夫王子弟の采邑を食む者を謂ふ」とあるから公卿大夫を指す。不長とは公卿大夫として臣事せないこと。奉相仁義奉は承け戴くこと、相は助くること。仁義を以て其君を戴助くるをいふ。嚮爾盜寇嚮は向ふ、爾

則秉德之士不讕矣。故君子不讕富貴以爲己說不乘貧賤以居己尊。

【通解】德を持して確乎不拔なる士は、決して亂國の君に詔つて爵邑を求むるやうな卑劣な行爲をせぬ。故に君子は富貴なる人に詔つて、自分が悅ばれるやうな事をせず

凡行不義則吾不事不仁則吾不長奉相仁義則吾與之聚群嚮爾寇盜則吾與慮

【通解】君子は亂國に出で爵祿を求めないことは前節にあつた通りである。不義の君には君として事へず、不仁の公卿大夫は公卿大夫として之を戴かないこと。又臣僚に於ても仁義を以て君を翼賛するやうな人であれば、之と聚り之と交るが、若し寇盜に向ひ近づく行爲があれば、君子は恰も我事の如く思つて憂へ慮るものである。

は邇と同じく近づくにて、寇盜に近き行あること。仁義を奉相するの反對である。吾與慮與はアツカルと訓じ、自分も其事に關係すること。慮は憂ふるである。即ち己の事の如く心配する意。「奉相仁義」の句と「嚮爾寇盜」の句と相對するから、「吾與之衆群」と此句と相對せねばならぬが、此まゝでは均衡を失するやうである。或は誤脱があるではないかと思ふ。戴校本には「與」の上に「不」の字を增してゐる。

字義　突若入焉　盧註には此句の下に「鴆たる彼の晨風、鬱たる彼の北林」（鴆は鳥のはやく飛ぶ貌）の詩を引いて居るので、孔檢討は突は鴆の誤であると斷定してゐる。併し說文に「突は犬穴中より暫く出づるなり。」とあり段玉裁は「引伸して凡そ猝乍の稱と爲す。」と註してゐるから原のまゝでも通ずる。今は「猝然相見し、以て速にす可ければ速にするは孔子なり。」で、此が君子の理想であらねばならぬ。

國有道則突若入焉。國無道則突若出焉。如此之謂義。

【通解】國に道があれば、君は躊躇逡巡することなく、直に入つて仕へ、己の信ずる所を行はんとする。若し其の反對に國に道が無ければ、左顧右盼することなく、速に去つて禍を蒙らない。其の決然たる行動は端倪す可らざるものがある。此の如きを義といふのである。義は宜である、出處進退が其の宜しきを得るといふものである。論語に「邦道あるに貧かつ賤なるは恥なり、邦道なきに富かつ貴なるは恥なり。」とある。國に道ある時に當つて、進んで爲す有る能はず、國に道なき時に退いて守る有る能はざるは共に君子の恥づる所である。が孟子も言つたやうに「以て仕ふ可ければ則ち仕へ、以て止まる可ければ則ち止まり、以て久しうす可ければ則ち久しう

字義　夫有世王引之は「有世の二字直貫して刑の字に至ると言つてゐるが、私は罪の字にまで冠らせた方がよいと思ふ。義者哉曰哉は哉の誤である。哉は禮記

夫有世義者哉、曰仁者殆、恭者不入、愼者不見。使正直者則邇於刑、弗違則殆於罪。

【通解】世の中は道理一筋に行かぬものである。義を行ふ者が却て災を受けたり、仁を行ふ者が却て危い目に逢ふこともある。又身を恭しうして君に事へる者の言が君に納れられず、行を愼しんで官事に盡す身が信用せられず、正直なる者が刑戮を蒙つたり、賢者が國を去らぬ爲に罪科に處せられることがある。されば此反面には小人にして時を得たり、不仁、不義にして幸福を享ける者もあるのである。日に不辜を殺した盜跖は天壽を以て終り、聖の淸なる伯夷叔齊は首陽山に餓死してゐる。司馬遷が天道是か非かと惑うた所以である。